

第4章

対人ストレス生起過程因果モデルを 取り巻く論点

第4章第1節

対人ストレス生起過程因果モデルに関する 3つの疑問

本章では、「対人ストレス生起過程因果モデル (Interpersonal Stress Arousal Process Model)」の問題点の再検討を通じて、対人関係の両価性と精神的健康の関連を、再度議論することを目的とする。このモデルは、対人関係における否定的な出来事と、否定的であると認知された関係性を弁別した上で、対人関係の肯定的／否定的両側面と精神的健康の因果関係を検討したものであり、そこでは (1) ネットワークそのものの大きさは肯定的／否定的ネットワークの大きさを規定する；(2) 否定的ネットワーク（以下ネットワークストレイン）は否定的な対人的相互作用（同対人ストレスイベント）の生起を規定するが、肯定的ネットワーク（同サポートネットワーク）は対人ストレスイベントと関連しない；(3) 対人ストレスイベントはディストレスの直接的な規定因となり、サポートネットワークはディストレスを低減させるが、その影響力は対人ストレスイベントの否定的影響力には及ばない、ことが見いだされた。この結果は先行研究の知見とも一致するものであり、対人関係の否定的側面、ならびにその弁別の重要性が示された。しかし同時に、このモデルについて指摘された問題が3点ある。それは、(1) 因果の妥当性 (2) 第3変数の影響 (3) ネットワークの両価性の規定因である。そこで本章では、これらの問題を順次検討していくこととなる。

4-1-1 対人ストレス生起過程因果モデルの因果の妥当性

対人ストレス生起過程因果モデルは、ストレスの認知的評価・対処理論 (Lazarus & Folkman, 1984) を元に、理論的観点からモデルを構成した。さらにその実証を試みた第2章第1節では、モデル内変数の関連について基本的に単方向因果を仮定し、双方向性については、ネットワークストレインと対人ストレスイベントの関連のみ、単一時点データを用いた共分散構造分析によって検討した。その結果、対人関係の肯定的／否定的両側面と精神的健康の関連、特に否定的側面が肯定的側面以上に精神的健康に影響することが明らかにされたが、その因果を議論するには、同一時点で測定した変数をモデルに当てはめてみるだけでは決して十分ではないであろう。なぜなら、現実には精神的健康度の悪化が対人関係を悪化させるなどの、仮定されたモデルと逆方向の因果も当然考えられるからである。例えば Rook, Pietromonaco, & Lewis (1994) は、うつ状態にある人 (dysphoric individuals) は社会的相互作用を否定的に見なしがちであることを見いだしている。また、

Davila, Hammen, Burge, Paley, & Daley (1995) は、対人ストレスが前後の抑うつを媒介し、葛藤解決方略が対人ストレスを予測するという因果を見いだしているが、これはそもそもストレス研究や対人葛藤研究における基本的枠組み（対人関係上の問題が生じた後に解決方略が用いられる：Figure 1-4-1、Figure 1-4-2参照）と合致しない。また、直接的に対人ストレスを扱った研究ではないが、疫学やコミュニティ心理学において主体的要因と環境的要因の因果を議論した、社会的要因説と社会的淘汰説の論争（e.g. Aneshensel, 1992；Turner et al., 1995）でも、明確な結論は見いだされず、互惠性を前提とすべきではないかという見解が提出されている。本論文はこれまで、環境的要因が個人の適応を左右するという方向の議論を展開してきたが、これらの指摘のように分析結果とモデルの食い違いが頻繁に生じるならば、（理論に基づくものであれ分析結果に基づくものであれ）単方向因果の仮定自体を疑問視する必要もある。

しかし課題の性質上、因果を明確化し得るような実験の実施はほとんど不可能であり、これらの因果に関する議論の多くは、実験の代わりに縦断研究を行うことによって検討されてきた。そしてこれまでも、その数は決して多くはないが、対人関係の肯定的／否定的両側面を包含した縦断研究も過去にいくつか行われており、心理的適応の予測において否定的側面は肯定的側面と（少なくとも）同等に重要であることが示されている。まず、それらの先行研究を概観してみよう。

Abbey et al. (1995) は248組のカップルの2年間の縦断研究を行っている。ここでは、サポート／軽視の授受がともに複雑なパスを経てストレスと結婚生活満足感の関連を媒介することが見いだされている。なお、サポートと軽視の相対的な影響力に一貫性は見いだされていない。

Lepore (1992) は大学生を対象に、ディストレスに対する知覚されたサポートと社会的葛藤の相対的／交互作用的影響を縦断研究で検証した。その結果、ルームメイト／友人との葛藤は経時的なディストレスの増加を予測し、同時に友人／ルームメイトからのサポートはそれらの影響を希釈化した。つまり、片方で葛藤があっても、もう片方でサポートがあれば精神的健康は維持されるという補完的效果が見いだされている。しかし、最終的なディストレスに対して最も説明力が高いのは初期のディストレスである。また、ルームメイトではサポートと葛藤が逆相関するのに、友人ではそれが独立であるという興味深い結果もこの研究では見いだされている。

Pagel et al. (1987) はアルツハイマーの配偶者を持つ介護者に、面接時（ $N=68$ ）とフォローアップ時（ $N=38$ ）の各回で、ネットワークの肯定的側面と否定的側面を質問している。その結果、同一時点では、抑うつ／ネットワーク満足感ともに否定的側面の影響が大きく、肯定的側面は否定的側面との交互作用項になったときに若干影響したにすぎなかった。縦断的には、フォローアップの抑うつはやはり以前の抑うつに強く規定され、それに加えてフォローアップ時の否定的側面が有意である。しかしこの研究は、調査対象の独自性もあ

って被験者数が少なく、参考にとどめるべきかも知れない。

Vinokur & van Ryn (1993) は、ソーシャルサポートとソーシャルアンダーマイニングが独立したインパクトを持つことを実証している。そこではアンダーマイニングは各時点で影響力を持つ一方で、サポートも弱い安定した影響力を持つことが示され、この結果は Taylor (1991) の活性化-最小化仮説と一致している。ただし、精神的健康を従属変数とした構造方程式モデルは、同一変数を投入するとやはりその影響力が強く、サポートの寄与は有意ではない。また、アンダーマイニングは同一時点のものは正に有意、前回のものは負に有意になるという、多重共線性の問題を示唆するような結果になっている。

さらに Vinokur, Price, & Caplan (1996) は、(1) 経済的逼迫とパートナーの抑うつが失業者へのサポートとアンダーマイニングに影響する、(2) サポートとアンダーマイニングが失業者の抑うつや関係満足感に影響する、という仮説に基づいて、構造方程式モデル (N=693) でそれらの関連を検証している。その結果、(1) 経済的逼迫はパートナーの抑うつに影響を及ぼす、(2) パートナーの抑うつは失業者へのサポートを低下させ、アンダーマイニングの増加を導く、(3) サポート低下とアンダーマイニング増加は失業者の抑うつや関係満足感に影響を及ぼすことが、「同一時点における変数間で」見いだされている。しかし縦断的にはやはり同一変数の規定力が強く、モデルの経時的拡張はなされていない。また、サポートとアンダーマイニングの相関は同一/縦断ともに高い。これはターゲットが配偶者であることに依存するのではなかろうか。

Holahan, Moos, Holahan, & Brennan (1997) は、それ以前に自身らが提唱した対処資源モデルを、社会的関係の肯定的側面のみならず否定的側面にも拡張した研究を行っている。彼らは配偶者や子どもといった家族成員、さらに友人、親類、同僚などのより広いソーシャルネットワークを含んだ社会的関係について、心臓障害患者 (N=183) の4年間のプロスペクティブデザインで、この拡張モデルを検証した。その結果、関係の肯定的側面がより適切な対処への努力や適応の良さと関連するのと同様、関係の否定的側面は適切な対処努力の欠如や適応の貧しさと強く関連することが見いだされている。さらに、サポートが予測する対処の分散を考慮した後でさえ、社会的ストレスの、適切な対処努力に対する予測力は有意であった。

これらの知見を踏まえて、Holahan, Moos, & Bonin (1997) は、ストレスやその対処過程における、進行中のストレスのダイナミックな役割を強調している。つまり、進行中のストレスは要求を増す一方で、適切な処理メカニズムを自然に弱めるのである。これは特に社会的ストレスに依ることで、「(社会的ストレスは) すべての日常ストレスよりもはるかに苛立たせるものである」(Bolger et al., 1989, 括弧筆者)。やはり対人関係が精神的健康に及ぼす影響を考える上で、その否定的側面はストレスとしてのみならず、対処資源規定因としても考慮すべきなのである。

しかしこれらの先行研究は、因果を議論する上でいずれも問題がある。それは、ほとん

どの研究が同一時点内でモデルを構成しており、経時的には同一変数間、もしくはモデルに合致する変数間でのパスしか想定しておらず、逆方向因果を検討していないという点である。変数間の因果を議論するには、経時的かつ異なる変数間で、仮定された方向のみならず、仮定とは逆方向のパスについても検討する必要がある。

そこで本章は縦断的にデータを収集し、まずは先行研究と同様に同一時点でのモデルの適合性、そしてさらに経時的な因果の妥当性を議論することを第1の目的とする。

4-1-2 対人ストレス生起過程因果モデルにおける主体的要因

対人ストレス生起過程因果モデルに関する第2の疑問は、第3変数としての主体的要因の影響可能性である。第2章第1節においても、ネットワークの肯定性（サポート）／否定性（ストレイン）の指標が、ネットワークに対する構えの肯定性／否定性の個人差を反映している可能性が指摘されている。また、前述の因果の妥当性について、もし双方向性の関連が見いだされたならば、そこには個人の対人関係認知における肯定性／否定性とも言うべき主体的要因が第3変数として介在している可能性が推測されよう。

たとえ双方向性の因果を想定すべきであるとしても、それは介入という観点からは、実はさして重要な問題ではない。なぜなら、因果が双方向性であるということは、そこで扱われている変数のいずれかに介入できれば状況は改善可能であることを意味しているからである。しかし、主体的要因の影響可能性には、その意味で重大な問題が内包されている。対人関係認知が主体的要因によって強く規定されるということは、主体的要因が環境的要因以上に影響力の大きい独立変数となっていることを意味する。そして主体的要因すなわちパーソナリティは、（さまざまな考え方があるにせよ）基本的には安定性の高い個人特性であり、その変容は困難である。つまり、もし主体的要因の影響力が決定的なものであるならば、環境的要因への介入はあまり意味をなさず、主体的要因への介入は困難であり、よって有効な介入方略の提言が困難になるのである。しかし第1章で述べたように、多くの先行研究が対人関係と精神的健康の指標に対するパーソナリティの影響を指摘しており、その中には、対人関係と精神的健康の関連はパーソナリティによって導かれた擬似的な関連に過ぎないと主張するものもある（Bolger & Eckenrode, 1991）。これらの知見を鑑みれば、やはり主体的要因としてのパーソナリティの影響力を検討することは不可欠であろう。そこで本章では、対人ストレス生起過程因果モデルに及ぼすパーソナリティの影響を検討することが第2の目的となる。

第1章のレビューで述べたように、これまでも、対人関係の肯定的／否定的側面ならびに精神的健康に関する諸変数と関連するとされるパーソナリティは、数多く指摘されている。しかし、それらすべてのパーソナリティ要因を本論文において議論するのは不可能

であり、ある程度限定する必要がある。そこで、(1) 精神的健康とパーソナリティの関連を議論した先行研究において、(ソーシャルサポートなどの) 肯定的指標と外向性、(ストレッサーやストレス反応などの) 否定的指標と神経質傾向に関する指摘がもっとも多いこと；(2) 介入が困難な領域を明らかにするために、特性論の立場に立脚したパーソナリティであること；(3) なるべく少ない概念で包括的にパーソナリティの影響を議論できること；という条件を満たすパーソナリティ変数として、今回は性格特性5因子モデル (Five Factor Model: FFM) に基づいた日本語版 ACL (Adjective Check List) を用いる。FFMは特性論の立場に基づいて、パーソナリティ因子は神経症的 (神経質) 傾向 (もしくは情緒不安定性)、外向性、開放性 (もしくは知性)、同調性 (もしくは協調性・調和性)、誠実性の基本的次元を持つとするものであり、これらの5因子は通称 Big Five と呼ばれている。この研究は、批判も含めて近年非常に盛んであり (大淵・堀毛, 1996)、わが国でも最近多くの研究が行われている (e.g. 林・小田, 1996; 柏木・和田, 1996; 柏木・山田, 1995; 和田, 1996)。そこで本論文では、和田 (1996) の尺度を用いて、対人ストレス生起過程因果モデルとパーソナリティの関連を検討する。

4-1-3 ネットワークの肯定性/否定性の展開

本章における第3の論点は、ソーシャルネットワークそのものと、肯定的/否定的ネットワークの関連である。個人が新たな集団に参加するとき、当初そのネットワークは肯定的でも否定的でもない、中立的なものであると考えられる。また、その大きさも当初は極めて限られているであろう。そして時間の経過とともに、そこでのネットワークは肯定的な色彩を帯びてくる場合もあれば否定的になりうる場合もある。また、その両側面が同時に拡大していく場合、一側面のみが拡大する場合、どちらも拡大しない場合など、ネットワークの肯定的/否定的両側面の展開にはさまざまなバリエーションが考えられる。それでは、その展開を規定する要因は果たして何であろうか。第1章第2節で述べたように、ソーシャルネットワークの構造研究がサポート研究ともなりうることから、サポートネットワークがソーシャルネットワークと、かなり重複することは容易に推察できよう。しかし、否定的ネットワーク、つまりネットワークストレインとソーシャルネットワークとの関連については、第2章第1節では一貫性は見いだされなかった。そしてその考察としては、ネットワークの形成段階、つまり集団発達段階がその関連を規定している可能性が推測されたが、具体的に、どのような要因がネットワークの性質を規定するのかは明らかでない。

そこで、対人関係の肯定的側面と否定的側面を扱った先行研究 (Table 4-1-1) を概観すると、非常に密接な関係 (配偶者やルームメイトなど) では肯定的側面と否定的側面は逆

れないが、個人内得点の経時的変化においてはこの影響は小さいと考えられる。したがって、特に仮説は設けないが、補足的に個人内得点の経時的変化の検討も行い、モデル使用変数の規定因を検討することとする。

次に主体的要因の影響については、前述の仮説IV-2で検討する。ただしそこで対立仮説を立てたように、この時点ではまだ主体的要因の影響力は不明確なので、本研究ではパーソナリティは扱わない。

最後にネットワークの肯定性/否定性の展開については、これまでの議論に基づいて以下の仮説を設ける。

仮説VI-3：ネットワーク構造研究がサポート研究ともなりうること、さらに対人ストレス生起過程因果モデルから、ソーシャルネットワークの大きさは、サポートネットワークと強い正の相関、ネットワークストレインと弱い正の相関を示す。

仮説VI-4：先行研究において、非常に親密な関係では肯定的側面と否定的側面が逆相関する傾向にあること、さらに今回の研究で扱われるのは恣意的に形成されるネットワークなので、肯定的関係のみが選択されると推測されることから、非常に親密なネットワークはサポートと強い正の相関を持つが、ネットワークストレインには何ら寄与しない。

仮説VI-5：先行研究においてそれほど親密ではないネットワークでは肯定的側面と否定的側面が独立していること、仮説IV-3でソーシャルネットワークとネットワークストレインの関連が推測されつつも、仮説IV-4で非常に親密なネットワークはネットワークストレインと無関連であると推測されていることから、ある程度親密なネットワークはサポートネットワーク・ネットワークストレインの両者と正の関連を持つ。

仮説VI-6：親密でないネットワークはサポートネットワークにもネットワークストレインにも寄与しない。

4-2-2 方法

調査の実施

1997年4月下旬、5月下旬、7月上旬の3回にわたり、名古屋大学法学部の大学1年生に質問紙による調査を実施した。うち、3回全ての調査に参加し、かつ欠損値などの不備がほとんどない被調査者125名（男子81名、女子44名）を分析対象とした。なお、第1回の調査において、被調査者の97.6%が18~19歳であった。また、本研究の「クラス」という記述は、同学部同学年集団を意味するものである。

質問紙の内容

3回すべての調査で以下の質問が実施された。なお、人数の記入を求める①③⑤については、外れ値によるデータの歪曲を防ぐため、9人以上の場合は9人として分析段階では

相関する一方で、そこまで密接ではない関係（友人など）やネットワーク全般に関しては、肯定的側面と否定的側面は独立であることを示しているものが多い。これらの知見から、高親密関係では肯定的側面と否定的側面が併存し得ない一方で、それ以外の関係やネットワーク全般では、肯定的側面と否定的側面が併存している可能性が推測されよう。そして、精神的健康という観点からはサポートが高くストレインが低いネットワークが理想的である（橋本，1996a）が、そのためには非常に親密な関係の拡充が必要であることが推測される。しかし、非常に親密な関係の形成に至るまでには当然その前段階である低親密期も必要であり、そこでは否定的側面が付随し得るというジレンマをはらんでいる。親密な関係だから肯定的側面と否定的側面が逆相関するのか、肯定的側面と否定的側面が逆相関する関係だから親密になるのかは定かではないが、いずれにせよ、対人関係における肯定的

Table 4-1-1 対人関係の肯定的側面と否定的側面の関連

文献	被調査者	評定対象	関連	測定法
Abbey, Abramis, & Caplan (1985)	大学生	ネットワーク 任意の誰か 最も重要な他者	無相関 無相関 強い逆相関	頻度
Barrera, Chassin, & Rogosch (1993)	青年 (父親アル中 群と統制群)	両親 親類 親友	逆相関 逆相関 無相関	P:提供 N:頻度
Finch, Okun, Barrera, Zautra, & Reich (1989)	身体障害群 配偶者死別群 統制群	社会的結びつき	独立	人数
Lepore (1992)	大学生	ルームメイト 友人	逆相関 無相関	頻度
Pagel, Erdly, & Becker (1987)	アルツハイマー 患者の配偶者	ネットワーク内の 各個人(最大15人)	2因子性	頻度
Pierce, Sarason, & Sarason (1991)	大学生	両親 特定友人	すべて逆相関	関係性の認知
Rauktis, Koeske, & Tereshko (1995)	疾病者の家族	P:9つの異なる資源 N:友人や家族	逆相関	P:サポート量 N:頻度
Rook (1984)	未亡人	ネットワーク及び 特定個人	相互作用数 人数 接触頻度 すべて無相関	P:機能の幅 提供者数 相互作用 N:問題の幅 人数 相互作用頻度
Ruehlman & Wolchik (1988)	大学生	重要な他者3人	無相関	計画関連行動
Schuster, Kessler, & Aseltine (1990)	コミュニティ	配偶者 親類 友人	強い逆相関 女性は逆相関 無相関	相互作用と関係性 の認知の混合
Suitor & Pillemer (1993)	痴呆患者の娘 (既婚)	親族 友人 ネットワーク	両側面提供	頻度 人数
浦・高野 (1995a)	大学生	特定家族 特定友人	無相関 ほぼ無相関	関係性の認知
Vinokur & van Ryn (1993)	失業者	配偶者もしくは 重要な他者	わりと高い 逆相関	相互作用と関係性 の認知の混合

Note: Pは肯定的側面、Nは否定的側面

側面と否定的側面の関連を検討するにあたって、親密性が重要な要因であるのは確かなようである。

そこで本章では、大学新入生を対象に、大学のクラスという新しいネットワークへの参加における、モデル関連変数の変化を縦断的に検討することによって、親密度に特に着目しながら、ネットワークの両価性の展開および関連を議論することを第3の目的とする。

第4章第2節

縦断データにおける対人ストレス生起過程 因果モデル

本節では、研究VIとして大学新生125名（男子81名、女子44名）を対象とした3波縦断調査を行い、対人ストレス生起過程因果モデルの（1）因果の妥当性、（2）主体的要因の影響、（3）ネットワークの肯定性／否定性の展開を検討した。その結果、同一時点内では対人ストレス生起過程因果モデルは成立したものの、経時的な変数間の因果については、モデル内のすべての尺度について安定性が高く、また多くの変数間で双方向性の関連がみいだされ、第3変数としての対人関係認知における主体的要因の影響が示唆された。ネットワークの肯定性／否定性の展開については、親密な関係では肯定的側面と否定的側面が併存し得ない一方で、親密度の低い関係やネットワーク全般では肯定的側面と否定的側面が併存し得る可能性が示唆され、対人関係における肯定的側面と否定的側面の展開を検討する際に、親密性が重要な要因である可能性が指摘された。

4-2-1 問題と目的

前節では、対人ストレス生起過程因果モデルに関する3つの疑問として、（1）因果の妥当性、（2）主体的要因の影響、（3）ネットワークの肯定性／否定性の展開が挙げられた。そこで本節では研究VIとして縦断調査を行い、これらの問題を検討することを目的とする。

まず因果の妥当性については、研究I・研究IIと同様のモデルの、同一時点内での再現性、ならびに経時的なモデルの適用可能性を検討する。ここでは以下の仮説を検証する。
仮説VI-1：同一時点測定変数間においては、対人ストレス生起過程因果モデルは成立する。

仮説VI-2：モデルの経時的適用可能性について、ここでは対立仮説を立てる。（a）主体的要因の影響が強い場合、つまりネットワークの肯定性（サポート）／否定性（ストレイン）の指標が、ネットワークに対する構えの肯定性／否定性の個人差を反映しているならば、同一変数の時点間相関は高くなり、変数間の関連は（第3変数の影響を示唆するような）双方向性のものとなる。（b）主体的要因の影響が弱い場合、環境的要因の影響が相対的に大きくなると考えられるので、環境的要因が個人の適応を規定するという方向性を持っている対人ストレス生起過程因果モデルは経時的にも成立する。

さらに、因果の妥当性の議論は、個々の変数の規定要因の議論の一環であると考えられる。そして、得点の個人間相対比較に基づいた分析では前述の主体的要因の介在が避けら

処理した。

①対人ネットワークマトリックス

現在の日常生活における人間関係について、3カテゴリー×親密度3水準=9つのセルについてそれぞれ該当する人数の記入を求めた。カテゴリーは「クラスメイト（同学部同級生）」、「クラス以外の同大学生（先輩やサークルの同級生など）」、「その他の知人（アルバイト先の人間関係、高校までの知人など）」の3つであり、家族・親類は全て除外するよう教示した。親密度は「非常に親密」、「わりと親密」、「面識はあるが親密ではない」の3水準である。また、第1回の調査では、9つそれぞれのセルについて、該当人数のうち何人が入学以前からの知人であるかの記入も求めた。なお、本研究は大学新入生における、クラスという新しいソーシャルネットワークの形成過程を検討することが目的なので、基本的には「クラスメイト」カテゴリーに注目する。

②対人ストレスイベント尺度（頻度）

第2章第2節で用いられた30項目。対人関係における否定的な出来事について、最近およそ1カ月のあいだ、クラス内の人間関係でその出来事がどの程度あったか、4段階で評定を求めた。

③ネットワークストレイン尺度

第2章第1節で用いられたものと同じ13項目。否定的な特性を持つ他者がクラス内に何人いるか、人数の記入を求めた。

④ディストレス尺度

中川・大坊（1985）によるGHQ（General Health Questionnaire）28項目版を用いて、最近数週間の精神的健康状態の指標とした。

⑤ソーシャルサポート尺度

クラス内のソーシャルネットワークにおけるソーシャルサポートの指標として、松崎ら（1990）によるSSQ9を用い、それぞれの項目について該当する人がクラスに何人いるか、人数の記入を求めた。

また、第1回と第3回では、以上に加えて以下の尺度が実施された。

⑥対人ストレスイベント尺度（ストレス度）

対人ストレスイベント尺度（頻度）と同一内容の30項目について、それぞれの出来事が生じたとき、どの程度ストレスを感じるか、4段階で評定を求めた。

4-2-3 結果

尺度の検討

尺度毎の合計得点の平均値を示したのがTable 4-2-1である。なお、対人ストレスイベン

ト尺度（頻度ならびにストレス度）、ネットワークストレイン尺度、ソーシャルサポート尺度については合計点を項目数で割ってあるので、対人ストレスイベント尺度については1～4点、ネットワークストレイン尺度、ソーシャルサポート尺度については0～9点が可能得点範囲となる。また、クラスネットワークとはクラスメイトの親密度3水準の人数を合計したものである。さらに、これらの平均点の経時的変化を、分散分析により検証した。なお、この分析はデータ対応があるので、SASのREPEATEDステートメントによるGLM分析で行い、有意水準は相対的に厳しいとされるG-G (Greenhouse-Geisser)法の修正確率を基準とした。また、変化パターンについてはPROFILEオプションを用い、第1回と第2回、第2回と第3回（ただしストレス度に関しては第1回と第3回のみ）で平均値の有意な変動があるかを検証した（竹内・高橋・大橋・芳賀，1989参照）。

Table 4-2-1 尺度の平均・標準偏差

	第1回	第2回	第3回
クラスネットワーク	13.84(5.91)	<<< 16.02(6.53)	16.40(6.76)
非常に親密	2.38(2.68)	<<< 3.48(2.95)	3.75(2.95)
わりと親密	5.37(2.79)	5.43(2.86)	5.57(2.79)
面識はあるが…	6.10(3.02)	<< 7.11(2.77)	7.08(2.86)
ネットワークストレイン	0.76(1.14)	<<< 1.08(1.09)	1.00(1.22)
ソーシャルサポート	2.09(1.64)	2.24(1.97)	<<< 2.66(2.11)
対人ストレスイベント(頻度)	1.86(0.41)	1.84(0.46)	<<< 1.77(0.48)
対人葛藤	1.53(0.43)	<< 1.59(0.46)	1.50(0.47)
対人劣等	2.24(0.59)	>> 2.13(0.63)	>>> 1.94(0.60)
対人摩耗	2.06(0.50)	<> 1.97(0.54)	<> 1.88(0.57)
対人ストレスイベント(ストレス度)	2.76(0.36)	->>>	2.60(0.47)
顕在的対人ストレス	3.03(0.46)	->>>	2.76(0.57)
潜在的対人ストレス	2.53(0.51)	->	2.44(0.52)
GHQ	52.39(13.05)	51.72(12.87)	51.50(12.30)

>>>:p<.001 >>p<.01 >p<.05 (<):p<.10

まずクラスネットワーク(F(2, 244)=15.87, p<.001)は、第2回で2人強の有意な増加がみられたが、第3回では

ほぼ変化がなかった。さらにその内訳に着目すると、「わりと親密」(F(2, 248)=0.33, n.s.)として挙げられた人数に有意な変化はなかったが、「非常に親密」(F(2, 248)=18.01, p<.001)と「面識はあるが親密ではない」(F(2, 248)=8.66, p<.001)で挙げられた人数がそれぞれ第2回で有意に増加している。さらにそれぞれ第3回では有意な増加が見られなかったことから、大学新入生のクラスでのネットワークは5月下旬の時点で安定すると考えられる。さらにネットワークストレイン(F(2, 248)=7.19, p<.001)も同様に、第2回で増加して第3回では増加しないという傾向が見いだされた。しかし、ソーシャルサポート(F(2, 246)=10.59, p<.001)は第2回で増加せず、第3回で有意に増加した。GHQ(F(2, 242)=0.73, n.s.)は有意な経時的変化を示さなかった。対人ストレスイベントの頻度は、まず全体(F(2, 242)=3.15, p<.05)では第1回と第2回で変化はなかったが、第3回で減少傾向が見いだされた。さらに下位尺度を検討した結果、対人葛藤(F(2, 246)=1.95, n.s.)は第2回で若干の増加傾向があるがほぼ一定、対人摩耗(F(2, 248)=5.87, p<.01)が安定した減少傾向にあるのに対して、対人劣等(F(2, 246)=23.97, p<.001)が第3回で相対的に大きく減少している影響によるものと考えられる。さらに、対人ストレスイベントのストレス度(この尺度のみ有意水準の修正なし)については、全体(F(1, 123)=22.41, p<.001)、

顕在的対人ストレス ($F(1, 123)=37.38, p<.001$)、潜在的対人ストレス ($F(1, 124)=4.81, p<.05$) のいずれも平均点の低下が見いだされ、特に顕在的対人ストレスの低下が著しかった。これは、入学直後の対人関係トラブルは印象形成などにおけるダメージが大きい反面、ある程度時間が経過するとそのような心配は低下するという解釈も考えられよう。いずれにせよ、第3回の得点低下はストレス度の経時的な変動可能性を示しており、ひいては個人のストレス感受性には主体的要因のみならず、大学入学などの生活移行も影響を及ぼし得る可能性があることを示唆していると考えられよう。

Table 4-2-2 尺度得点の性差 (数字は t 値、符号が正の場合、男性の方が高得点)

	第1回	第2回	第3回
クラスネットワーク	-0.57	-0.77	-2.53*
非常に親密	0.80	-0.25	-0.88
わりと親密	-1.26	-0.20	-2.11*
面識はあるが...	-0.67	-1.34	-3.00**
ネットワークストレイン	-1.50	-0.28	-0.61
ソーシャルサポート	-0.80	-1.48	-2.38*
対人ストレスイベント (頻度)	-1.06	1.06	0.31
対人葛藤	-0.20	1.72+	0.95
対人劣等	-1.07	0.79	0.14
対人摩耗	-1.96+	0.22	-0.25
対人ストレスイベント (ストレス度)	-2.80**	-	-1.59
顕在的対人ストレス	-2.70**	-	-2.62**
潜在的対人ストレス	-2.36*	-	-0.70
GHQ	0.19	0.33	0.74

note: ***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$ +: $p<.10$

クラスネットワークならびにソーシャルサポートで女性の方が有意に高得点であったが、全般的に性差がみられた変数は少なかった。したがって本研究で使用する変数に関しては、性差はあまり影響を及ぼさないと考えられる。また、同様に自宅生 ($N=80$) と下宿生 ($N=45$) の差を検討した (Table 4-2-3)。まずクラスネットワークについては、入学直後は「面識はあるが親密ではない」クラスメイトの分、自宅生の方がネットワークは大きいようであるが、この差は第2回以降見いだされない。また、ネットワークストレイン、対人ストレスイベント (頻度)、そして GHQ で t 値の絶対値が安定した増加傾向を示しているのは興味深い。そこでこれらの平均値を比較すると、まずネットワークストレインは、自宅生の平均値が比較的安定して移行している

Table 4-2-3 尺度得点の居住形態差 (数字は t 値、符号が正の場合、自宅生の方が高得点)

	第1回	第2回	第3回
クラスネットワーク	2.14*	1.32	0.44
非常に親密	0.83	0.98	-0.30
わりと親密	1.51	0.55	-0.50
面識はあるが...	2.02*	1.49	1.21
ネットワークストレイン	-0.22	-1.76+	-2.68**
ソーシャルサポート	1.46	1.14	1.04
対人ストレスイベント (頻度)	-0.68	-1.64	-2.54**
対人葛藤	0.12	-1.40	-2.94**
対人劣等	-0.85	-1.71+	-2.19*
対人摩耗	-0.65	-1.15	-1.54
対人ストレスイベント (ストレス度)	0.83	-	-0.53
顕在的対人ストレス	0.41	-	-0.27
潜在的対人ストレス	1.40	-	-0.33
GHQ	-0.23	-1.73+	-2.39*

note: ***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$ +: $p<.10$

る (1.84→1.80→1.69) のに対し、下宿生の平均値は比較的安定して移行している (1.89

次に、これらの変数の性差を検討した (Table 4-2-2)。その結果、第1回のストレス度で女性の方が高い他は、第1回、第2回では有意な性差はみられなかった。第3回ではクラスネ

平均値が比較的安定して移行している (0.75→0.95→0.79) のに対し、下宿生の平均値は増加傾向にある (0.79→1.30→1.38)。次に対人ストレスイベント (頻度) は、自宅生の平均値がやや減少傾向にあ

→1.92→1.92)。さらに GHQ は、自宅生の平均値が減少傾向にある (52.18→50.24→49.56) のに対し、下宿生の平均値は増加傾向にある (52.75→54.36→54.93)。これらの推移に一貫した法則性は見いだされなかったが、いずれも下宿生の方が相対的に否定的な結果であることは注目に値するであろう。しかしこの居住形態差についても、その他の変数に有意差はみられなかったため、以下の分析は全被調査者混みにして実施する。

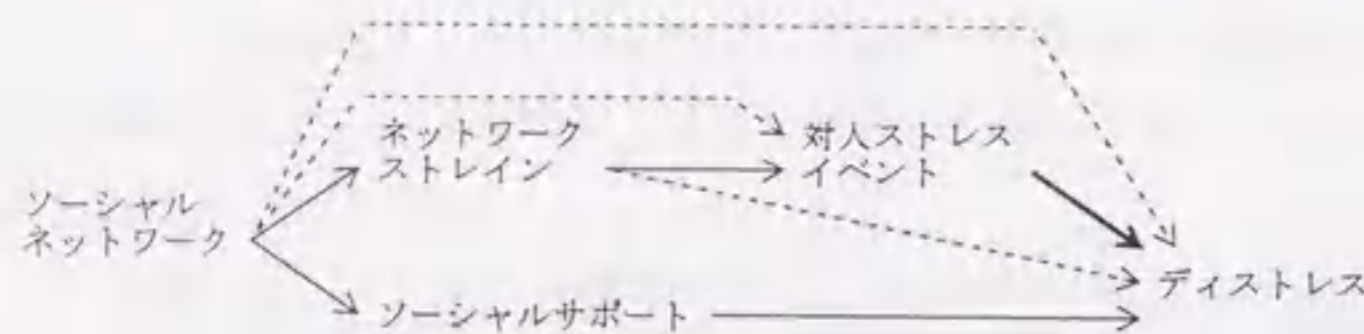


Figure 4-2-1 対人ストレス生起過程因果モデル
(実線は第2章第1節で想定されたパス、点線は第2章第1節で一貫性がなかったパス、線の太さは相対的影響力を示す)

尺度間相関

さて、本論文の主題である対人ストレス生起過程因果モデル (Figure 4-2-1) における、使用変数 (クラスネットワーク

、ネットワークストレイン、ソーシャルサポート、対人ストレスイベント頻度、GHQ) 間の相関を求めたのが Table 4-2-4である。まずは同一回毎の相関に着目すると、全ての回でクラスネットワークとネットワークストレインに正の相関、クラスネットワークとソーシャルサポートに強い正の相関、ネットワークストレインとストレスイベント頻度にやや強い正の相関、ソーシャルサポートと GHQ にやや弱い負の相関、そしてストレスイベント頻度と GHQ に強い正の相関がみられる。第2章第1節で一貫した結果が得られなかったネットワークストレインとディストレスとの関連については、第1回では無相関であったが、第2回・第3回で有意な相関が示され、今回もこの関連については一貫性が見いだされなかった。また、第1回でのみ、クラスネットワークとストレスイベント頻度との間に相関がみられるのは興味深い。ネットワークそのものはストレインよりはサポートとの関連が強く、どちらかといえば肯定的な指標と考えられるが、それがこの回のみストレス

Table 4-2-4 尺度間相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
第1回														
1. クラスネットワーク	—													
2. ネットワークストレイン	.28b	—												
3. ソーシャルサポート	.61a	.15	—											
4. ストレスイベント頻度	.20c	.31a	.01	—										
5. GHQ	-.11	.14	-.22c	.48a	—									
第2回														
6. クラスネットワーク	.61a	.05	.50a	.08	-.03	—								
7. ネットワークストレイン	.32a	.62a	.14	.30a	.17d	.23c	—							
8. ソーシャルサポート	.44a	.06	.67a	-.11	-.31a	.50a	.07	—						
9. ストレスイベント頻度	.09	.21c	.01	.68a	.48a	-.01	.38a	-.14	—					
10. GHQ	-.07	.21c	-.03	.58a	.74a	.00	.28b	-.18c	.59a	—				
第3回														
11. クラスネットワーク	.56a	.10	.47a	.09	-.08	.73a	.22c	.52a	-.08	-.05	—			
12. ネットワークストレイン	.16d	.63a	.06	.27b	.30a	.14	.70a	.05	.36a	.30a	.20c	—		
13. ソーシャルサポート	.49a	.03	.65a	-.16d	-.26b	.51a	.13	.81a	-.15d	-.12	.63a	.09	—	
14. ストレスイベント頻度	.10	.16d	-.03	.52a	.48a	.06	.28b	-.19c	.63a	.64a	-.03	.30a	-.12	—
15. GHQ	.02	.16d	-.07	.55a	.65a	-.05	.25b	-.21c	.62a	.79a	-.13	.28b	-.18c	.70a

note: a: $p < .001$ b: $p < .01$ c: $p < .05$ d: $p < .10$

イベントと関連したということは、入学して間もない時点では、ネットワークそのものが否定的でなくとも、ストレスを喚起する要因となりうるとも考えられよう。さらに、同一回における変数間因果について、対人ストレス生起過程因果モデルを適用した重回帰分析の結果 (Table 4-2-5) では、サポートからディストレスへの因果を除いては、一貫してモデルと一致する有意なパスが見いだされた (Figure 4-2-2)。以上の結果は、少なくとも同一時点においては、ネットワークがサポートとストレインを規定し、ストレインがストレスイベントを規定し、ストレスイベントがディストレスの最大の規定因となり、サポートの影響力はそれには及ばないとするモデルに合致しており、仮説VI-1は支持されたと考えられる。

Table 4-2-5 同一時点内での重回帰分析 (stepwise, 最適化水準.15, 数字は標準偏回帰係数, -は投入したが基準を満たさなかったパス, 空欄は投入しなかったパス, 網掛け部はモデルで想定されたパス)

説明変数\基準変数	第1回				第2回				第3回			
	2	3	4	5	2	3	4	5	2	3	4	5
1. クラスネットワーク	.28**	.61***	-	-	.23*	.50***	-	-	.20*	.63***	-	-.13*
2. ネットワークストレイン			.31***	-			.40***	-			.31***	.11
3. ソーシャルサポート				-.22**			-.17*	-				-.15+
4. ストレスイベント頻度				.48***				.59***				.66***
5. GHQ												
adj-R ²	.07**	.36***	.09***	.27***	.04*	.24***	.16***	.34***	.03*	.40***	.10***	.50***

note:***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

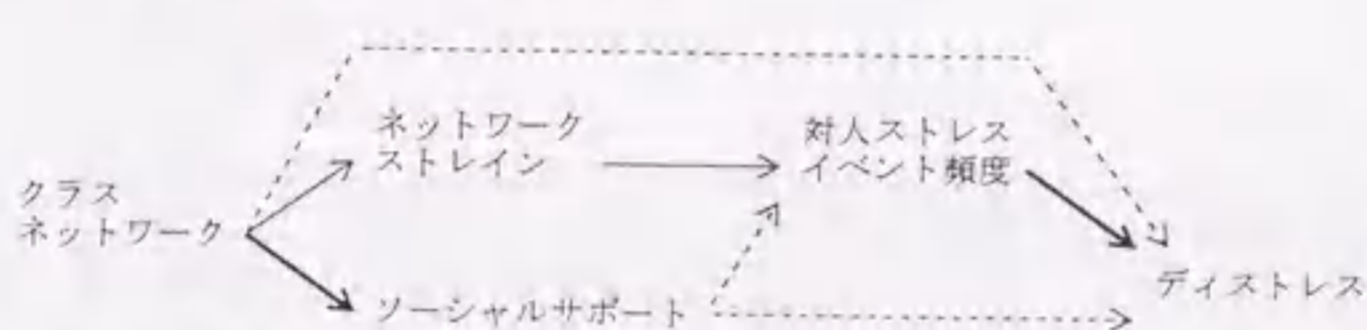


Figure 4-2-2 同一時点測定変数をモデルに適用したパス・ダイアグラム (実線は常に有意だったパス, 点線は有意な場合もあったパス, 線の太さは相対的影響力を示す)

一方、経時的には、同一尺度間の相関がいずれもかなり高いものであることが明瞭である。

これは、今回扱った諸変数の変動性がかなり低いことを示唆している。また、対人関係の肯定的側面であるソーシャルサポート、そして否定的側面であるネットワークストレインと対人ストレスイベントについて、両側面の関連性という観点から相関を検証すると、すべての回にわたってサポートとネットワークストレインの間に相関はみられない。また、サポートと対人ストレスイベントの関連についても、第2回のサポートと第3回のイベントに負の相関がみられたのみで、こちらもその他に有意な相関は見いだされなかった。したがって、本研究における対人関係の肯定的側面と否定的側面は、基本的に独立していると考えられる。

経時的重回帰分析

次に変数間の経時的因果を議論するため、同一時点で測定された変数は投入せず、第1回の諸変数を説明変数、第2回の個々の変数を基準変数とした重回帰分析、そして第1回と第2回の諸変数を説明変数、第3回の個々の変数を基準変数とした重回帰分析を実施し

た (Table 4-2-6)。その結果、すべての尺度得点に対して、前回の同一尺度がかなり強い説明力を示した。したがって、本モデルで用いた尺度得点の予測は、基本的にはそれ以前に測定した同一尺度がもっとも有効であると考えられる。ただし、第1回から第3回に同一尺度の有意なパスが示されたのはネットワークストレインのみであり、同一尺度の予測力は長期には及ばないことも示唆された。また、異なる尺度による説明力については、第1回と第2回、第2回と第3回でいずれも、対人ストレスイベントと GHQ の間に双方向性の有意なパスが示された。しかしそれ以外には、異なる尺度間での一貫した因果は見いだされなかった。

Table 4-2-6 重回帰分析 (同一変数含む、stepwise、最適化水準.15、数字は標準偏回帰係数、-は投入したが基準を満たさなかったパス、空欄は投入しなかったパス)

説明変数\基準変数	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
第1回										
1. クラスネットワーク	.52***	.17*	-	-	-	.15+	-	.17*	-	-
2. ネットワークストレイン	-.12	.56***	-	-	-	-	.30***	-	-	-
3. ソーシャルサポート	.21*	-	.63***	-	.09	-	-	.12	-	-
4. ストレスイベント頻度	-	-	-	.58***	.26***	-	-	-.12*	-	-
5. GHQ	-	.12	-.17*	.20**	.63***	-	.18**	-	-	.12
第2回										
6. クラスネットワーク	-	-	-	-	-	.55***	-	-	-	-
7. ネットワークストレイン	-	-	-	-	-	-	.49***	-	-	-
8. ソーシャルサポート	-	-	-	-	-	.17*	-	.64***	-	-
9. ストレスイベント頻度	-	-	-	-	-	-	-	-	.39***	.24***
10. GHQ	-	-	-	-	-	-	-	-	.40***	.55***
第3回										
11. クラスネットワーク	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12. ネットワークストレイン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13. ソーシャルサポート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14. ストレスイベント頻度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15. GHQ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
adj-R ²	.40***	.41***	.46***	.48***	.61***	.56***	.59***	.69***	.49***	.66***

note: ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

しかし本研究の主要な目的の一つは変数間の因果の検討であり、同一尺度の強い影響力によって顕在化しなかった、異なる変数間の因果も検討する必要がある。そこで、同一尺度を投入せず、その他は同様の重回帰分析も行った (Table 4-2-7)。まず対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された因果 (網掛け部) を検討すると、まずネットワークストレインについては、モデル通り、その前の回のクラスネットワークが有意 (傾向) な正のパスを示している。しかし同時に、前回の対人ストレスイベントも有意な説明変数となっている。その対人ストレスイベントについては、GHQ が強力な説明変数となっており、ネットワークストレインの説明力は小さい。投入基準を満たしていること、さらに GHQ を説明変数から除外した重回帰分析では有意なパスがしめされたことなどから、モデルで想定されたネットワークストレインから対人ストレスイベントへの因果は否定されたわけではないが、先行研究で想定されなかったディストレスの影響を含めると、ネットワークストレインの影響力は小さいと言わざるを得ないであろう。次にサポートについては、一貫してクラスネットワークが強い正の寄与を示した。したがってソーシャルネットワークの大きさは、サポートネットワークの大きさと密接な関係にあることが確認された。しかし

Table 4-2-7 重回帰分析 (同一変数除く、stepwise、最適化水準.15、数字は標準偏回帰係数、
-は投入したが基準を満たさなかった変数、空欄は投入しなかった変数)

説明変数 \ 基準変数	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
第1回										
1. クラスネットワーク		.27**	.41***	-	-	-	-	.36***	-	-
2. ネットワークストレイン	-	-	-	.16*	-	-.15	-	-	-	-
3. ソーシャルサポート	.51***	-	-	-	-	.24*	-	-	-	-
4. ストレスイベント頻度	-	.25**	-	-	.58***	.32**	-	-.26***	-	.24*
5. GHQ	-	-	-.26**	.46***	-	-	.16+	-	-	-
第2回										
6. クラスネットワーク							.15+	.31**	-	-
7. ネットワークストレイン						.30**	-	-	.11	-
8. ソーシャルサポート						.32**	-	-	-	-.13+
9. ストレスイベント頻度						-.35**	.29**	-	-	.44***
10. GHQ						-	-	-	.61***	-
第3回										
11. クラスネットワーク										
12. ネットワークストレイン										
13. ソーシャルサポート										
14. ストレスイベント頻度										
15. GHQ										
adj-R ²	.25***	.15***	.25***	.24***	.33***	.36***	.16***	.36***	.41***	.42***

note: ***: p < .001 ** : p < .01 * : p < .05 + : p < .10

サポートはクラスネットワークの説明変数としても一貫して有意であり、ここに単方向の因果を想定するのは疑問である。さらに GHQ については、モデルの仮定通り、いずれも対人ストレスイベントが強い正のパスを示している。しかし先述したように、逆方向のパスもかなり高い有意性を示しており、対人ストレスイベントと GHQ の間にも単方向のパスは仮定できないと考えられる。また、サポートは GHQ の説明変数としてはほとんど機能せず、その影響力は大きくないと推測される。以上の分析結果から、対人ストレス生起過程因果モデルに関して、本研究で見いだされた知見は以下のようにまとめられよう。

(1) 調査を実施した3回を通じて、同一時点では、Figure 4-2-2で示されたモデルの変数間因果が想定可能であった。つまり、同一時点では、対人ストレス生起過程因果モデル (Figure 4-2-1) はほぼ成立しえた。

(2) しかし経時的検討の結果、個々の変数を最もよく説明するのは、以前に測定された同一変数である。つまり今回扱った変数はいずれも、入学当初からかなり安定している。

(3) あえて同一変数を除いた経時的検討の結果、Figure 4-2-3に示した変数間の関連が想定された。つまり、対人ストレス生起過程因果モデルは全面的に支持されなかったわけではないが、モデルのパスの影響力にはかなりばらつきがあり、現実的には単方向因果を想定できない関係がかなり存在することが示された。従って仮説VI-2については、(a) が支持されたと考えられる。

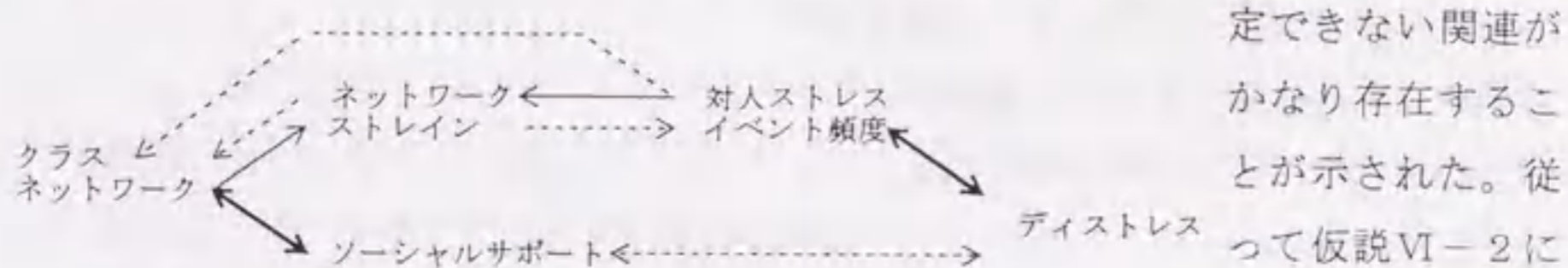


Figure 4-2-3 異時点異変数間でモデルを適用したパス・ダイアグラム
(実線は常に有意だったパス、点線は有意な場合もあったパス、
線の太さは相対的影響力を示す)

られる。

経時的変化量を用いた分析

しかし、経時的変化を議論するには、ここまでの相関分析・重回帰分析は個人内変化を考慮していないという問題がある。つまり、これまでの分析は各尺度得点を、個人間の相対的高低に基づいて分析したものであり、個人内に多少の変化があってもそれは問題とはされなかった。また、この分析方法が主体的要因にかなり大きく影響されるであろうことは、これまでの分析で示されたとおりである。しかし、本研究の中心的目的は個人間の比較ではなく、変数規定因の議論であり、そこで主体的要因を排除するために個人内経時的変化量を指標として用いるのも有効であろう。そこでさらに、各変数の個人内変化量を指標とした分析を行った。なお、この経時的変化量はいずれも、各回の尺度得点から、その前の回の同一尺度得点を引くことによって算出された。したがって、値が正ならその尺度得点の経時的増加、値が負なら経時的減少が生じたことを意味する。

Table 4-2-8 経時的増減量の要約統計量および相関

	M	SD	Min.	Max.	CN	NS	SS	ISE
第1回→第2回								
クラスネットワーク	2.18	5.50	-14.00	18.00				
ネットワークストレイン	0.31	0.98	-4.38	3.92	.20*			
ソーシャルサポート	0.16	1.51	-4.44	4.89	.22*	.03		
ストレスイベント頻度	-0.02	0.35	-1.07	1.10	-.00	.23*	-.10	
GHQ	-0.70	9.36	-23.00	32.00	-.22*	.01	-.07	.04
第2回→第3回								
クラスネットワーク	0.38	4.92	-12.00	16.00				
ネットワークストレイン	-0.07	0.90	-5.08	2.38	.11			
ソーシャルサポート	0.43	1.26	-3.89	5.67	.25**	-.03		
ストレスイベント頻度	-0.07	0.41	-1.40	0.97	-.04	.06	.13	
GHQ	-0.22	8.08	-25.00	24.00	-.07	.02	-.10	.04

CN: クラスネットワーク NS: ネットワークストレイン
 SS: ソーシャルサポート ISE: 対人ストレスイベント頻度
 **: p<.01 * : p<.05

さて、その要約統計量ならびに相関を示したのが Table 4-2-8である。その結果、第1回から第2回にかけてのクラスネットワークの増減が、ネットワークストレイン・ソーシャルサポートの増減と正の相関を示し、GHQの増減と負の相関を示した。このことは、ネットワークの拡大が肯定的/否定的両ネットワークの拡大をもたらすというモデルと合致する結果である。また、同じく第1回から第2回にかけてのネットワークストレインの増減が、対人ストレスイベント頻度の増減と正の相関を示した。この結果も、ネットワークストレインの大きさが対人ストレスイベントを規定するというモデルと合致する。しかし、第2回から第3回にかけては、クラスネットワークの増減とソーシャルサポートの増減に正の相関が見いだされたのみであった。したがって、同一指標における個人内の経時的変化という観点からは、本研究では以下の知見が導かれた。

(1) ネットワークの形成期においては、クラスネットワークの増減が肯定的/否定的両ネットワークの増減と共変し、否定的ネットワークは対人ストレスイベントの頻度と共変する。

(2) しかし一定期間後には、対人ストレス生起過程因果モデルにおける諸変数の増減は、モデル内のその他の変数の増減とは基本的に独立である。

ネットワークと親密度

Table 4-2-9は、親密度ごとのクラスネットワーク変数とネットワークストレス/ソーシャルサポートとの相関を求めたものである。まずソーシャルサポートとの間には一貫して正の相関、そして親密であるほどその相関は高いことが見いだされた。一方、ネットワークストレスについては、非常に親密なクラスメイト数との間に有意な相関は見いだされず、「わりと親密」、そして「面識はあるが親密ではない」クラスメイト数とネットワークストレスとの間に正の相関が見いだされた。特に第1回の調査における「わりと親密」なクラスメイト数が、全3回のネットワークストレスと相関を示しているのは興味深い。この結果からは、ネットワークストレスは、非常に親密と言うほどでもないが個人のネットワークに含まれている他者に由来する可能性が考えられる。

Table 4-2-9 親密度ごとのクラスネットワーク変数とネットワークストレス・ソーシャルサポートの相関

		ネットワークストレス			ソーシャルサポート		
		第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
第1回	非常に親密	.02	-.07	.01	.63***	.39***	.44**
	わりと親密	.29**	.38***	.24**	.47***	.36***	.39**
	面識はあるが...	.27**	.21*	.09	.19*	.18*	.22*
第2回	非常に親密	-.06	.11	.07	.52***	.57***	.51**
	わりと親密	.08	.22*	.12	.39***	.37***	.38**
	面識はあるが...	.12	.19*	.12	.23*	.19*	.26**
第3回	非常に親密	-.10	.07	.08	.48***	.54***	.68**
	わりと親密	.15+	.29**	.21*	.44***	.41***	.54**
	面識はあるが...	.19*	.18*	.17+	.19*	.26**	.26**

note: ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

Table 4-2-10 親密度ごとの経時的増減量とモデル使用変数の経時的増減量の相関

	NS	SS	ISE	GHQ
第1回→第2回				
非常に親密	.15+	.36***	-.08	-.07
わりと親密	.07	.10	.07	-.18*
面識はあるが...	.13	-.02	.00	-.14
第2回→第3回				
非常に親密	.08	.39***	-.04	-.14
わりと親密	.05	.21**	-.02	-.05
面識はあるが...	.08	-.11	-.01	.04

note: ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

NS: ネットワークストレス

SS: ソーシャルサポート

ISE: 対人ストレスイベント頻度

ネットワークストレスの大きさを規定するのは本研究では明確にはされなかったと考えるべきであろう。以上の結果から、仮説VI-3と仮説VI-4はほぼ全面的に支持された。また、仮説VI-5は個人間比較 (Table 4-2-9) において部分的に支持され、仮説VI-6は個人内比較 (Table 4-2-10) において部分的に支持された。

しかし、各変数の経時的増減 (Table 4-2-10) では、非常に親密な関係の増減がサポートの増減と共変していたのに対し、ネットワークストレスの増減と有意な相関を示した親密度別増減量はなかった。したがって、どのような関係性がネ

4-2-4 考察

本研究では、同一時点内では対人ストレス生起過程因果モデルは成立し得たものの、経時的な変数間の因果については、モデル内のすべての尺度について安定性が高く、初期段階で3カ月後の同一変数はかなり予測可能であることが見いだされた。また、ネットワークとサポート、対人ストレスイベントとGHQのそれぞれについて、密接かつ相互規定的な関連がみいだされた。これには個人の対人関係における肯定性と否定性と言うべき第3変数の影響があると考えられ、主体的要因はやはり検討すべき課題となった。また、ネットワークストレインと対人ストレスイベントの関連が先行研究よりも明確でなかったことについては、先行研究において検討していなかったディストレスとの双方向性の影響が挙げられよう。多くのストレス/ソーシャルサポート研究では、精神的健康は従属変数として想定されており、本研究で用いたモデルもそれに準ずるものであったが、今後は因果を逆転させた、独立変数としての精神的健康にさらに着目する必要を、本研究の結果は示している。さらに、ネットワークストレインはディストレスと比べて影響力は小さいことも示された。全般的に、対人ストレス生起過程因果モデルの妥当性については、仮定された変数間の関連は確認されたものの、その因果については双方向性を想定すべきであり、さらにその背後にある主体的要因を考慮すべきであると言えよう。ただし、個人内経時的変化量においてもある程度は関連が示されたことから、本研究で扱われた変数間関連は主体的要因に完全に規定されているわけではないことも示唆された。

ネットワークの肯定性/否定性の展開については、まずサポートネットワークとソーシャルネットワークのかなり密接な関連から、ネットワークの存在そのものが基本的にサポートタイプであることが示唆された。これはソーシャルネットワークの構造研究がサポート研究ともなりうることの前提条件であり、構造研究の有用性を再び示すものと言えよう。その一方で、ネットワークストレインはネットワーク、特にある程度親密な関係にある他者と関連する一方で、対人ストレスイベントとも関連している。さらに親密性との関連からネットワークストレインを考えると、非常に親密な関係はストレインと無関連であり、わりと親密な関係はストレインと関連し、面識はあるが親密ではない関係はストレインとやや関連することが見いだされた。この結果は、対人関係の肯定的側面と否定的側面を扱った先行研究（前節参照）における、親密な関係では肯定的側面と否定的側面が併存し得ない一方で、親密度の低い関係やネットワーク全般では肯定的側面と否定的側面が併存しているという知見と合致するものである。ただし、これらの結果は各時点におけるネットワークの大きさに基づいた結果であり、経時的な増減ではネットワークストレインに関する上記の関連は見いだされなかった。

本論文における親密性は厳密な操作に基づいたものではなく、被調査者の主観に大きく委ねられており、方法的にはある程度の問題を内包している。ただし、例えば久保（1993）が親密性の指標として用いた共行動の内容に否定的なものが含まれていないように、一般に親密性は対人関係の肯定的指標と考えられる概念に基づいて言及されることが多く、ここでは関係のサポートィブネスと関係の深さ、つまり親密性は密接な関係にあることが見いだされている（Pierce et al., 1991）。そして本研究における親密性とサポートの関連は概ねこれらの知見と合致するものであり、本研究の結果はある程度信頼できるものであろう。その一方で、親密性が肯定的指標との関連によって言及されることが多いということは、親密性と対人関係の否定的側面の関連についての研究は決して多くはないことを意味している。本研究の知見をその端緒のひとつとして、対人関係の否定的側面と親密性の関連について、今後さらなる知見の蓄積が望まれよう。

第4章第3節

対人ストレス生起過程因果モデルと パーソナリティ

本節では研究VIIとして、対人ストレス生起過程因果モデルにおける主体的要因の影響の議論、具体的には(1)同一個人異なる集団に対する評定の安定性、(2)主体的要因としてのパーソナリティの影響力、の検証を中心的目的とした。調査は1998年4月中旬から7月上旬の4回にわたって、大学および短大新生を対象に、質問紙法により実施した。分析の結果、異なる集団に対してもモデル関連変数の個人の評価は、かなり安定していることが見いだされた。しかし、パーソナリティ(Big Five)の影響力は決定的に大きいものではなく、パーソナリティの影響を考慮した上でも、対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された変数間の関連は支持された。以上の結果から、対人関係の肯定的/否定的側面が精神的健康に影響を及ぼすプロセスは、主体的/環境的両要因によって規定されると考えられた。

4-3-1 問題と目的

本論文ではこれまで、対人関係の肯定的側面/否定的側面と精神的健康の関連を、対人ストレス生起過程因果モデルを中心に検討してきた。しかしこのモデルの因果の妥当性を縦断研究で検証した前節では、双方向性の因果を想定すべきであることと同時に、個人の対人関係認知における肯定性/否定性とも言うべき主体的要因の影響が推測された。

しかし、「対人関係と精神的健康の関連は、主体的要因によってあらかじめ規定されている」と断定するには、研究VIには方法的に問題がある。なぜなら、研究VIは同一集団データに基づいた分析である。そして同一集団である以上、個人を取り巻く環境的要因の差異は小さく、したがって主体的要因が強く反映される結果になったとも考えられるからである。よって、この問題を議論するためには、同一集団における被験者間の差異の検討のみならず、異なる集団における被験者内の差異の検討、そして異なる集団における被験者間の差異の検討も行われるべきであろう。そこで本節では研究VIIとして、大学生と短大生という二つの集団成員を対象に、入学以前と入学以降の異なる二つの集団を評定対象とした調査を行うことによって、主体的要因の影響力の安定性を再検討することを第1の目的とする。

ここでは以下の対立仮説を検討する。

仮説VII-1 : (a) 主体的要因の影響が強い場合、異なる集団に対する同一変数評定間の相

関は高いものとなる。(b) 主体的要因の影響が弱い場合、異なる集団に対する同一変数
評定間の相関は、同一集団における経時的評定間の相関より低いものとなる。

また本節では、対人ストレス生起過程因果モデルに及ぼす、主体的要因としてのパーソ
ナリティの影響力を検討することを第2の目的とする。今回はパーソナリティの指標とし
て、性格特性5因子モデル(Five Factor Model:FFM)に基づいた和田(1996)の日本語版ACL
(Adjective Check List)を用いる。仮説としては先行研究の知見から、以下の点が挙げら
れる。

仮説VII-2: 外向性はモデル変数における肯定的指標(ソーシャルサポート)と、神経質
傾向は同じく否定的指標(ネットワークストレイン、対人ストレスイベント)と正の相関
を示す。

また、パーソナリティのモデルに対する影響力として、以下の対立仮説を検討する。

仮説VII-3: (a) 対人関係認知がパーソナリティによって決定的に規定されるならば、パ
ーソナリティ変数の投入によって、対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された変数間
の関連は消失する。(b) パーソナリティが対人関係認知における決定的な規定因でなけ
れば、パーソナリティ変数を投入しても対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された変
数間の関連は消失しない。

4-3-2 方法

調査の実施

1998年4月中旬、4月下旬、5月下旬、7月上旬の4回にわたり、研究VIと同じくN大
学H学部の1年生、さらに今回はそれに加えてN短期大学の1年生に、質問紙による調査
を実施した。なお、先述の目的から、第1回の調査では入学以前に所属していた学業集団
(ほとんどが高校もしくは予備校)、第2回以降の調査では大学(短大)における対人関
係を評定対象としている。したがって、本研究の「クラス」という記述は、第1回では高
校等のクラス、第2回以降は同学部(同学科)同学年集団を意味する。

質問紙の内容

まずネットワークサイズの測定については、第1回はクラスメイトの総人数に加えて、
親密度(「非常に親密」、「わりと親密」、「面識はあるが親密ではない」)ごとに、該当す
る人がクラスに男女それぞれ何人いるかの記入を求めた。第2回以降は以下の質問が実施
された。

①対人ネットワークマトリックス

現在の日常生活における人間関係について、3カテゴリー×親密度3水準=9つのセル
についてそれぞれ該当する人数の記入を求めた。カテゴリーは「クラスメイト(同学部同

級生)」、「クラス以外の同大学生(先輩やサークルの同級生など)」、「その他の知人(アルバイト先の人間関係、高校までの知人など)」の3つであり、家族・親類は全て除外するよう教示した。親密度は「非常に親密」、「わりと親密」、「面識はあるが親密ではない」の3水準である。また、第2回の調査では、9つそれぞれのセルについて、該当人数のうち何人が入学以前からの知人であるかの記入も求めた。なお、本研究は大学新入生における、クラスという新しいソーシャルネットワークの形成過程を検討することが目的なので、基本的に「クラスメイト」カテゴリーに注目する。

また、4回すべての調査で以下の質問が実施された。なお、人数の記入を求めるソーシャルネットワーク(第1回を除く)、ネットワークストレーン、ソーシャルサポートについては、外れ値によるデータの歪曲を防ぐため、各項目9人以上の場合は9人として分析段階では処理した。

②対人ストレスイベント尺度(頻度)

研究VIと同一の30項目。対人関係における否定的な出来事について、第1回は過去1年間の間、第2回以降は最近およそ1カ月のあいだ、クラス内の人間関係でその出来事がどの程度あったかを、4段階で評定を求めた。

③ネットワークストレーン尺度

研究VIで用いられたものに3項目を追加した16項目、さらにダミー項目4項目を加えた全20項目。否定的な特性を持つ他者がクラス内に何人いるか、人数の記入を求めた。

④ディストレス尺度

中川・大坊(1985)によるGHQ(General Health Questionnaire)28項目版を用いて、最近数週間の精神的健康度の指標とした。ただし第1回では、過去1年間に関して質問した。

⑤ソーシャルサポート尺度

クラス内のソーシャルネットワークにおけるソーシャルサポートの指標として、松崎ら(1990)によるSSQ9を用い、それぞれの項目について該当する人がクラスに何人いるか、人数の記入を求めた。

また、第1・2・4回では以上に加えて以下の尺度が実施された。

⑥対人ストレスイベント尺度(ストレス度)

対人ストレスイベント頻度尺度と同一の30項目について、それぞれの出来事が生じたとき、どの程度ストレスを感じるかの評定を4段階で求めた。

さらに、第3回では以下の尺度を実施した。

⑦日本語版ACL(Adjective Check List)

和田(1996)による、性格特性5因子モデル(Five Factor Model)に基づいたパーソナリティ尺度。特性論の立場から、パーソナリティ因子の基本的次元とされる神経質傾向・外向性・開放性・同調性・誠実性を各因子12項目ずつ(計60項目)の7段階評定で実施した。

4-3-3 結果

モデル使用変数の記述統計量

調査対象のうち、全4回で回答していること、回答における欠損値が少ないこと、現役でこの春大学に進学したことを基準として選定した結果、分析対象は139名（男子63名、女子76名、第1回調査時の平均年齢18.03歳）となった。現役生以外を分析対象から除外したのは、調査対象の1割程度しかいなかったこと、年齢にばらつきが生じること、入学以前に所属していた集団の形態が多様であること（特に予備校生はクラスの形態が多様かつ集団の意味が希薄であること）などによる。なお、男子は全員N大学所属であるが、女子の所属の内訳は39名がN大学H学部、37名がN短期大学である。また、共学高校出身者が分析対象者全体の91.37%、第2回調査時（4月下旬）における自宅生が全体の70.5%（男子52.38%、女子85.53%）であった。

各回の記述統計量を Table 4-3-1 に示す。なお、以下第1回調査（高校時代の評定）を Wave 0、第2回調査（大学第1回評定）を Wave 1、第3回調査（大学第2回評定）を Wave 2、第4回調査（大学第3回評定）を Wave 3 とする。よって、本研究の Wave 1～Wave 3 は、前節で行われた研究VIの第1回～第3回とほぼ同時期の評定である。また、「クラスネットワーク」については、Wave 0 はクラスメイトの総人数、Wave 1以降はクラスメイトカテゴリーにおける親密度3水準の合計人数である。

Table 4-3-1 モデル関連変数の記述統計量ならびに性差

	Wave 0 (高校時代)	Wave 1 (大学4月)	Wave 2 (大学5月)	Wave 3 (大学7月)
クラスネットワーク	39.81(4.28) — 41.00>38.82**	15.76(6.18) — —	<<< 18.42(5.55) — —	= 18.82(6.08) — —
ネットワークストレイン	1.99(1.43) >>> .88 —	0.66(0.80) <<< .83 0.82>0.52*	1.02(1.22) = .91 1.25>0.83*	0.99(1.18) .90 —
ソーシャルサポート	3.58(1.82) >>> .89 —	2.52(1.81) <<< .93 2.17<2.81*	3.37(2.17) < .94 —	3.63(2.24) .95 —
対人ストレスイベント (頻度)	1.96(0.40) >>> .91 —	1.77(0.45) = .94 —	1.80(0.46) > .93 —	1.72(0.44) .94 —
対人ストレスイベント (ストレス度)	2.70(0.38) >>> .87 2.60<2.78**	2.55(0.41) .91 —	— — —	= 2.55(0.45) .93 2.45<2.64*
GHQ	54.30(12.47) >>> .90 —	49.59(10.62) (>) .90 —	51.01(11.98) = .91 48.86<52.71+	52.11(11.96) .91 —

表中上段は平均値（括弧内は標準偏差）、数値間の等号・不等号は経時的増減
(>>>): $p < .001$, >>: $p < .01$, >: $p < .05$, (>): $p < .10$, =: ns

中段は α 係数

下段は性差（有意なもののみ、左が男子、右が女子、**: $p < .01$, *: $p < .05$ ）

まずこれらの平均値の経時的変化を、研究VIと同様に、SASのREPEATEDステートメント、PROFILEオプションによるGLM分析により検証した。ただしクラスネットワークはWave 0、対人ストレスイベント（ストレス度）はWave 2を除いての比較である。その結果、すべての変数について、Wave 0とWave 1の間に有意な減少が生じ、その後、ネットワーク関連変数（クラスネットワーク、ネットワークストレイン、ソーシャルサポート）はいずれもWave 1とWave 2の間に有意な増加が見られた。さらにソーシャルサポートはWave 2とWave 3の間にも有意な増加が生じ、一方対人ストレスイベント頻度はこの間にかけて有意に減少した。しかし、その他には変数の平均値の経時的変化に有意な増減は見られなかった。これらの結果から、大学進学によってそれまでのネットワークとは違う、新たなネットワークの再構築がゼロからスタートしていることと同時に、ネットワークは5月下旬の段階ですでにある程度形成されていることが示された。

次にt検定により性差の検討を行った（Table 4-3-1）ところ、ネットワークストレインのWave 1とWave 2で男子が高得点、対人ストレスイベントストレス度のWave 0とWave 3で女子が高得点という性差が示された。しかし、その他には2時点以上での一貫した性差は見いだされなかった。また、集団差（大学と短大）に関してもt検定を実施した。ただし性差の影響や被験者数のバランスを考慮して、この分析対象は女子（大学N=38~39、短大N=35~37）に限定した。その結果、Wave 0の対人ストレスイベント（ストレス度）で短大の方が高得点という有意傾向（ $t=1.82, p<.10$ ）、Wave 1のGHQで同じく有意差（ $t=2.48, p<.05$ ）、Wave 3の対人ストレスイベント（ストレス度）で同じく有意差（ $t=2.25, p<.05$ ）が見いだされたが、その他の変数で有意な集団差は見いだされなかった。よって、本研究の以降の分析では、基本的に性差ならびに集団差は考慮しないこととする。

Table 4-3-2 モデル構成変数間の相関（同一時点内）

	CN	NS	SS	ISE
Wave 0				
NS	.21*			
SS	.05	.19*		
ISE	-.06	.21*	-.25**	
GHQ	.13	.10	-.22**	.47***
Wave 1				
NS	-.12			
SS	-.43***	.17*		
ISE	-.05	.26**	-.24**	
GHQ	-.05	.18*	-.25**	.44***
Wave 2				
NS	.15+			
SS	.53***	.12		
ISE	.14+	.35***	-.02	
GHQ	-.03	.23**	-.21*	.31***
Wave 3				
NS	.19*			
SS	.46***	-.03		
ISE	.18*	.33***	-.09	
GHQ	.04	.25**	-.13	.56***

CN:クラスネットワーク
 NS:ネットワークストレイン
 SS:ソーシャルサポート
 ISE:対人ストレスイベント頻度
 ***:p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

モデル使用変数の尺度間相関

次に、対人ストレス生起過程因果モデルを構成する変数間の相関を求めた。まず同一時点における相関（Table 4-3-2）では、Wave 1からWave 3にかけてクラスネットワークとソーシャルサポート、すべての回においてネットワークストレインと対人ストレスイベント頻度、同じく対人ストレスイベントとGHQとの間に有意な相関が示された。しかし、モデルで仮定されているクラスネットワークとネットワークストレイン、ソーシャルサポートとGHQの間の相関には一貫性は示され

なかった。また、異時点間における相関 (Table 4-3-3) では、(測定内容が異なる Wave 0 のクラスネットワークを除いて) いずれも同一変数間で高い相関が示された。また、すべての回で対人ストレスイベント頻度と GHQ の間に安定した双方向性の相関が確認され、これら 2 変数は常に、その次の回以降のネットワークストレインとも有意な相関を示した。その一方で、ネットワークストレインと、次の回以降の対人ストレスイベントならびに GHQ との相関は、やはりほとんどで有意 (傾向) であったものの、その相関係数は相対的に小さいものであった。

さて、本研究の目的は、同一集団に対する評定と異なる集団に対する評定から、主体的要因の影響を検討することである。そこで、まず同一集団への評定である Wave 1 から Wave 3 にかけての評定における相関を検討すると、前述の関連に加えて、クラスネットワークとソーシャルサポートの間に安定して高い相関が双方向で示されている。よって、本研究でも研究 VI と同様に、同一集団に対する評定ではクラスネットワークとソーシャルサポート、対人ストレスイベントと GHQ がそれぞれ相互に強い関連を持つことが確認された。一方、異なる集団間の評定である Wave 0 と Wave 1 ~ Wave 3 の相関では、完全に客観的な指標である Wave 0 のクラスネットワークが、それ以降のいずれの変数とも有意な相関を示さなかったのに対して、それ以外の変数については、Wave 0 の評定とそれ以降の評定において多くの有意な相関が見いだされ、それらは基本的に Wave 1 から Wave 3 における同一集団評定の場合と同じ傾向を示した。また、同一変数間の相関係数の絶対値は、異なる集団に対する評定間でも同一集団に対する評定と同様に大きかった。したがって、仮説 VII-1 に関しては (a) の仮説が支持され、主体的要因の影響はかなり強いことが示された。つまり、主観が介在する変数に関しては同一集団における経時的変化、ならびに異なる集団間評定のいずれにおいても研究 VI と同様の関連が示され、主体的要因の影響力の

Table 4-3-3 モデル構成変数間の相関 (異時点間)

	Wave 0					Wave 1					Wave 2				
	CN	NS	SS	ISE	GHQ	CN	NS	SS	ISE	GHQ	CN	NS	SS	ISE	GHQ
Wave 1															
CN															
NS	-.04	.02	.19c	-.04	-.13										
SS	.02	.49a	.08	.23b	.19c										
ISE	-.04	.19c	.50a	-.24b	-.25b										
GHQ	.01	.19c	-.28b	.72a	.45a										
Wave 2															
CN															
NS	.16d	.09	-.12	.47a	.78a										
SS	-.02	.22b	.26b	.06	-.05	.58a	.15d	.45a	.09	-.02					
ISE	.11	.42a	-.02	.28a	.32a	.06	.60a	.01	.36a	.27b					
GHQ	-.00	.22b	.41a	-.13	-.14	.42a	.18c	.65a	-.14	-.10					
Wave 3															
CN	-.03	.24b	-.18c	.47a	.37a	.11	.15d	-.05	.54a	.39a					
NS	.09	.17d	-.16d	.39a	.66a	-.19c	.15d	-.15d	.40a	.64a					
SS	-.02	.12	.14d	.01	-.05	.47a	.08	.41a	.09	-.05	.72a	.19c	.43a	.24b	-.00
ISE	.10	.38a	.03	.35a	.25b	.15d	.51a	.02	.39a	.19c	.20c	.72a	.03	.36a	.33a
GHQ	.04	.15d	.47a	-.12	-.13	.34a	.06	.60a	-.13	-.09	.54a	.02	.78a	-.05	-.13
	.03	.16d	-.19c	.41a	.37a	.07	.15d	-.17c	.50a	.40a	.23b	.27b	-.04	.61a	.44a
	.06	.15d	-.20c	.38a	.65a	-.01	.11	-.23b	.37a	.61a	.10	.22c	-.16d	.45a	.75a

CN: クラスネットワーク
 NS: ネットワークストレイン
 SS: ソーシャルサポート
 ISE: 対人ストレスイベント頻度
 a: $p < .001$ b: $p < .01$ c: $p < .05$ d: $p < .10$

安定性が示された。それと同時に変数間相関についても、研究VIと同様に双方向性を仮定すべき関連が少なからず見いだされた。

同一時点におけるパーソナリティの影響

次に、第3回調査 (Wave 2) データに基づいて、同一時点における対人ストレス生起過程因果モデルとパーソナリティの関連を検討した。以下の分析では、第3回調査 (Wave 2) のみに限って、欠損値などの不備がほとんどなかった被調査者231名 (男子106名、女子125名、平均年齢18.42歳) を分析対象とした。全4回の調査データを分析対象としなかったのは、(1) モデル関連変数の安定性が高く、全4回を分析対象としても同じような結果の繰り返しで冗長になるおそれがある；(2) なるべく多くの被調査者を分析対象とするには、全4回を分析対象とすると分析対象者数が激減する、(3) 先行研究 (Asendorpf & Wilpers, 1998) において、対人関係に及ぼすパーソナリティの影響は出会いから比較的早い段階で顕在化し、その影響はその後も安定していることが見いだされている、などの理由による。

Table 4-3-4 尺度の平均・標準偏差・ α 係数

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
クラスネットワーク	227	17.41	5.78	—
ネットワークストレイ	231	0.99	1.14	.90
ソーシャルサポート	229	3.10	2.12	.95
対人ストレスイベント頻度	230	1.77	0.45	.93
GHQ	227	51.63	12.57	.92
外向性	228	53.39	11.63	.91
神経質傾向	229	52.40	13.48	.92
開放性	227	49.40	9.31	.82
誠実性	226	49.15	10.79	.86
調和性	226	52.37	9.71	.82

Note: ネットワークストレイ、ソーシャルサポート、対人ストレスイベントは、合計点を項目数で割った値

尺度はすべて原典の構成に基づいた合計得点を尺度得点とした。その平均値、標準偏差、 α 係数 (Table 4-3-4) ならびに尺度間相関 (Table 4-3-5) を示す。その結果、まず対人ストレス生起過程因果モデル関連変数間では、(1) クラスネットワークとネットワークストレイ・ソーシャルサポートの関連が示され；(2) ネットワークストレイは対人ストレスイベントと有意な関連を示した一方でソーシャルサポートは対人ストレスイベントと無関連であり；(3) 対人ストレスイベントの GHQ との相関はソーシャルサポートと GHQ の相関を上回っていた。これらの結果は、いずれもモデルに合致するものである。次に、対人ストレス生起過程因果モデル関連変数とパーソナリティの相関を検討

Table 4-3-5 尺度間相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. クラスネットワーク	—									
2. ネットワークストレイ	.19**	—								
3. ソーシャルサポート	.54***	.15*	—							
4. 対人ストレスイベント頻度	.18**	.32***	.02	—						
5. GHQ	-.04	.17**	-.17*	.31***	—					
6. 外向性	.25***	.02	.25***	-.08	-.33***	—				
7. 神経質傾向	.04	.22***	-.03	.26***	.54***	-.37***	—			
8. 開放性	.07	.15*	.06	.09	.01	.44***	-.08	—		
9. 誠実性	-.05	.05	.02	.03	.11+	-.05	.05	.16*	—	
10. 調和性	.06	-.24***	.01	-.14*	-.33***	.09	-.26***	-.06	-.38***	—

Note: ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

した。まず外向性は、クラスネットワーク・ソーシャルサポートと正の相関、GHQ と負の相関を示した。神経質傾向は、ネットワークストレイン・対人ストレスイベント・GHQ と正の相関を示した。さらに調和性がネットワークストレイン・GHQ と負の相関を示した。以上の結果は、先行研究で指摘されてきた肯定的指標と外向性、否定的指標と神経質傾向の関連と合致するものであり、仮説VII-2は支持されたと考えられる。しかし、神経質傾向とGHQの相関を除いては、その相関は非常に高いというわけではなかった。

Table 4-3-6 パーソナリティを除去した偏相関係数

	1	2	3	4
1. クラスネットワーク				
2. ネットワークストレイン	.17*			
3. ソーシャルサポート	.51***	.12		
4. 対人ストレスイベント頻度	.16*	.30***	.01	
5. GHQ	-.02	-.02	-.22**	.22**

Note:***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

さらに、パーソナリティ5尺度の影響を除去した、対人ストレス生起過程因果モデル関連変数間の偏相関係数を求めた (Table 4-3-6)。その結果、ネットワークストレインとGHQが無相関となり、対人ストレスイベントとソーシャルサポートのGHQに対する相関係数が拮抗してきた。しかしその他には変数間の関連に変化はなく、やはり対人ストレス生起過程因果モデルに合致する関連が示された。

Table 4-3-7 重回帰分析 (stepwise、投入基準.15)

説明変数\基準変数	1	2	3	4	5
外向性	.34***	—	.10+	—	-.11+
神経質傾向	.14*	.17*	—	.23***	.39***
開放性	-.11	.15*	—	—	—
誠実性	—	—	—	—	—
調和性	—	-.21**	—	—	-.15*
1. クラスネットワーク	—	.17*	.51***	.10	—
2. ネットワークストレイン	—	—	—	.31***	—
3. ソーシャルサポート	—	—	—	—	-.19**
4. 対人ストレスイベント頻度	—	—	—	—	.19**
5. GHQ	—	—	—	—	—
$adj-R^2$.06**	.12***	.29***	.19***	.40***

Note:***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

表中の数値は標準偏回帰係数、—は投入したが基準を満たさなかった変数

最後に、パーソナリティ尺度も投入して、対人ストレス生起過程因果モデルに基づく重回帰分析を実施した (Table 4-3-7、Figure 4-3-1)。その結果、パーソナリティの影響も少なからず見られたものの、それによって対人ストレス生起過程因果モデルで想定されたパスが消滅することはなかった。したがって、仮説VII-3に関しては (b) が支持され、対人ストレス生起過程因果モデルに及ぼすパーソナリティの影響は決定的に大きいものではなく、対人関係の肯定的/否定的側面が精神的健康に影響を及ぼすプロセスは、主体的/環境的両要因によって規定されると考えられる。

対人ストレスイベントの類型ごとの検討

最後に、本研究の中心的目的ではないが、対人ストレスイベントの下位尺度について、類型ごとにその経時的変化とパーソナリティとの関連を、補足的に検討した。まず経時的

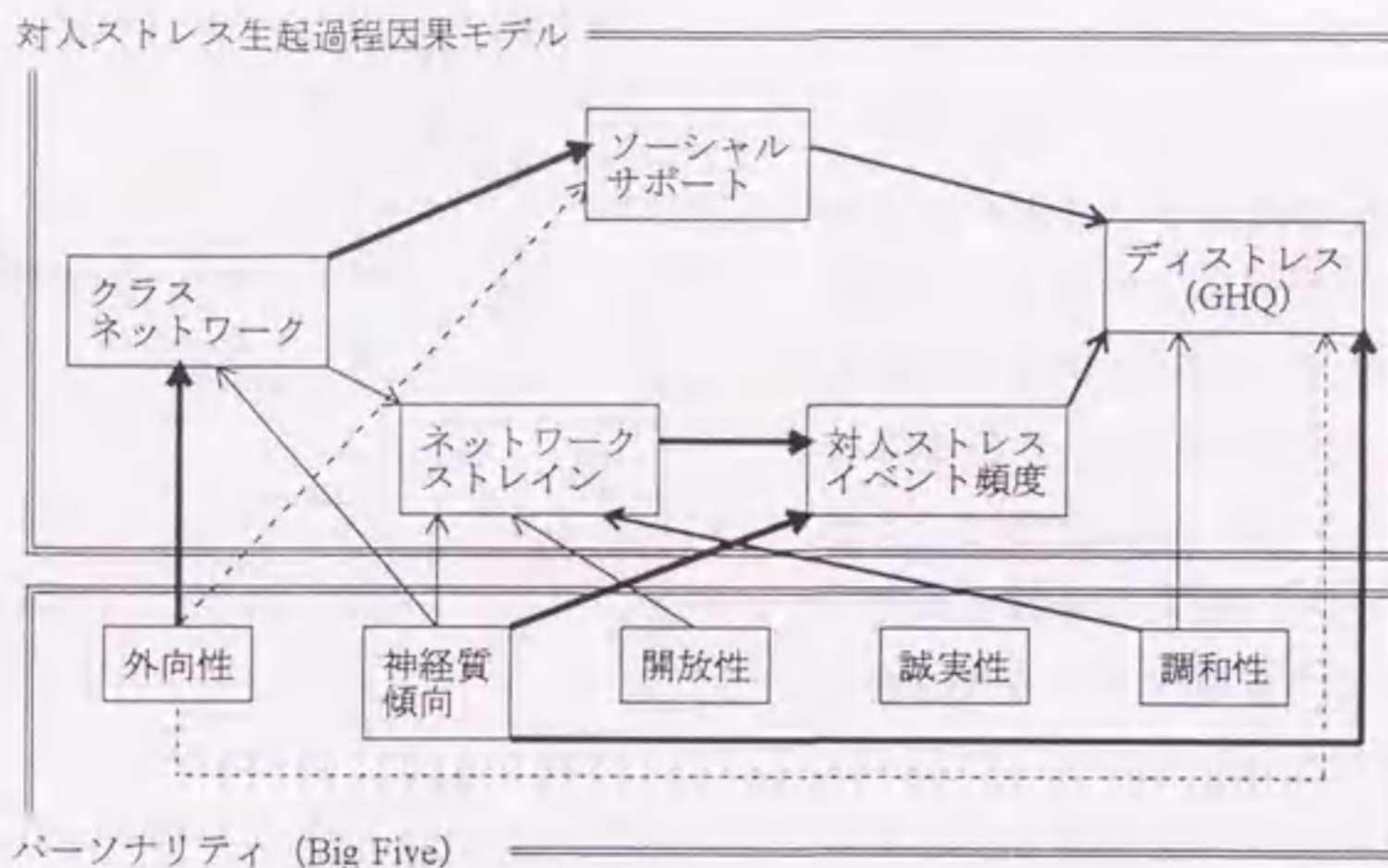
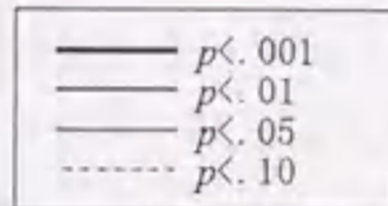


Figure 4-3-1 パーソナリティを投入した対人ストレス生起過程因果モデルのパス・ダイアグラム



変化を、SAS の REPEATED ステートメント、PROFILE オプションによる GLM 分析により検証したのが Table 4-3-8 である。その結果、まずすべての下位尺度が Wave 0 から Wave 1 にかけて減少した。ただし、対人劣等はその他と比べてその減少の度合いが小さい。その後、対人葛藤は（若干増加するものの）ほぼ一定、対人劣等は Wave 1 から Wave 2 にか

Table 4-3-8 研究 VII における対人ストレスイベント下位尺度の各回平均値ならびにその増減

	Wave 0	Wave 1	Wave 2	Wave 3
対人葛藤	1.75 (0.47) .83	1.48 (0.48) .90	1.56 (0.49) .87	1.53 (0.47) .89
対人劣等	2.18 (0.52) .81	2.07 (0.56) .84	2.08 (0.59) .86	1.94 (0.53) .86
対人摩耗	2.16 (0.53) .72	1.95 (0.59) .81	1.89 (0.58) .82	1.84 (0.52) .79

上段は平均値 (括弧内は標準偏差)、下段は α 係数
 (>>>): $p < .001$, >>: $p < .01$, >: $p < .05$, (>): $p < .10$, =: ns

けては同じだが Wave 2 から Wave 3 にかけて大きく減少、対人摩耗は安定して減少しているものの、その変化は有意ではなかった。

さらに、各回ごとの対人ストレスイベント下位尺度とパーソナリティの相関を求めたのが Table 4-3-9 である。その結果、まず対人葛藤とは神経質傾向と調和性が一貫して有意な相関を示した。対人劣等については外向性・神経質傾向・調和性がある程度に関連を示した。さらに対人摩耗については、神経質傾向・開放性・調和性が複数回で有意な関連を示した。したがって、対人ストレスイベントの種類とパーソナリティの関連については、いずれの種類においても神経質傾向が正の関連、調和性が負の関連を示し、加えて類型特定の関連として、対人劣等と外向性、対人摩耗と開放性の関連が見いだされた。

4-3-4 考察

Table 4-3-9 対人ストレスイベント下位尺度とパーソナリティの相関

	対人葛藤			
	Wave 0	Wave 1	Wave 2	Wave 3
外向性	-.10	-.08	.08	.10
神経質傾向	.24**	.26**	.23**	.18**
開放性	.11	.09	.19*	.07
誠実性	.16+	.07	.05	.05
調和性	-.29***	-.30***	-.24**	-.23**

	対人劣等			
	Wave 0	Wave 1	Wave 2	Wave 3
外向性	-.24**	-.24**	-.20*	-.11
神経質傾向	.35***	.38***	.31***	.38***
開放性	-.13	-.09	-.03*	-.14+
誠実性	-.02	.07	-.01	-.07
調和性	-.17+	-.20*	-.17*	-.16+

	対人摩擦			
	Wave 0	Wave 1	Wave 2	Wave 3
外向性	-.09	.03	.15+	-.01
神経質傾向	.14	.30***	.14	.27**
開放性	.04	.23**	.26**	.07
誠実性	-.08	.12	-.01	-.09
調和性	-.17+	-.29***	-.15+	-.17*

Note:***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$

本節では、対人ストレス生起過程因果モデルにおける主体的要因の影響を議論するために、(1) 同一個人の異なる集団に対する評定の安定性、(2) 主体的要因としてのパーソナリティの影響力、を検討した。そして分析の結果、所属集団の移行に伴いネットワークの再構成が行われていることが確認された一方で、その過程においても、異集団間の対人関係認知における個人の相対的評価はかなり安定していることが見いだされた。しかし、パーソナリティの影響力は決定的に大きいものではなく、パーソナリティの影響を考慮した

た上でも、対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された変数間の関連は支持された。また、モデル変数とパーソナリティを説明変数とした、モデルに基づいた一連のパス解析では、いずれの基準変数に対しても、モデル変数とパーソナリティ変数の両者が有意な寄与を示した。

つまり、本研究では主体的要因の影響の大きさが見いだされたと同時に、パーソナリティがモデル使用変数の決定的要因ではないことも示された。そして、本研究は主体的要因をパーソナリティ変数としているので、この二つの知見は矛盾するものである。この理由としては、「パーソナリティが対人関係認知における肯定性/否定性の構えを反映する」という仮定に問題がある可能性が考えられる。例えば、自分を外向的であると評価する人の中にも、他者との相対的比較においてはそれほど外向的ではないのに、肯定的な認知の歪みによって自身を外向的であると評価する人もいれば、現実に他者よりも外向的であって、そのような自分を正確に認知している人もいるであろう。この問題は自己評定による質問紙法を用いる限界によるものであるが、より正確な知見を得るためには何らかの形で客観的指標を用いた研究が望まれよう。

加えて、パーソナリティと対人関係の関連は、それらを媒介する認知の歪みによるという解釈も成り立つ一方で、外向的な人は対人関係に積極的であり、その結果としてサポートネットワークを拡大しやすいなど、正確な認知における関連成立可能性も当然考えられる。本研究ではパーソナリティを、モデル使用変数の関連を媒介するものとして位置づ

けたが、Asendorpf & Wilpers (1998) は青年期におけるパーソナリティと社会的関係の影響の方向性を検討し、パーソナリティは対人関係の在り方に影響する一方で、その逆は成立しないことを見いだしている。その意味では、パーソナリティは独立変数として位置づけるべきであるかも知れないが、その位置づけは長期的視点から考えればトートロジーとなるなど、少なからず問題を含んでおり、この点に関しては次節で議論したい。

しかし、対人関係や精神的健康は主体的要因によって決定的に規定されるわけではないことは再度主張したい。先行研究においても、個人を取り巻く状況はパーソナリティによって決定的に規定されるわけではなく (Diener, Larsen, & Emmons, 1984)、外向性/内向性といったパーソナリティ特性は、社会的関係との交互作用によって、初めて主観的幸福感/抑うつを説明しうる (Hotard, McFatter, McWhirter, & Stegall, 1989) ことが明らかにされている。また、ソーシャルサポートとパーソナリティの関連を検討した Sarason et al.

(1997) も、「ソーシャルサポートは社会的構造、社会的関係、個人的属性を含んだ相互作用に関する過程である」と結論づけており、Lakey et al. (1996) も、知覚されたサポートの判断は (1) 知覚者とサポーターの交互作用、(2) サポーター特性、(3) 知覚者のバイアス、の順に説明されることを明らかにしている。さらに Cutrona (1989) は、サポートの自己報告よりも客観的報告の方が抑うつの予測力が高いことを見いだしており、この知見は、自己報告バイアス以上に客観的なネットワークの在り方が精神的健康に影響を与えうる可能性を示唆している。知覚されたサポートと精神的健康の関連はパーソナリティによって導かれた擬似的な関連に過ぎないと主張している Bolger & Eckenrode (1991) でも、実際の社会的接触 (特に義務的ではなく任意的な接触) は、パーソナリティを統制してもやはり影響力を持ちうることを示されている。これらの知見、ならびに本研究の結果をあわせて考えれば、対人関係の肯定的/否定的側面が精神的健康に影響を及ぼすプロセスは、やはり主体的/環境的両要因によって規定されると考えるべきであろう。そして、本章で議論された対人ストレス生起過程因果モデルの諸問題は、その提唱時において主体的要因を考慮しなかったことによって生じたと考えられるが、一方でこのモデルの背景には、主体と環境の二段階媒介モデルがある。本研究の知見は、主体的/環境的両要因ともに対人ストレス過程において重要な役割を果たすと同時に、両要因間に密接な相互関連があることを示すものである。そして、前者の知見は主体と環境の二段階媒介モデルに合致するものであるが、後者の視点がこのモデルには欠落していた。対人ストレス過程において主体的要因と環境的要因は、時には独立に、そして時には連動して影響を及ぼすものであり、同時に影響されるものなのである。

第4章第4節

2つの縦断研究に関する総合的考察

本節では、本章の2つの縦断研究に関する総合的な考察を行った。まず、大学新入生の新たなネットワークへの適応過程という観点からは、大学進学によって新たなネットワークの再構築がゼロからスタートしていること、新たなネットワークは5月下旬の段階である程度形成されていること、ただし、ソーシャルサポートのみはその後も増大しうることも、対人関係の親密化過程に関する知見に基づいて議論された。対人ストレスに関しては、集団移行に伴いすべてのストレス生起頻度は減少し、その後、対人葛藤の生起頻度は経時的に差はないが、対人劣等はある程度ネットワークが構築された後に減少し、対人摩耗は安定して緩やかな減少を示す、ことが示唆された。ストレス度（ストレス感受性）については、女子の対人ストレスに対する脆弱性のみ確認された。次にモデルの盲点として、対人ストレスイベントがストレッサーとしてのみならず、対処方略に影響を及ぼす媒介要因となり得る可能性が指摘された。さらにパーソナリティ・アプローチの問題点として、概念定義上の問題、スケープゴート形成への危惧、社会経済的に区分される集団間の差異を説明するのに有効ではない点などが列挙された。加えて、対人関係の親密化過程と、対人関係の両価性の関連が議論された。最後に今後の課題として、否定的側面への耐性増強、否定的とされる対人関係の肯定的意義の検討、相対評価の限界と絶対基準の必要性、さまざまな集団・指標を用いての主体的／環境的要因の相対的影響力のさらなる明確化の必要性が指摘された。

4-4-1 大学新入生のネットワーク適応過程

本章では2つの縦断研究に基づいて、対人ストレス生起過程因果モデルにまつわる諸問題を検討してきた。しかしここまで、大学新入生における新たなネットワークへの適応過程という意味での議論は、十分には行われていない。そこでまず、この観点から本章の研究を振り返りたい。

ネットワークの形成

研究VIでは、クラスネットワークならびにネットワークストレインが第2回で有意に増加したが、第3回ではほぼ変化がなかった。しかし、ソーシャルサポートは第2回で増加せず、第3回で有意に増加した。研究VIIでは、すべての変数についてWave 0とWave 1の間に有意な減少が生じ、その後ネットワーク関連変数（クラスネットワーク、ネットワークストレイン、ソーシャルサポート）はいずれもWave 1とWave 2の間に有意な増加が見

られた。さらにソーシャルサポートは Wave 2と Wave 3の間にも有意な増加が生じた。これらの結果から、大学進学によってそれまでのネットワークとは違う新たなネットワークの再構築がゼロからスタートしていることと同時に、新たなネットワークは5月下旬の段階ですでにある程度形成されていること、ただし、ソーシャルサポートのみはその後も増大しうることも示唆された。

大学新入生のネットワーク形成過程を縦断的に検討した Hays & Oxley (1986) は、ネットワークの形成は経時的に広がりと深さを増し、二者関係の親密化過程に関する社会的浸透理論 (social penetration theory : 対人関係の親密化は経時的かつ漸進的に進行するとする理論) と合致すると結論づけている。その一方で、本研究の知見は基本的には、同じく二者関係の親密化過程に関する初期分化現象 (early differentiation of relatedness : 対人関係の親密化は関係の初期段階によってその後の進展がかなり決定づけられるとする理論) に合致するものであると考えられ、Hays & Oxley (1986) と相反するものである (なお、二者関係の親密化におけるこの2つの理論の論争については、山中 (1994) などを参照されたい)。果たして、ネットワークの形成過程においては、どちらの理論が適合的なのだろうか。

まず、Hays & Oxley (1986) では、「広さ」として、交換される社会的相互作用のバリエーション (多様性) の展開が、社会的浸透理論と合致するとされていた。そして本研究でネットワークの「広さ」として考えられるネットワークサイズについては、Hays & Oxley (1986) でもかなり安定性の高い結果が示されている。ちなみに Hays 自身も、二者関係 (同性友人関係) の発展については、出会いから6週間の時点でその後はかなり予測可能となることを見いだしている (Hays, 1985)。加えて、大学新入下宿生の対人的環境発達を、PDM 法を用いて縦断調査した古川・藤原・井上・石井・福田 (1983) は、人数、心理的距離いずれも5月中旬に新旧ほぼ同じになることを見いだしている。したがって、ネットワークサイズを「ネットワークの広さ (広がり)」と考えれば、これは初期分化の方が適合性があるといえよう。その一方で、本研究でもサポートのみは7月にかけてまでも増加しており、これは Hays & Oxley (1986) の主張と同様、社会的浸透理論に合致する結果である。したがって、これまでの研究からは、ネットワークそのものは初期分化するが、その後サポートに関する側面に関しては漸進的な進行が生じうると考えられる。

対人ストレスとディストレス

まず対人ストレスイベントの頻度についてである。研究VIにおいて、全体得点は第1回と第2回で変化はなかったが、第3回で減少が見いだされた。さらに下位尺度を検討した結果、対人葛藤は第2回で若干の増加傾向があるがほぼ一定、対人劣等が第3回で相対的に大きく減少しており、対人摩擦が安定した減少傾向にあった。次に研究VIIでは、全体得点がやはり Wave 2から Wave 3にかけて有意に減少した。さらに下位尺度ごとに検討する

と、まずすべての下位尺度が Wave 0から Wave 1にかけて減少しているが、対人劣等はその他と比べてその減少の度合いが小さい。その後、対人葛藤は（若干増加するものの）ほぼ一定、対人劣等は Wave 1から Wave 2にかけては同じだが Wave 2から Wave 3にかけて大きく減少、対人摩擦は安定して減少しているものの、その変化は有意ではなかった。しかし全体的に、研究VIの第1回から第3回にかけての変化と、研究VIIの Wave 1から Wave 3にかけての変化はかなり類似しており、本章の研究結果からは、(1) 集団移行に伴いすべての種類の対人ストレス生起頻度は減少し、5月から7月にかけてさらに減少する；(2) 新たなネットワークにおいて、対人葛藤の生起頻度は経時的に差はないが、対人劣等はある程度ネットワークが構築された後に減少し、対人摩擦は安定して緩やかな減少を示す、ことが示唆された。

これらの知見について考察すると、まず(1)については、集団移行はそれ自体がストレスフルなライフイベントとも考えられるが、本研究の結果は、そこに対人ストレスの増加が併存するわけではなく、むしろ集団移行が対人ストレスの減少を伴うことを示唆している。これは本論文における対人ストレスの定義が、実際に行われた社会的相互作用に基づくことに由来すると考えられる。つまり、集団移行はネットワークの縮小をもたらし、ネットワークの縮小は社会的相互作用の減少をもたらし、社会的相互作用の減少は対人ストレス生起頻度の減少をもたらすと考えられるのである。また、この知見を導いた研究VIIの Wave 0と Wave 1の比較は、高校3年時と大学入学期の比較である。そして今日のおが国の受験状況から、前者が後者以上にストレスフルな状況であることは想像に難くないであろう。ただし、社会的相互作用量が対人ストレス生起頻度を規定するとしたならば、5月から7月にかけてのさらなる対人ストレス生起頻度の低下は直感に反する結果である。この理由としては、次に記す、対人ストレス下位尺度の特徴によるところが大きいのではないだろうか。そこで(2)についてであるが、まず対人葛藤の生起頻度に差がないことは、前章で述べた対人葛藤回避規範の高さから妥当であろう。また、対人摩擦が安定して緩やかな減少を示すことも、新たなネットワークへの参加が当初は緊張をもたらし、やがてそれに慣れていく過程を考慮すれば、「対人関係における気疲れ」というこの概念から妥当な結果であると考えられる。さらに対人劣等がある程度ネットワークが構築された後に減少するというのは解釈が困難であるが、本研究で扱った被調査者は、さまざまな高校から、それなりに難度の高い大学（短大）へ進学した者であり、それまでの集団では学業的側面に優越感を持っていたものの、大学進学に伴い新たな同質集団が形成されることによって、その優越感が喪失されたと考えられる。つまり、「優秀な人」だった自分が進学によって「普通の人」になり、そのギャップから生じる劣等感を克服できるまでに若干時間を要するというのではないだろうか。ただしこれはあくまで推測の域を出ないものであり、第1回から第2回にかけての変化と Wave 1から Wave 2にかけての変化に一貫性が見られなかったことから、対人劣等の経時的変化についてはさらなる検討が必要である。

う。そしてやはり、ネットワークストレインが拡大傾向にある一方で対人ストレスイベントが減少傾向にあるのは、本論文で主張された変数間関連に疑問を呈するものである。後述する特定二者関係では、その知見に普遍性は得られていないものの、一般に関係の親密化に伴って対人関係の否定的側面も増加するとされており、本節の結果はこの知見とも矛盾する。このような結果が生じた理由としては、新たなネットワークへの参加という生活移行事態の独自性、前章で議論した現代青年の対人葛藤回避傾向など、さまざまな要因が考えられる。この問題に関しては第5章第1節でも議論するが、これは今後さらに検討を要する課題であろう。

対人ストレスイベントのストレス度については、研究VIでは全体、顕在的対人ストレス、潜在的対人ストレスのいずれも減少し、特に顕在的対人ストレスの低下が著しかったが、研究VIIではWave 0からWave 1で有意に減少し、Wave 1からWave 3では変化は生じなかった。この変数は（第2章第2節でいうところのストレス感受性として）ストレスサーに対する個人の耐性／脆弱性の指標として想定されるものであり、ある種の安定した個人特性とも考えられるが、本研究の結果はこの仮定を否定するものである。よって、個人のストレス感受性は状況やネットワークの形成過程において変動しうるものと考えらるべきであろう。ただしその変化も本研究では一貫した知見は得られておらず、これも今後に残された検討課題のひとつである。

GHQは研究VIIのWave 0からWave 1にかけて有意な減少を示したのみで、それ以外には研究VI、研究VIIともに経時的変化を示さなかった。この結果も、大学受験というイベントが、大学進学というイベントよりも、相対的にかなり強力なストレスであることを示唆するものと言えよう。

個人属性による違い

性差：研究VIでは、第1回のストレス度で女性の方が高い他は、第1回、第2回では性差はみられなかった。第3回ではクラスネットワークならびにソーシャルサポートで女性の方が有意に高得点であったが、全般的に性差がみられた変数は少なかった。研究VIIでは、ネットワークストレインのWave 1とWave 2で男子が高得点、対人ストレスイベント（ストレス度）のWave 0とWave 3で女子が高得点という性差が示された。しかし、その他に2時点以上で一貫した性差は見いだされなかった。したがって本章の研究に関しては、性差はあまり影響を及ぼさなかったと考えられる。これは、対人関係や精神的健康における性差を見いだした多くの研究と合致せず、さらなる検討が必要である。ただしストレス度（ストレス感受性）については、2つの研究でともに女子の方が高いという結果が得られている。これは前章でも述べた「女子の方が対人ストレスの否定的影響を受けやすい」という知見（Compas et al., 1993）や、大学生活不安尺度において、女子の方が不安を感じやすいという性差を見いだした藤井（1998）とも合致する結果であり、少なくとも女子の

対人ストレスに対する脆弱性のみは確証されたと見えよう。

居住形態差：研究VIでは、クラスネットワークについては、入学直後は「面識はあるが親密ではない」クラスメイトの分、自宅生の方がネットワークは大きいようであるが、この差は第2回以降見いだされない。これは、入学当初は自宅生の方が当然既知の関係が多く、また先述したネットワークの形成過程は5月下旬までに行われるという知見から、妥当な結果であろう。また、ネットワークストレイン、対人ストレスイベント（頻度）、そしてGHQでいずれも下宿生の方が相対的に否定的な結果であることは注目に値する。しかしこの居住形態差についても、その他の変数に有意差はみられなかった。

集団差：研究VIIにおける集団（大学と短大の）差（ただし女子のみ）では、Wave 0の対人ストレスイベント（ストレス度）で短大の方が高得点という有意傾向（ $t=1.82, p<.10$ ）、Wave 1のGHQで同じく有意差（ $t=2.48, p<.05$ ）、Wave 3の対人ストレスイベント（ストレス度）で同じく有意差（ $t=2.25, p<.05$ ）が見いだされたが、その他の変数で有意な集団差は見いだされなかった。したがって本研究で明確に示された集団差はないに等しいが、あえて言及すれば短大の方がストレス度（ストレス感受性）が高い点が注目されよう。二つの集団を比較すると、大学は異性も混在する集団、短大は同性のみの集団という違いがある。また、多少語弊があるがステレオタイプ的には、大学は男性性の高い集団（法学部）、短大は女性性の高い集団である。よって主体的のみならず、環境的な女性性の高さがストレス感受性に寄与する一要因である可能性も推測される。女性は女性であるが故に脆弱であるというわけではなく、女性的であるとされる生活様式のためにストレス脆弱性を高めているのかも知れない。

4-4-2 変数の位置づけの可変性

本章では、対人ストレス生起過程因果モデルの因果の妥当性が中心的論点のひとつとなったが、最終的にこの問題が生じた理由として（1）因果の双方向性、（2）主体的要因、の2点が十分に考慮されなかったことが挙げられた。これらについてはすでに議論したが、さらにもう一点、モデルの盲点となっている問題をここで言及しておく。それは、対人ストレスイベントがストレッサーとしてのみならず、対処方略に影響を及ぼす媒介要因となり得る可能性である。例えば Coyne, Ellard, & Smith (1990) は、サポート感是对処努力に負荷を及ぼし得る社会的葛藤や摩耗経験がないときに、最もよく解釈され得ることを示唆している。また、Holahan, Moos, & Bonin (1997) は自身らの先行研究から、ソーシャルサポートが対処を促進するように、社会的ストレッサーは対処への努力を侵食するのではないかと推測し、それを実証している (Holahan, Moos, Holahan, & Brennan, 1997)。心理社会的ストレス研究では一般に、「ライフイベント（ストレッサー）はニュースの到

来とともに始まる」(Wheaton, 1996, p. 58, 括弧筆者)とされており、ストレインはストレスそのものとはなり得ない。それにしたがって本研究のモデルは、対人ストレスイベントをストレス、ネットワークストレインをイベントの規定因ならびにイベントの影響力の媒介因と想定した。しかしそこでは、イベントが媒介因となる可能性は検討されていない。もしかしたら、実は対人ストレスイベントとネットワークストレインの違いは、急性ストレス(イベントストレス)と慢性ストレスの違い(Wheaton, 1996)であり、ともにストレスとして、さらに同時にストレス媒介要因として機能しているのかも知れない。ただし、この問題を検討するには、本論文の枠組みをより複雑にし、さらに対人ストレスと非対人ストレスを同時に扱う研究が必要であろう。そしてそれは本論文の議論可能な範疇を大きく越えることになるので、今後の課題として言及するに留めておくこととする。

4-4-3 パーソナリティ・アプローチの疑問と限界

ところで本論文は、安定した個人特性による検討、つまりパーソナリティ・アプローチを、なるべく用いない方向で議論を展開してきた。パーソナリティ・アプローチは方法的にも用いやすく、論理的にも厳密さと正確さを兼ね備えており、そこから導かれる知見は強い説得力を持つものである。そして本章でも、パーソナリティは決定的ではなかったものの、かなりの影響力を持つ要因であることが示された。そこでここでは、本論文でパーソナリティを積極的に扱わなかった理由とも言えるであろう、パーソナリティ・アプローチの問題点を列挙したい。

まずひとつは、パーソナリティの定義が内包している問題である。パーソナリティという概念の多くは、相対的評価に基づいた個人の記述である。故に、ストレス低減に有効なある種のパーソナリティを、万人が持ち得ることは、パーソナリティの定義上不可能である。また、例えばストレス耐性であるハーディネス(頑健性)という概念が、ストレスのインパクトを緩和するパーソナリティ要因として扱われる場合などのように、パーソナリティによるストレス過程の説明はトートロジーに陥る危険も少なくない。

さらに、このような定義がもたらす矛盾を保留したとしても、依然ストレス低減という観点においてこのアプローチには問題点がある。例えば先行研究では、うつ状態にあるものは対人的相互作用においてネガティブに反応する傾向があることが明らかにされている(Rook et al., 1994)。そして非抑うつのことを期待されている状況で抑うつの人が相互作用した場合に、その人は相互作用の相手からもっとも否定的に評価されやすく(Alloy, Fedderly, Kennedy-Moore, & Cohan, 1998)、その結果、ディストレスが一次的社会的関係の減少をもたらす可能性が生じる(Johnson, 1991)。このように、心理社会的スト

レス過程と精神的健康は、基本的にはループする、つまり双方向の因果を持ちつつ、次第にその規模を拡大していくと考えられる。したがって、ストレス低減のためにはそのループをどこかで分断することが必要となるが、パーソナリティ・アプローチに基づいて何らかの提言をするならば、ストレス過程において危険因子となり得るパーソナリティの変容が要求されることになろう。そしてこれは、ストレスへの抵抗力が高く、新たな課題へも柔軟に対応できる特性を持つ個人の育成という形で具体化されるだろう。しかし、そもそも多くのパーソナリティは特性論的な概念であることが前提とされている（大淵・堀毛，1996）。つまり、パーソナリティとは状況や時間の変化に左右されない個人内要因であり、その意味で、パーソナリティの変容は困難であると言わざるを得ない。よって、ストレスへの頑健性や柔軟性が習得できない個人も当然存在して然るべきであるが、その結果適応できなかった個人を、変わらないその人が悪いというロジックによってスケープゴートの対象とする危険性を、パーソナリティ・アプローチははらんでいるのである。つまり、美馬（1996）が「（ストレスに強い）この『フレキシブル・ボディ』が新しい人間選別の思想の中核として、差別的な役割を果たす可能性がある」と指摘しているように、パーソナリティ・アプローチは、パーソナリティに欠陥があり、かつそれを改善できない本人が悪いという結論を導きやすいのである。以上の点から、パーソナリティ・アプローチはストレス過程の説明において有効である反面、ストレス低減方略への提言において、「ストレスは個人の責任」とする冷淡なアプローチでもあるとも考えられる。Pearlin（1989）は、「予測のみでは必ずしも賢明な社会学者ではない。我々は優れた予測者であると同時に介入者でもあるべき」と述べているが、パーソナリティのみによるアプローチはその意味で限界があると言えよう。

パーソナリティ・アプローチのその他の問題点として、パーソナリティ・アプローチは個人差の説明には有効であるが、社会経済的に区分される集団間の差異を説明するのにも有効というわけではない（Pearlin, 1989）、という指摘も挙げられよう。多くの社会的コミュニティ研究によって、社会経済的地位の異なる集団間で、ストレス関連変数に差異が存在することが明らかにされている。そして、集団間でパーソナリティの分布が大きく異なるとは考えにくい。したがってこの差異は、性・人種・経済力などのマクロ社会変数／生態学的変数から、集団内役割・集団凝集性などのミクロ社会変数／社会心理学的変数まで含んだ、社会環境的要因によるところが大きいと考えられる。この観点から、主体と環境の二段階媒介モデルで指摘されたように、パーソナリティなどの主体的変数のみならず、社会的地位や対人関係などの環境的要因もやはり、ストレス過程において考慮すべき重要な要因であると考えられよう。

木下（1990）は、「日本の健康心理学の現在までの特徴は、臨床心理学的な発想とアプローチが主流を占めていて、アメリカにおける健康心理学のように、社会科学的な側面、健康問題を社会全体のシステムから捉えようとする発想に乏しいことである」と指摘して

いる。上記のパーソナリティ・アプローチの問題点、そして本節の結果は、主体的要因のみで対人関係と精神的健康の関連を説明することの限界を示すものであり、社会環境的要因に着目した本論文のアプローチは正当なものであると言えよう。

4-4-4 対人関係の両価性と親密性

対人関係の親密化過程においては、一般に、親密になるほどその関係から得られる報酬とコストが共に不可避免的に増加する。これは特定二者関係に関する知見であるが、Hays & Oxley (1986) が指摘しているように、二者関係の親密化過程がネットワーク全般にも適用可能であるならば、個人のソーシャルネットワークにおいて親密な関係が増えるほど、ネットワークに起因するサポートと対人ストレスは、共に増加すると考えられよう。対人ストレス生起過程因果モデルはこの素朴な仮説に合致するものであるが、その一方で本章の結果は、必ずしもこの仮説と合致するものではなかった。すなわち、低親密ネットワークは肯定的でも否定的でもなく、中親密ネットワークは肯定的かつ否定的であり、高親密ネットワークは肯定的であった。したがって、親密度が中程度までは対人関係の肯定的側面と否定的側面はともに増大するが、親密度がさらに高くなると肯定的側面のみが顕在化する可能性がここから示唆される。

はたして、対人関係の肯定的／否定的側面と親密性との間には、どのような関連があるのであろうか。まず少なくとも以下の2段階は、対人関係の発達を議論した多くの先行研究においても共通する、ほぼ確かなプロセスであろう。

(1) 関係の初期段階では相互作用が少なく、関係の親密さも低く認識される。

(2) 時間の経過と共に、相互作用は増加し、親密さも上昇する。ただし相互作用は肯定的／否定的両側面を含み、ともに増加する (Rands & Levinger, 1979)。

そしてその次の段階で、本研究で示された「高親密すなわち肯定的関係」という図式が成立するならば、その理由として3つの可能性が考えられる。それは、(a) 否定的側面の現実的克服、(b) 否定的側面を含む関係の淘汰の産物、(c) 関係の肯定性／否定性の超越、である。

まず、(a) 否定的側面の現実的克服、とは以下のように記述されよう。

(3a) 関係における肯定的／否定的両側面がともに増加しつつも、否定的側面に対する対峙と解決、そしてそこで得られる報酬により、関係が肯定的色彩を強めていく。

Hays (1985) によれば、対人関係の親密化過程におけるコスト (否定的側面) の在り方には二つの考え方がある。ひとつはコストが関係発展の阻害要因として働き、それが小さいほど望ましいとする説、そしてもうひとつは、葛藤は関係の親密化過程において不可避免的であり、葛藤は親密性と正の関連を持つとするものである。そして Hays (1985) では曖

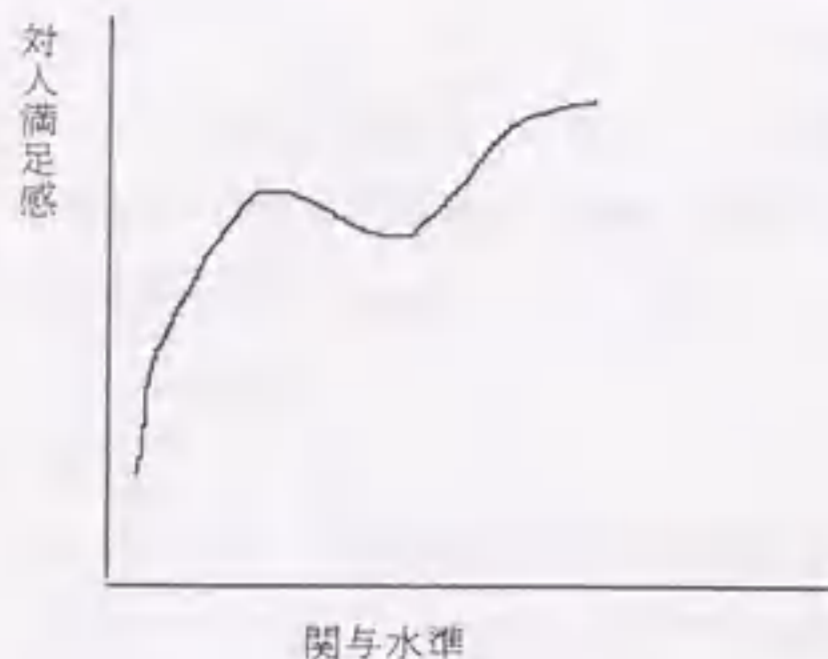


Figure 4-4-1 親和-独立モデルによる
対人満足感と関与水準の曲線関係
(Eidelson, 1980より作成)

味ながらも後者が支持され、コストはよりよい友情、より機能する集団の形成には不可欠な要素であることが考察されている。対人関係の関与水準と満足感を親和-独立モデルの観点から検討したEidelson (1980)においても、対人満足感
は関与が中程度の不満足期を経て、高関与高満足期に至ることが示唆されている
(Table 4-4-1)。研究VIにおける中親密ネットワークはこの不可避的な葛藤に直面しており、高親密ネットワークはそれを

解決したものと考えれば、本研究の結果も上記の(3a)、つまりHaysの主張と合致する。ただし、この考えは一見合理的であるが、最終的には否定的側面が肯定的側面に凌駕されることが前提となっている点に問題がある。そして現実には、すべての関係が必ずしもそうなるとは限らないということはいうまでもないであろう。

次に(b)否定的関係の淘汰の産物、の場合は以下のように考えられよう。

(3b)個人は利得よりもコストにより敏感であり、それは対人関係においても適用され得るので(Rusbult & Arriaga, 1997)、それまでは利得がコストを上回っていた関係の中にも、親密度の上昇がやがて利得とコストの逆転現象をもたらし得るものもある。そしてそのような関係は崩壊し、肯定的側面が顕著な関係のみが最終的に継続し得ることとなる。

つまり、親密水準によって肯定性/否定性が規定されるのではなく、否定的側面の顕在化が生じた関係が淘汰されていった結果、肯定的であり続けることができた関係のみが高い親密性を実現するという考え方である。しかし、これは前述のHays (1985)による、対人関係の親密化過程においてコストは不可避的であり、よりよい友情の形成には不可欠な要素であるという知見とは相反するものである。

最後に、(c)関係の肯定性/否定性の超越、である。

(3c)前述のように個人は利得よりもコストにより敏感であり、それは対人関係においても適用され得るので(Rusbult & Arriaga, 1997)、それまでは利得がコストを上回っていた関係の中にも、親密度の上昇がやがて利得とコストの逆転現象をもたらし得るものもある。そこで、その関係に関与している個人は以下の選択肢に直面することとなる。

- a. 限界線に踏みとどまることにより、親密度の深化を停止させたまま、関係を維持する。
- b. 限界線を越えたことにより、関係が崩壊/消滅の方向に向かう。
- c. 限界線を越えて、親密度の深化も続けつつ、関係を継続させる。

そしてこの第三の選択肢が、肯定性/否定性の超越に該当する。これはコストが利得を上回っても、あくまでその関係は存続の価値あるものとして考えられているという状況で

あり、ある意味で盲目的といえよう。ただ、これが論理的に不合理であることは言うまでもないが、その一方でそのような関係は現実には存在しないというわけでもない。そこでなぜそのような関係が存在しうるのか、理由は二つほど考えられる。

まずひとつは、所属欲求 (Baumeister & Leary, 1995) や恐怖管理理論 (Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986) に基づいた、人間はたとえ否定的でも対人関係から離脱できない生来的な資質をもっているという考え方である。ただしこれらの理論については第5章第2節で言及することとし、ここでは割愛する。

もうひとつは、対人関係の非互換性に基づく考え方である。まず、友人関係、恋愛関係など恣意的な側面が強いとされる関係においてでさえ、人は対人関係の形成時には、必ずしも完全なる主体的選択によって動いているわけではない。そこには孤独への恐怖、孤立者としてのスティグマへの恐怖がある。また、関係形成によって見込まれる利得を享受したいという権術的な戦略もあろう。そしてこれらに共通して言えるのは、関係を形成する対象の選択が、決してその対象の独自性に基づくわけではないという事実である。ただ単に孤独感から逃れるには、「誰でもいいから」関係を形成すればいい。メリットを最大化するには、「それが誰であれ」そのメリットを提供してくれる人と関係を形成すればいい。その人を選択したのは、たまたまその人がメリットを最大化する可能性を持っていたからである。そのようにして人間は対人関係を形成し、継続していく。

もちろんそこには恣意性もあるのだが、同時にこのような動機にも規定された対人関係の中には、やがて上記のような親密化を経て、報酬とコストのジレンマの壁にたどりつくものもある。そしてその段階でも上述の要因 (恐怖と利得最大化) に規定された対人関係は、選択肢の a か b の結果に至るであろう。では c に至る場合とは？それは、「それが誰であれ」という枕詞が使えない関係、つまり、常識的な利益とコストの計算を超越して、その人との関係の存在それ自体が価値あるものとして認識された場合ではなかろうか。相対的にはたとえその人に何もいいところがなくても、そして極端な場合は、その人との関係を維持することによって世界中を敵に回すことになっても失いたくない関係。そしてそれが場合によっては、「友達」と「親友」を弁別する線ではないだろうか。つまり友達とは選択的比較水準の枠組みで考えることが可能な対象であり、親友とはそんな枠組みなど問題にしていない関係である。

我々は初期段階では、「社会の中でよりよく生きていくために」関係を形成する。そして形成された関係が、非互換性による利害の超越が生じないまま進展したならば、再び「社会の中でよりよく生きていくために」関係の進展にブレーキをかけたり、関係を清算する時がくる。しかし非互換性が利害を凌駕したとき、その関係は合理的判断を超越して、恒久的に肯定的な関係へと昇華し得るのではなかろうか。もちろんこの考えは、些細な結果から極端な拡大解釈を展開しただけであり、この仮説の前提である「友達と親友は (量的のみならず) 質的に異なる存在である」のか否かすら、現時点では明確ではない。また、

これは二者関係の親密化を基盤とした仮説であり、それをネットワーク全般に適用するには少なからず問題がある。しかし、対人関係の肯定的／否定的両側面の関連を検討した先行研究 (Table 4-1-1)、そして本章の研究結果はこの仮説を暗示するものであり、同時にこの仮説は相対論にとらわれない望ましい対人関係の在り方のひとつの指針ともなりうる可能性がある。よってこれも一つの可能性として、今後の検討課題としたい。

4-4-5 今後の課題

ソーシャルサポート研究における知見、そしてサポートネットワークとソーシャルネットワークの密接な関連を考えれば、対人関係の存在それ自体は、精神的健康という観点からかなり肯定的なものであると言えよう。しかしその一方で、ネットワークの僅かな綻びが対人関係の否定的な側面とリンクし、その影響は肯定的な側面の影響を凌駕しうるまでに増幅される。さらにそこで毒された精神的健康は、双方向的に対人関係の否定的側面を拡大再生産するという図式を本章の結果は示唆している。Tversky & Kahneman (1981) が指摘したように、人は報酬には鈍感だがコストには敏感である。そしてその結果、Taylor (1991) の活性化-最小化仮説が示唆しているように、肯定的側面は安定してはいるがインパクトが小さく、否定的側面は稀にしか生じないもののそのインパクトは大きく、その結果、両側面が拮抗しているのが現実の対人関係なのかも知れない。そのような前提の上で、個人の精神的健康という観点から望ましい対人関係を模索するという課題に対して、どのような処方箋が考えられるであろうか。まずひとつは、人数・相互作用両方において、肯定的側面の増幅が挙げられよう。しかし、対人関係は継続するほどコストが上昇する一方で満足度が低下することが指摘されており (Rusbult & Arriaga, 1997)、その意味で肯定面の増幅には限界がある。そこでもう一つ考えられるのは、否定的側面を拡大する内的・外的要因の低減であろう。このための手段としては、例えば、生活移行 (Wheaton, 1990) などによる現在の対人関係からの退却が一つの可能性として考えられ、本章の研究VIIにおける Wave 0から Wave 1にかけての変化はそれを支持する結果とも考えられる。しかしこれは同時に、肯定的対人関係からの退却をも意味していることは言うまでもない。そこで、現実的には否定的側面への耐性増強 (多少のトラブルには持ちこたえられる主体/環境の構築) が必要となろう。また、否定的とされる対人関係の肯定的意義を認めることも必要かもしれない。しかしその際、肯定的／否定的を規定する価値観の議論も含めて検討されてしかるべきである (橋本, 1997b)。例えばこれまでも対人葛藤研究でその肯定的意義は少なからず議論されているが、その多くは組織の活性化という観点からのみ、対人葛藤の肯定的側面を論じている (e.g. 山口, 1997)。しかしその一方でやはり、対人関係は強力なストレスであることには変わりはないのである。

加えて、本研究のようなテーマに関する根本的な問題として、相対評価の限界がある。つまり、尺度得点などに反映される序列を仮定する以上、どの尺度も必ず高群と低群が設定されるが、果たしてそこでの相対的な結果がどの程度重要なのかという問題である。精神的健康に関する研究の目標のひとつには、当然不健康群の改善がある。しかし、そこで何らかの改善が実現しても、そこで達した水準が健康群に及ばないのであれば、その群はやはり相対的に不健康群であり続ける。また、もし改善の結果、健康群を越えたならば、今度は以前の健康群が相対的に不健康群となる。つまり、本研究のような枠組みを用いる以上、必ず相対的な高群と低群が生じるのである。この問題を解決するには、やはり何らかの絶対基準を設けることが必要となるであろう。相対的には不健康でも絶対基準を満たしていれば問題はないとすることによって、パーソナリティなどの安定要因をスケープゴートの対象とする危険も低減するのではないか。

また、本論文の諸研究は、大学（短大）新入生という限られたデータに基づいたものである。よって、個々を取り巻く環境的要因の差異は小さいと考えられ、主体的要因が反映されやすい状況であるとも言えよう。今後は多様な集団を対象として、同一集団における被験者間の差異の検討のみならず、異なる集団における被験者内の差異の検討、そして異なる集団における被験者間の差異の検討、さらにそれらの経時的変化の検討など、さまざまな指標を用いての主体的／環境的要因の相対的影響力のさらなる明確化が望まれよう。

いずれにせよ、本章では再び、精神的健康に及ぼす対人関係の否定的側面の重要性が強く示された。多くのサポート／ストレス研究でこの視点は欠落しがちであるが、その否定的側面の影響力が、肯定的側面のそれを凌駕することは認識すべきであろう。そして対人関係と精神的健康というテーマにおいては、肯定的側面の促進のみならず、否定的側面の抑制がそれと同等、もしくはそれ以上に重要な課題であることを強く主張したい。

第5章

対人関係と精神的健康の関連が 意味するもの

第5章第1節

本論文の全体的考察

本論文は、(1) 対人関係の否定的側面の同定ならびに精神的健康との関連の検討、(2) 対人ストレスの生起/媒介規定要因の検討、(3) 対人関係の肯定的/否定的両側面が精神的健康に及ぼす相対的影響力の検討、(4) 精神的健康という観点からの望ましい対人関係の模索、という目的意識に基づいて、ここまでさまざまな議論を繰り広げてきた。

そしていよいよ本章では、最終章として、これまでの研究をふまえた包括的議論を行うこととなる。まず本節は、本論文が依拠してきたパラダイムに基づく結論部として、本論文で見いだされた知見を要約・整理し、対人ストレス生起過程因果モデル、対人ストレスイベントの類型、そして主体と環境の二段階媒介モデルという、本論文の根幹となった3つのトピックの統合的理解を試み、さらに今後の課題を展望する。

5-1-1 本論文における知見の要約

本論文は、対人関係と精神的健康の関連を、肯定的/否定的両側面を統合して議論することを中心的目的とした。そのためにまず第1章では、対人葛藤、ソーシャルサポート、そして心理社会的ストレスという、このテーマを議論するにあたって有用な知見を提供するであろう先行研究領域をそれぞれレビューした。その結果、まず対人葛藤研究は、対人葛藤の生起やその解決に関して、多くの知見が蓄積されているものの、(1) 概念の定義と研究内容の乖離、(2) 従属変数としてのディストレスを想定していないこと、が指摘された。次にソーシャルサポート研究は、対人関係の肯定的側面と精神的健康の関連が示された一方で、否定的側面の考慮不足が問題点として指摘され、(1) 生じた出来事と認知された関係性の弁別、(2) 対人関係の肯定的/否定的側面の関連、(3) 同じく対人関係の肯定的/否定的側面の精神的健康に対する相対的影響力、などが検討課題として挙げられた。心理社会的ストレス研究は、対人関係のインパクトの大きさを少なからず見いだしているにもかかわらず、対人関係を個別に扱った研究が少ないことが指摘され、(1) 対人ストレスの種類の変別、(2) 対人ストレスの規定因の検討、の必要性が指摘された。しかしこの3領域は、個人を取り巻くネットワークのなかでイベントが生じ、主体的/環境的文脈によってその影響や結果が左右されるという共通の枠組みを持っている。したがって、これらを補完的に統合することによって、対人関係の肯定的/否定的両側面と精神的健康の関連を議論することは可能であると考えられた。そこでこれらの研究を包括した、対人関係と精神的健康の全般的関連の統合モデルとして、主体と環境の二段階媒介モデル、そしてその下位モデルとして、環境的要因としてのネットワークを重視した対人ストレス

生起過程因果モデルが提唱された。

第2章第1節では対人ストレス生起過程因果モデルの妥当性の検証を試みた。研究Ⅰでは、ソーシャルネットワークの大きさがネットワークストレインを規定し、ネットワークストレインが対人ストレスイベントを規定し、対人ストレスイベントがディストレスのもっとも強い規定因であるという一連のパスが見いだされた。次に、ソーシャルサポートを導入した研究Ⅱでは、ソーシャルネットワークとソーシャルサポートの間に強い関連がみられるものの、サポートのディストレスに対する影響力は対人関係の否定的側面の影響力に及ばないことが明らかにされ、モデルで仮定された変数間の関連は基本的に支持された。第2章第2節では、青年における対人ストレスイベントの分類を試みた。まず研究Ⅰの再分析では、対人ストレスイベントには対人葛藤、対人劣等、対人摩耗の3種類があることが見いだされた。さらに研究Ⅲでは、イベントに対するストレス度とイベントの頻度を弁別し、主体的要因との関連を検証することによって、これらの概念の明確化を試みた。結果は概ね、構成概念の妥当性を支持した。

第3章は、対人関係の両価性と精神的健康の関連に寄与するであろう、本論文の調査対象である大学生の特性の検討を中心的課題とした。まず第3章第1節では、大学生を中心とする青年期の対人関係の重要性が指摘され、その背景にある現代青年の独自性が、社会的スキルや対人方略に反映される可能性が考えられた。次に第3章第2節では、研究Ⅳとして女子青年を対象とした半構造化面接を行い、現代青年の対人ストレスは、葛藤回避や個人の尊重が強力な規範となっているので、関係維持コストや劣等感が中心となっていることが指摘された。そしてその背景として、価値観の多様性が前提として存在するという信念、加えて関係離脱への情緒的な恐怖心が推測された。さらに第3章第3節では、社会的スキル・対人方略と対人ストレスイベントの関連を検討することを目的として、研究Ⅴとして大学生を対象に調査が行われた。その結果、社会的スキルと対人劣等の関連、内省傾向の否定的影響、深化回避傾向と社会的スキルの関連が見いだされた。

第4章では、対人ストレス生起過程因果モデルの再検討を通じて、対人関係の両価性と精神的健康の関連を再度議論した。まず第1節ではこのモデルの問題として、(1) 因果の妥当性 (2) 第3変数の影響 (3) ネットワークの両価性の規定因が挙げられた。そこで第2節では、大学新入生を対象とした3波縦断研究(研究Ⅵ)を行い、同一時点内では対人ストレス生起過程因果モデルは成立したものの、経時的な変数間の因果については、モデル内のすべての尺度について安定性が高く、また多くの変数間で双方向性の関連がみいだされ、第3変数としての対人関係認知における主体的要因の影響が示唆された。ネットワークの肯定性/否定性の展開については、親密性が重要な概念であることが指摘された。続いて第3節では、大学および短大新入生を対象とした4波縦断研究(研究Ⅶ)によって、モデルにおける主体的要因の影響、具体的には(1) 同一個人異なる集団に対する評定の安定性、(2) 主体的要因としてのパーソナリティの影響力、を検討した。その結果、

異なる集団への対人関係認知における個人間の相対的評価は、かなり安定していることが見いだされた。しかし、パーソナリティ (Big Five) の影響力は決定的に大きいものではなく、パーソナリティの影響を考慮した上でもモデルで仮定された変数間の関連は支持され、対人関係の肯定的/否定的側面が精神的健康に影響を及ぼすプロセスは、主体的/環境的両要因によって規定されると考えられた。最後に第4節では、この2つの縦断研究に関する補足的議論が行われ、大学新生の新たなネットワークへの適応過程、対人ストレスイベントが媒介要因となり得る可能性、パーソナリティ・アプローチの問題点、対人関係の親密化過程と対人関係の両価性の関連などが議論された。

5-1-2 対人関係と精神的健康の関連—対人ストレス生起過程因果モデルに関する知見を中心に—

さて、本論文は対人関係の両価性と精神的健康の関連を、特にその否定的側面を中心に議論してきた。そして、その核となった対人ストレス生起過程因果モデルに関しては、本論文のこれまでの研究から以下の知見が導かれよう。

①ネットワークそのものの大きさと、ネットワークの肯定的側面/否定的側面の大きさは基本的に正の関連を持つ。ネットワークの否定的側面と対人ストレス、そして対人ストレスとディストレスも同様に、正の相関関係にある。そしてネットワークの肯定的側面と対人ストレスは無関連であり、ネットワークの肯定的側面とディストレスは負の相関関係にある。

②しかし、以上の関連は一方向的ではなく、基本的には双方向性を仮定すべきものである。また、その根底には対人関係認知における肯定的/否定的認知傾性とも言うべき第3変数の影響可能性がある。

③ただし、第3変数として主体的要因があるにせよ、それだけでは変数間の関連をすべて説明することは不可能である。変数間の関連は、主体的要因のみならず、現実の環境的要因によっても規定されていると考えられる。

④そして対人関係の否定的側面の影響力は、肯定的側面の影響力を凌駕して精神的健康に影響を及ぼす。

これらを統合すると、対人ストレス生起過程因果モデルで仮定された変数間の関連は確認されたが、その因果については双方向性を仮定すべきであり、さらに変数間の結びつきは、主体的要因と環境的要因の両者によって規定されていると言えよう。よって対人ストレス生起過程因果モデルは、半分は支持され、半分は支持されなかったという結論になるであろうか。しかしこれらの結果は同時に、その背景にある主体と環境の二段階媒介モデルが、(ストレス過程を取り巻く主体的要因と環境的要因の相互作用という視点が欠落し

ていた他は) ほぼ全面的に支持されたことを示すものでもある。そして、一方向性かつ環境的要因を重視した対人ストレス生起過程因果モデルが提示された背景には、議論の簡略化、ならびに第4章第4節で指摘されたパーソナリティ・アプローチの問題点がある。これらを考えあわせると、ネットワークが個人の精神的健康に影響を及ぼしうるという方向性を提示したこのモデルは、十分にその妥当性が示されたと言っても過言ではなからう。

本論文の結論としては、個人を取り巻く対人関係は個人の精神的健康と双方向性の因果を持ち、さらにその否定的側面は肯定的側面よりも大きなインパクトを持つと言うことである。それではなぜ、人は対人関係に苦しみつつも、対人関係の中で生きていくのだろうか。そして、現実的にどのような対人関係を目指すべきなのであろうか。この素朴だが解決困難な問題については、次節で議論する。

5-1-3 現代青年における対人関係の変貌とは—対人ストレスイベントの類型に関する知見を中心に—

本論文では第3章を中心に、現代社会における青年の対人関係の在り方を議論することも副次的な目的とした。そしてその中心となった対人ストレスイベントの類型に関しては、本論文では以下に挙げる知見が見いだされた。

- ①対人ストレスイベントは、対人葛藤(顕在的な対人衝突事態)、対人劣等(劣等感を触発する事態)、対人摩耗(円滑な関係維持に伴う気疲れを触発する事態)の3類型に分類されうる。
- ②現代青年においては対人葛藤よりも対人劣等・対人摩耗が中心の問題であり、その背景には葛藤回避や個人の尊重などの規範がある。
- ③内省傾向の高さ、ならびに社会的スキルの欠如は対人劣等と密接な関連にある。しかしこれらは対人葛藤・対人摩耗とは明確な関連は示されない。
- ④大学進学における新たなネットワークへの適応過程において、対人葛藤の生起頻度に経時的な差は生じないが、対人劣等はある程度の時間を経過してようやく減少し、対人摩耗は微量ながら、安定して減少する。

第1章第4節で、一般に否定的な社会的相互作用には、「望まないにもかかわらず従事せざるをえない相互作用」と、「望ましい水準に到達できない相互作用」の2種類があると考えられた。しかし本論文ではそれに加えて、「望ましい水準であるがその維持にコストを要する相互作用」という、いわば第三の否定的な社会的相互作用が、対人摩耗という形で見いだされた。課題遂行的側面から社会的相互作用を検討したならば、望ましい水準の相互作用はその実現こそが到達目標となる。そしてそこに否定性が付与され得たのは、精神的健康、つまり情緒安定的側面を重視した本論文の独自性によるところが大きいであ

ろう。

しかし、対人ストレスの予防ということになると、この対人摩耗という類型は極めて介入困難である。対人葛藤についてはこれまで少なからずの知見が蓄積されており、そもそもその生起頻度の低さから、さほどクリティカルな問題ではないと考えられる。また対人劣等は、本論文の知見からもかなりクリティカルな問題であると考えられるが、本論文では同時にもっとも多くの変数（特性シャイネス・LOC・内省傾向・社会的スキルの欠如・ネットワークの発達段階など）と明確な関連を示した類型でもあり、そこから介入への糸口を模索することは可能であろう。だが対人摩耗は、生起頻度の高さならびに精神的健康に及ぼす影響力がそれなりに確認されたにもかかわらず、それを規定するものとして明確に見いだされた要因はほとんどないに等しい。というより、対人摩耗はその概念定義を考えると、対人関係の中で生きていく以上、生起は不可避なのである。そしてこの生起を抑制するには対人関係からの退却、もしくは関係維持への努力を要しない対人関係にネットワークを限定することのほかはないのではなからうか。そのことは、研究IVにおける面接データで少なからず示唆されている。

対人関係にコストは不可避である。その一方で、「対人関係のコストは可能な限り避けるべきである」という規範も普遍的である。内集団への埋没と外集団の無視、表層的関係の維持、暴力的手段による短絡的な対人関係上の問題の解決、能動性の欠如…現代青年の問題点として指摘されている、対人関係にまつわる諸問題は、さまざまな社会的要請に常に追い立てられる中で、孤立せず、かつ傷つかない対人関係という理想を実現するための努力がもたらした、いびつな結果であるのかも知れない。ここで「対人関係にコストは不可避であり、このいびつな現実にはコストへの耐性が低下しているからである。」というのはいびつな現実である。しかし、もし現実に対人関係への耐性が低下しているとしても、そこにはそうならざるを得ない理由がある。端的に言えば、人は「コストをもたらすような対人関係は否定的なものである」という規範の中で育ち、対人関係のコストに煩わされる余裕などはない現実の中に生きているのである。

社会が成熟するほど、そして理想が洗練されていくほど、現実はその盲点をついてくる。大学紛争から無気力化へ、校内暴力からいじめの陰湿化へ、独善的個人主義から同調的援助交際へ、「オタク」的犯罪から「普通の少年」的犯罪へ。ある種の問題への回答が提示されると、それまでは遵守されていたはずのタブーが犯され、社会は新たな問題に直面する。対人葛藤から対人摩耗へ、も同様であろうか？「自分探し」の背景にある他者や社会への無関心、自尊心を維持するための対人関係維持、価値観や指針の氾濫によるリアリティの喪失と無意味性がもたらす退屈な日常。生きることに飽き飽きしているにもかかわらず、生きることがとりあえずのテーゼであるのが現代であるならば、それは衝突しても実現すべきような理想が消失し、自尊心を保つためにも退屈な現状を維持せざるを得ない時代である。そして、対人葛藤以上の対人劣等・対人摩耗の重要性は、この推論に合致する

ものである。要するに、人は対立によるストレスを経験せずに済ませる方法を習得するに
したがって、対立を避けることによるストレスを感じるようになったのではなかろうか。

5-1-4 議論の統合—対人ストレス生起過程因果モデル、対人ストレスイ ベントの類型、そして主体と環境の二段階媒介モデル—

本論文の根幹を成したのは、対人関係の両価性と精神的健康の関連を包括的に議論する
ことを目的とした「対人ストレス生起過程因果モデル」である。しかしその中でも特に、
対人ストレスイベントについてはその類型、ならびにその規定要因まで議論した。そして
そこで見いだされた類型と、対人ストレス生起過程因果モデルを統合した議論がここまで
十分に展開できなかつたのは、本論文に残されたもっとも大きな課題である。

対人ストレスイベントを特に詳細に扱ったのは、ネットワーク変数はあくまで一連のスト
レス過程における背景要因ならびに媒介要因として位置づけられたのに対し、対人スト
レスイベントはストレス反応の直接的な規定因であり、その規定因の究明がもっとも要求
されるべき課題であると考えられたからである。そしてこの仮定の妥当性は、対人スト
レス生起過程因果モデルに関する一連の研究で、十分に確証されたと考えられる。しかし、
対人ストレスイベントの生起はネットワークのみならず、パーソナリティや対人方略、そ
して社会的スキルとも少なからず関連を示した。そしてそこから、イベントの生起には類
型ごとに発達段階や時代性が大きく影響しうる可能性が示されたが、一方、対人ストレス
生起過程因果モデルはこれらの観点からの検討を行わなかつた。これが、これら二つのテ
ーマの統合が困難となった最大の理由であろう。

その結果、第4章第4節で指摘されたように、モデルではネットワークストレインと対
人ストレスイベントが正の共変関係を持つことが仮定されているにもかかわらず、経時的
にはネットワークストレインが拡大する一方で対人ストレスイベントが減少することが見
いだされるという矛盾も生じている。しかし、筆者としてはこの矛盾が本論文の知見の妥
当性を脅かすものとは考えていない。なぜなら、主体と環境の二段階媒介モデルで提唱さ
れ、第4章第3節で指摘されたように、対人関係と精神的健康の関連は、主体的／環境的
両要因によって規定されるからであり、この矛盾はその中の断片的な側面しか取り上げな
かつたことによって生じていると考えられるからである。

この問題を、本研究の知見を援用しながら統合すると以下のように考えられる。まず、
ネットワークストレインは対人ストレスイベントの規定因として考えられる（第2章第1
節）一方で、対人ストレスイベントには下位類型があり（第2章第2節）、それらの中
には、ネットワークへの適応に伴い低減するのが自然であると考えられる概念もある（第4
章第4節）。また、大学入学に伴い、個人の恣意的行動の自由度はかなり拡大する。この

恣意性の高さは、個人が関係を深化させるネットワークを主体的に選択することを容易にするが、現代青年には十分な相互作用を行わずに他者を評価する傾向がある（第3章第2節）。また、対人ストレスイベントがネットワークストレインを規定するという方向性の因果も考えられ（第4章第2節）、その結果、ネットワークストレインはかなり早い時期に構築され得る。ただし、ネットワークストレインは対人ストレスイベントの規定要因のひとつに過ぎず、現代青年の葛藤回避傾向や深化回避傾向によって、対人ストレスを誘発するネットワークとの接触は避けられる可能性が考えられる（第3章第2節・第3節）。その結果、経時的にはネットワークストレインが拡大する一方で対人ストレスイベントが減少するという事態が生じうる。要するに、ネットワークストレインと対人ストレスイベントの正の共変関係は確かであるが、対人ストレスイベントの生起はネットワークストレインのみによって規定されるわけではない。対人ストレスイベントの生起にはそれ以外にもさまざまな主体的／環境的要因両方の影響が介在し（第3章第3節・第4章第3節）、その一方でネットワークストレインが比較的早期に形成されるが故に、このような一見矛盾した結果が生じたのであろう。

ここから、本論文の根幹を成した「対人ストレス生起過程因果モデル」と「対人ストレスイベントの類型に関する議論」という二つのテーマは、「対人ストレスイベントの規定因」を中心とした、「主体と環境の二段階媒介モデル」の観点からの統合可能性が見いだされよう。振り返れば、第2章第1節及び第4章の対人ストレス生起過程因果モデルに関する議論は、対人ストレスイベントの規定要因を環境的側面、すなわちネットワーク中心に検討した試みである。一方、第2章第2節から第3章にかけての対人ストレスイベントの類型ごとの議論は、対人ストレスイベントの規定要因を主体的要因、すなわち現代青年の特徴を軸に検討した試みである。そしてこれらのいずれもが、対人ストレスイベントの生起に関する重要な知見を提示し、さらに主体的／環境的両要因がともに重要であること、従属変数として考えられた精神的健康に関する指標も逆方向の因果可能性を持ちうるということが明らかにされた。ここで第1章第4節の主体と環境の二段階媒介モデル (Figure 1-4-4) を振り返ったならば、本論文はその中心軸にある主体的／環境的要因から対人関係問題へのパス、さらに対人関係問題からストレス反応へのパスを議論した試みであることが理解されよう。その成果は簡潔には Table 5-1-1 にまとめられているが、これは、対人関係にまつわる問題の種類の多様性、さらにその生起と関連する要因の多様性を示している。そして、ここで見いだされた知見は主体と環境の二段階媒介モデルのある程度の妥当性を示すとともに、今後これらの問題の抑止を議論する際に重要な示唆を与えうるものとなるだろう。

ただし、本論文はあくまで、主体と環境の二段階媒介モデルを部分的に確証したに過ぎない。本論文でも議論となった因果の方向性、そして二段階媒介の後半部である、認知的評価および対処に関する議論が今後の大きな課題として残されている。特に後者に関しては、第1章における若干の議論を除いては、本論文ではソーシャルサポートならびに社会

Table 5-1-1 本論文で見いだされた対人ストレスイベントの関連要因

			対人ストレスイベント		
			対人葛藤	対人劣等	対人摩耗
主体的変数	パ ー ソ ナ リ	Big Five 外向性		○	
		神経質傾向	◎	◎	○
	テ ィ	開放性			○
		調和性	◎	○	○
	リ テ ィ	その他 特性シャイネス		○	
		短気	◎	◎	◎
	対 人 方 略 (方略類型クラスター)	LOC		○	
		内省傾向	○	◎	
		深化回避		○	
		気遣い		◎	○
		社会的スキル		◎	
		環境的変数	ネットワークストレイン		○
	新規集団適応過程 (時間経過)		○	△	
健康度変数	GHQ		◎		
	バーンアウト	○	○	◎	

Note: ◎は非常に強い関連が見いだされたもの
○はある程度確かな関連が見いだされたもの
△は関連可能性が指摘されたもの

的スキルを若干扱ったのみである。そして、本論文で議論した内容に勝るとも劣らない、この大きな論点に対する回答の提示こそ、主体と環境の二段階媒介モデルの全般的妥当性の検討のために課せられた、今後の最大の課題であろう。

5-1-5 その他の課題ならびに展望

これまでの研究で対人関係と精神的健康の関連について、少なからずの有用な知見が見いだされた。しかしその一方で、少なからずの疑問や問題点も残されていることは言うまでもない。ただしそれらの詳細は個々の箇所における記述にとどめることとして、最後に、本論文における研究全般を通じて、今後検討すべき課題を数点挙げておきたい。

従属変数の両価性

第1章第3節で述べたように、本論文では収斂可能性という観点から、従属変数である精神的健康の指標として「ストレス (反応)」という概念を用いた。しかし、そこで述べたように、精神的健康は必ずしもストレスからのみ定義される概念ではない。そして、本論文では対人関係の否定的側面の相対的な影響力の強さが示されたが、第4章で議論された肯定性/否定性の認知の構えを考慮すると、これも従属変数が否定的なものであったことに由来する可能性が考えられる。つまり、少なくとも精神的健康の指標として肯定的 (積

極的)な精神的健康を反映する概念を用いれば、肯定的側面の方が強い影響力を持つ可能性があり得るのである。さらに、肯定的相互作用が肯定的従属変数に、否定的相互作用が否定的従属変数に対して強い影響力を持つならば、それらのクロスオーバー効果も検討すべき課題のひとつとなろう (Suh et al., 1996)。少なくとも、これまでに精神的健康の肯定的指標と否定的指標は必ずしも同次元の両極とは限らないことが明らかにされている (Zautra, Guarnaccia, & Reich, 1988)。また、パーソナリティと精神的健康の関連を扱った先行研究では、精神的健康の下位尺度それぞれに対して、異なるパーソナリティが関連を持つことも見いだされている (Costa & McCrae, 1980; David, Green, Martin, & Suls, 1997; Schmutte & Ryff, 1997)。加えて、次節でも触れるが、対人関係がもたらしうる従属変数は決して精神的健康のみではない。それらも含めて、従属変数にも両価性を導入した研究は多くの課題を残しており、今後重要な課題のひとつとして挙げられよう。

全般的関係と個別関係

本論文では個人を取り巻く対人関係の包括的な議論を行うために、個人が所属するネットワークに対する総体的評価、つまり社会的ネットワークアプローチを用いてきた。しかし、近年のソーシャルサポート研究においては、ネットワーク全般におけるサポートは必ずしもネットワーク内の個々の関係特有のサポートの総体ではなく、それら個々の関係が全般的サポートとは独立した影響力を持つ可能性が指摘されている (Brock, Sarason, Sarason, & Pierce, 1996; Davis, Norris, & Kraus, 1998; 橋本, 1996b; Pierce et al., 1991; 浦・高野, 1995b)。そしてこのことはサポートのみならず、対人関係の否定的関係についても該当する可能性は十分に考えられよう。つまり、ネットワーク全般に対する否定的認知は、ネットワークにおける個々の関係の否定性の総体なのか否かという問題である。これは第4章第4節で議論した、特定二者関係に関する知見がネットワーク全般にも般化するのかという観点からも、非常に重要な問題であろう。ただしこの問題に関しては、サポートティブな側面についてすら未だ明確な回答はでておらず、今後、少なからずの知見の蓄積を要すると考えられる。

異なる母集団での検討

本論文では大学生を中心に一連の調査を実施したが、そこで見いだされた知見の一般化においては、それ以外の母集団を対象とした研究も必要であることはいうまでもない。特に、対人ストレスイベントの類型に関する議論 (第2章第2節から第3章) では、発達の/世代的要因の重要性が少なからず指摘されている。その是非の明確化のためにも、今後は高校生、社会人、さらには高齢者なども調査対象とし、さらなる知見を蓄積することが望まれよう。

第5章第2節

対人関係の両価性と精神的健康の関連の背後にあるもの

前節は本論文の具体的な結論部として、これまでに得られた知見を要約・統合し、今後の研究展望を行った。しかし実は本論文にはあとひとつ、課題が残されている。それは、「精神的健康という観点からの望ましい対人関係の模索」という課題である。そしてこの課題を議論するためには、本論文が依拠してきたパラダイムそのものを再検討することが不可欠である。なぜなら、後述するように、現実の対人関係がもたらすものは精神的健康だけではないからである。そこで本節はこれまでの議論をさらにメタの視点から検討し、本論文で得られた知見の意味とその背後にあるもの、そしてこの「望ましい対人関係の模索」という最後の課題に対する、より高次の視点からの回答を模索することとなる。

5-2-1 本論文のテーゼと本節の目的

対人関係は個人の身体的／精神的健康にさまざまな影響を及ぼしうるということが、これまで多くの研究から明らかにされてきた。しかし、その肯定的／否定的両側面の相対的な影響力を検討した研究は決して多くはなかった。そこで本論文は対人ストレス生起過程因果モデルを中心に、対人関係と精神的健康の因果ならびに肯定的／否定的両側面の相対的な影響力を検討した。そしてその結果、対人関係の否定的側面は、肯定的側面の影響力を上回ることが明らかにされた。このことはその他の先行研究でも一般に支持されており、一般に、精神的健康に及ぼす対人関係の否定的側面の影響力は、肯定的側面のそれを上回ると考えられる。

この知見は、単純には悲観的な諦念をもたらすものであるが、それと同時に、ある素朴な疑問も喚起する。というのは、社会的交換理論の観点などから、個人は利得が多くコストが少ない対人関係を選択するであろうことは容易に推測される。それでは、なぜ対人関係は否定的側面の方がその相対的影響力が強いにもかかわらず、人は対人関係の中で生きていくのであろうか。そして、そのような対人関係の中で、個人はいかに生きていくべきなのであろうか。最後にこの疑問に対する答えを、先行研究における諸理論を用いて模索するのが本節の目的である。

ただし、この問題を議論するに当たっては、本論文におけるテーゼの範囲内で回答を提示するのは困難である。つまり、本論文はホメオスタシスに基づくストレス理論、そして精神的健康の観点からの対人関係の理解をテーゼとしてきた。そして、人間は常にホメオ

スタシスに支配されているわけではなく、対人関係は精神的健康という観点からのみ理解されるものでもない。したがって本節に限っては、これらのテーゼを再検討しうる、包括的なメタセオリーからの展開が望まれよう。その結果本節は、その個々の詳細まで議論するのは本稿ではどうも不可能な、ひとつひとつが膨大な知見によって導かれ構築された、メタセオリーとも称しうるもので構成されることとなった。しかし、本論文の目的を達成するためには、それらの連関についての議論が不可欠であり、そのために個々の理論に関する言説は極めて限られたものとならざるを得ないこと、そしてそれらの詳細については原典を参照すべきことをはじめに述べておく。

5-2-2 メタセオリーからの展開

活性化—最小化仮説の背景

「対人関係は否定的側面の影響力が強いにも関わらず、なぜ個人は対人関係から退却しないのか」を議論することが本節の中心的目的であるが、そこには、否定的側面の影響力の大きさという前提がある。そこで本節では、このメカニズムを説明した Taylor (1991) による活性化—最小化仮説 (mobilization-minimization hypothesis) から議論を始めることとする。これは、「否定的 (有害もしくは脅威的) な出来事は、すばやく強い心理・認知・情動・社会的反応を喚起し、さらにそのイベントのインパクトを弱めたり極小化したり消滅させるような心理・認知・行動的反応が続く。活性化—最小化のこのパターンは肯定的・中立的イベントよりも否定的な方でより顕著である」とする仮説である。この仮説は対人関係に限ったものではないが、対人関係の肯定的/否定的側面の相対的影響力を検討した本論文でも、この仮説を支持する結果が得られている。

さて、この仮説の背景には、この仮説が成立する条件である、①肯定的/否定的事象の独立性、②否定的事象の相対的影響力の大きさ (および最小化現象)、を主張するさまざまな先行研究の知見があるが、ここでは特に後者に関する以下の二つの知見を取り上げたい。まずひとつは、ホメオスタシスの提唱者である Cannon, W. B. の「生理的反応実験では否定的な情動の喚起ばかりが使われているが、これは肯定的なものより否定的なものの方が、情動を喚起し易いという暗黙の仮定がある」という主張である。この主張は「今日のストレス研究に受け継がれている」と Taylor が指摘しているように、ホメオスタシス、そしてストレス理論の根幹を暗示するものである。つまり、やや極端に表現すれば、肯定的事象は個人の生存を危うくすることはないが、否定的事象にはその危険があり、よって人間はその存在を脅かす否定的事象に対して敏感にならざるを得ない。このことから、活性化—最小化仮説は安定維持機構であるホメオスタシス、そしてストレス理論と密接な関連にあることが伺える。

もう一つは、Taylor & Brown (1988) のポジティブ幻想 (positive illusion) である。これは、人間には①自己に対する過剰に肯定的な概念、②統制力の誇大な知覚、③未来についての非現実的楽観主義、という3つのポジティブ・バイアスがあるとする仮説であり、これらのバイアスは客観的な状況の認知を妨げるものであるが、それと同時にこのバイアスのおかげで、ポジティブな情動、社会的結びつきの形成能力、生産的・創造的労働能力、効果的なストレス対処、人としての成長・変化の可能性などが促進されることを、Taylor & Brown は指摘している。そして、過剰な自己肯定視が否定的側面を過度に顕在化させ、統制力の誇大評価や楽観主義が否定的側面の影響を極小化すると考えられることから、このポジティブ幻想が活性化-最小化仮説と密接に関連していることも、Taylor (1991) で指摘されている。ちなみに、自己の過大な肯定視と、それが種々の影響を及ぼすメカニズムは、一連のストレス過程 (e.g. Aspinwall & Taylor, 1992) のみならずさまざまな先行研究で指摘されており、例えば自己高揚的帰属や自己擁護的帰属に見られるセルフサーヴィングバイアス (e.g. Greenwald, 1980) や、「人は肯定的な社会的アイデンティティを求めるよう動機づけられており、外集団に対して内集団を肯定的に弁別することが不可欠である」とする社会的アイデンティティ理論 (e.g. Turner, 1987) などにおいてもこの傾向は反映されている。

これらの知見から、対人関係の否定的側面の影響力が肯定的側面の影響を凌駕する理由として、ふたつの解釈が可能となる。ひとつは、ホメオスタシスやストレス理論が示唆しているように、個人はその生存を維持するために、否定的事象に対しては敏感に反応するという解釈。そしてもうひとつは、個人は自己を過大に肯定視しているが故に、否定的事象に敏感になるという解釈である。そして「安定」こそ「肯定的」なものであるという前提に基づいたならば、この二つはともに、ゲシュタルト心理学的な表現を用いれば、肯定的側面が ground であるが故に、否定的側面が figure として浮き彫りになりやすくなっているという共通点があると言えよう。

しかし、ここでさらに議論を深めるために、この解釈に対する疑問を二つ挙げたい。ひとつは、ホメオスタシス、そしてストレスをテーゼとすることに対する疑問である。「人は常に安定を志向するのか」といえば、多くのリスクテイキング行動に見られるように、あえて変化、つまり不安定を志向することも少なくない。そしてそれらに伴うストレスは常に有害であるかといえば、ユーストレス (eustress) とよばれるような、肯定的なものにもなりうる。これらをもっとも反映している現象として、例えば発達そのものや発達課題の克服などが挙げられるが、それらを考慮すれば、ホメオスタシスやストレスを常にテーゼとすることには疑問を呈さざるを得ない。この問題については、後ほど議論する。

そしてもう一つの疑問は、「なぜ人間は過度の自己肯定視をしてしまうのか」という疑問である。ポジティブ幻想で指摘されているように、この性質は生きていく上で有益な側面もあるが、その一方で、この性質が否定的側面の顕在化から、果ては深刻な集団間紛争

まで引き起こしうることを考えれば、この性質は本質的に望ましいものとは必ずしも言えないであろう。それでは、なぜ人間はそのような性質を身につけてしまったのか。次にこの問題を検討してみよう。

自己存在正当化の理由

ここでは、ポジティブ幻想や社会的アイデンティティの背景にある自己存在正当化の理由を考える上で、重要な示唆を与えるであろう理論として、Baumeister & Leary (1995) の所属欲求 (the need to belong)、そして Greenberg et al. (1986) の恐怖管理理論 (terror management theory) を取り上げる。これらはいずれも、人間が生存を確保するために、自己存在の肯定性を求めることをテーゼとせざるを得なくなったという、進化生物学的視点を背景として持ち、人間の多様な社会的行動を説明しうるものとして、現在社会心理学で興味深いトピックとなっているメタセオリーである。

まず前者の所属欲求は、①少数の他者との、頻繁な、情緒的に快い相互作用、②経時的に安定した、互いの幸福への情緒的関心の枠組みを持った文脈において相互作用が生じること、という二つの概念的基準によって言及される。Baumeister & Leary は、この所属欲求が強力かつ基本的かつ非常に広範な動機であり、対人関係が否定的である場合ですら、個人はそこからの積極的な逸脱を望まないことを主張している。そしてその背景には、社会的な絆の形成・維持が、生き残りと再生産の両側面で有利であり、個々には生物学的に非常に弱い存在である人間にとって、社会からの逸脱が死を意味するという進化生物学的視点がある。加えて Baumeister & Leary は、親密な関係を終わらせようと決めたとき、人は否定的側面の解消がもたらす安息以上に深刻な苦痛を経験すること、離婚したにもかかわらず、社会的な絆はしばしば継続することなどを指摘し、肯定的／否定的両側面において、個人が経験するもっとも強い情動の多くは、所属と結びついていると主張している。たとえその関係を維持する理由がなく、維持が難しくとも、人は社会的絆を断ち、愛着を喪失することに抵抗するのである。この主張が正しいとすれば、対人関係が否定的であっても個人が対人関係から退却しない理由は、選択的比較水準から容易に説明されよう。つまり、対人関係におけるストレスが否定的であるにせよ、それは対人関係の欠如がもたらすストレスよりインパクトは小さいと考えられるのである。本論文第3章第2節では、面接による探索的研究において、対人関係のトラブルは認知的側面から否定的に評価されるのに対して、対人関係の欠如は認知的判断以前に、情緒的に否定的なものであることが示唆されている。この知見も、対人関係の欠如がもたらすインパクトの大きさ、すなわち所属欲求の重要性を示唆するものであると考えられよう。

次に後者の恐怖管理理論については、その概要を簡潔にまとめた遠藤 (1998) を引用してみよう。

“彼ら (Greenberg ら) はまず、人間が他の生き物と比べて、どのような特徴が共有され、どのような

特徴では異なっているかという点から議論を始める。そして、ヒトの柔軟性高適応性を作り出している3つの認知的能力、すなわち、物事の因果関係に関してリアリティを構築する能力、まだ生起していない将来の出来事を思い描く能力、そして自分自身を反省的に捉える能力、これらに特に重要な地位を与えている。これらは、しかし、人間の生存能力を高めるものであると同時に、存在にまつわる問題、望みもしないのに生まれ、不確かな世界に存在し、死にいたることだけが現実だという問題に私たちの目を開かせてしまう、という厄介な側面を併せ持つ。

そこで、このような恐怖に打ち勝とうとして、人間は文化を発展させてきた。自分たちの世界に意味や、秩序、安定性、永遠性を与えるような世界観を作り出し、この世とはそのようなものだと思えることによって、死以外の何も確かではない世界に生き長らえてきたのである。

しかし、ここである一人の人間を考えるならば、その人が存在恐怖に対抗するためには、ある文化的価値観を持っていることが必要だが、それで十分とは言えない。何故なら、その世界観が安心を保証してくれるのは、描き出した世界の中で価値ある人間である限り、という条件がつくからである。

世界観は文化によって異なるが、いずれの文化も、「よく生きる」「価値ある」こととは何かについてのメッセージを持っている。その基準に則った判断によって、自分は価値ある参加者だと思えることが、自尊感情なのである。存在恐怖から逃れるために、内在化された世界観を信じ、文化が規定している価値観を受容し、自分はその価値に照らして重要な意味ある存在だと思うことによって、人は自尊感情を維持することに努めるのである。”(p. 132)

つまり、人間は認知能力の高さ故に、自身の滅亡まで思い描くことが可能となってしまった。そこで生じる恐怖を乗り越えて個人が生き残るためには、人間の持つ高度の認知能力を背景に形成された社会/文化に所属することが不可欠であり、そのためには自己が社会的に受容されるべき肯定的存在でなければならなくなった、というのがこの理論である。そしてその結果、個人が現実以上に自身を肯定視せざるを得なくなったことを指摘しているのがポジティブ幻想 (Taylor & Brown, 1988 ; 遠藤, 1995) であり、自身の所属集団を肯定視することを指摘したのが社会的アイデンティティ理論 (e.g., Hogg & Abrams, 1988 ; Turner, 1987) なのであろう。さらに、これらの自尊感情や過度の自己肯定視がベースラインとして機能する結果、否定的側面が顕在化しやすくなり (活性化-最小化仮説 ; Taylor, 1991)、対人関係の否定的側面が肯定的側面を凌駕することとなる。

さて、これまでの文脈を簡潔にまとめれば、まず人間社会の背景には、人間の認知能力の発達をもたらしたパラドックスがある。それは、生存のためには高次かつ正確な認知能力が要求された一方で、その能力の実現は自らの (死をはじめとする) 否定的イメージの認識も可能とし、その結果、人は自身に対する認知を歪ませざるを得なくなったという点である。そして自身に対する過度の肯定視の結果、人間は肯定性をベースラインとするに至り、よって対人関係の否定的側面に過敏になりやすいという側面を持つこととなった。しかしそれと同時に、自身の存在意義を否定することになるが故に、対人関係からの脱却も恐怖の対象となる。したがって、自尊心の維持というテーゼのために、対人関係に関与しようがしまいが、個人はディストレスに陥ることになるのである。

このように考えれば、対人関係が精神的健康に及ぼす影響は否定的側面によるところが相対的に大きく、かつそれでも人間は対人関係から退却しない理由はそれなりに理解されよう。しかしそれでも問題は残されている。それは、先述した「ホメオスタシス/ストレ

スをテーゼとすることへの疑問」である。そこで次に、この問題について検討してみることとする。

ストレスというテーゼの盲点—逆転理論—

その前に、もう一度対人関係の否定的側面を考え直してみよう。これまでの議論では、対人関係の否定的側面の顕在性は、認知の歪みに基づくという観点が中心であったが、いくら認知を歪ませようとも、そこに否定的であるというラベリングが可能な相互作用がなければ、認知は歪ませようがない。よって、主観的な認知の歪みのみならず、客観的にも否定的と考え得る相互作用の存在も、対人関係の否定的側面の顕在化には不可欠な要素であろう。つまり、「ストレスを感じる側の視点」のみならず、「ストレスを感じさせる側の視点」も、対人関係の否定的側面の顕在性を議論する上では不可欠である。

なぜ人は人を傷つけるのか。ひとつの解釈として、前述のポジティブ幻想や社会的アイデンティティを用いての、自尊心の維持・自尊心が傷つけられたことへの報復という説明も可能であろう。しかしここではそれは保留して、対人葛藤の典型例のひとつである攻撃を例にとって考えるところから始めたい。

攻撃が生起する過程として、大淵（1993）は攻撃の二過程モデルを提唱している。これは、攻撃反応の喚起から実行に至るまでの過程には、不快情動によって触発された自動的認知処理が衝動的攻撃動機を経て攻撃反応に至る場合と、制御的認知処理が戦略的動機を経て攻撃反応に至る場合の、二種類があるとするモデルである。簡潔に言い換えれば、攻撃には衝動的なものと同様に冷静な判断に基づくものがあると言えよう。このことは、対人関係の否定的側面全般にも援用されると考えられる。つまり、対人関係の否定的側面には、思わず人を傷つけるような行動をとる／される場合と、冷静に判断した上で人を傷つけるような行動をとる／される場合があると考えられる。そして、そこで生じた否定的相互作用がそのどちらなのかは、背景に（どのような）意図があるかが鍵となるであろう。そこで同じく大淵は、攻撃の4つの機能として、①回避・防衛としての攻撃、②強制としての攻撃、③制裁としての攻撃、④印象操作としての攻撃、を挙げている。これらの中には、ここまで本論文で指摘された、自尊感情の維持というテーゼに起因するものもあれば、後に議論する精神的健康以外の従属変数を重要視したことに由来するものもある。しかしここでは、この4つから欠落していると思われる機能をひとつ取り上げたい。それは、「快楽としての攻撃」である。

人間が正当な社会的文脈なしに攻撃しうることは、欲求不満—攻撃仮説など、何らかのストレスが歪んだ快楽獲得手段としての攻撃を誘発したという観点からは、回避・防衛としての攻撃に含まれるのかも知れない。しかし、すべての「快楽としての攻撃」が、背景に何らかのストレスを持っているのであろうか。現実社会には、少なからずの「ストレスもないし、攻撃しなきゃいけない社会的文脈もないけど、楽しいから攻撃した」という事

件が散見されるように筆者には感じられる。そしてこの観点は、実はホメオスタシス/ストレスをテーゼとすることへの疑問と連動している。

さて、「ホメオスタシス/ストレスをテーゼとすることへの疑問」である。人間が常にホメオスタシスを志向するというテーゼは、ひとたび現実社会を省みればすぐにうち捨てられよう。危険を伴うスリルの追求、残虐な事件や物語への好奇心など、ホメオスタティックな観点からは明らかに回避すべき事象に、多くの人間は自ら接近しようとする性質を持ち合わせている。そしてその理由づけにはさまざまな観点があろうが、本論文ではその中でも人間の心的機制を鋭く指摘しているであろう、Apter (1992) の逆転理論 (Reversal Theory) を取り上げる。

まずその概略を簡単に述べると、第一に、個人にはそれぞれ最適の覚醒水準があって、ある時点での覚醒水準がその最適水準を下回れば覚醒を高めるような行動をとり、最適水準を上回れば覚醒を低めるような行動をとる普遍的な性質があるという前提がある。覚醒水準は快-不快とは独立した次元であり (Figure 5-2-1)、覚醒水準を高める行動は退屈 (非

	静穏	覚醒
快	リラックス	興奮
不快	退屈	不安・恐怖

Figure 5-2-1 覚醒水準と快-不快次元による感情

最適な低覚醒) によってもたらされ、覚醒水準を低める行動は不安や恐怖 (非最適な高覚醒) によってもたらされると言えよう。

次の前提は、同一個人の同一行動が、時と場合によっては誘発される

ものにも回避されるものにもなり得るということである。なぜなら、たとえ同じ生理的覚醒でも、それが興奮と不安のどちらかをもたらすかは「プロテクティブ・フレーム」によって決定されるからである。ここでさらに「プロテクティブ・フレーム」を説明する必要がある。個人を取り巻く状況/個人が取りうる行動は、静穏-覚醒の次元上に位置づけることが可能である。そして、それらの状況/行動は、個人を傷つける危険が高いものほど、覚醒の度合いを高めると考えられる。しかし、その行動/状況が個人を傷つけるか否かは明白に弁別されず、曖昧な主観的判断に委ねられる。そして個人は、その状況/行動と自身との距離を、安全ゾーン (離れているので確実に安全で覚醒も低い距離)、危険ゾーン (ある程度近いので危険だがおそらくは安全で覚醒は高い距離)、外傷ゾーン (近づいて明らかに危害を被る距離) の観点から判断することとなる。そしてプロテクティブ・フレームとは、危険ゾーンと外傷ゾーンの境界線にある防護壁である。もしくは、これら3つのゾーンをメタの立場で見る枠組みもプロテクティブ・フレームと考えられる。危険な状況への接近は、同時に覚醒を高めるものでもある。そして、外傷ゾーンは避けるべきであるものの、その一歩手前 (Apter はこれを *dangerous edge* と表現している) は、自身の安全が確保された上で得られる最大の覚醒をもたらす。よって人間は覚醒を求めるとき、「自分は大丈夫」という確信の範囲内において、可能な限り強烈な危険を伴うスリルや残

虐な事件・物語を求めるのである。

この理論は、ホメオスタシスだけでは説明できない現実の人間行動を説明しうる。つまり、客観的には明らかに否定的な状況／行動でも、個人が自身の安全確保への統制力を信じている限りにおいては、人間は自ら危険に近づきうるのである。Apter は高速道路の無謀なスピードの出しすぎ、種々の性犯罪や快楽殺人などのメカニズムを、この観点から論じている。そこにはプロテクティブ・フレームの設定ミス、つまり客観的には不可解な危険的／否定的状況まで、個人は大丈夫であると見なしてしまう性質が背後にある。そして、これが前述のポジティブ幻想と密接な関わりがあることは言うまでもないであろう。よって、たとえそれが客観的には否定されてしかるべきものであっても、主観的なプロテクティブ・フレームに基づいて、個人は「快楽のための攻撃」を行いうるのである。「いろいろなことをより安全にすることで、社会は知らないうちに、私たちにもっと大きな危険を冒すようそそのかしているのだ。それによって、実際に危険を冒す人たちだけでなく、他の人たちも危ない目に遭わせることになってしまう」という Apter の言葉は、前節で述べた、社会の成熟に伴うタブーの崩壊を暗示する言葉であるとも考えられる。

さらに Apter はこの理論をストレスにも援用している (Apter, 1997)。そこでは彼は「パラ目的状態が操作的なとき、覚醒の好まれる水準が高いので、どの強い感情も (否定的であると想像されるものでさえ) 快となる。つまり、ストレスは楽しいものともなり得る。」と述べている。これを前述の議論で用いた言葉で言い換えるならば、「プロテクティブ・フレームの範囲内ならば、覚醒の好まれる水準が高いので、どの強いストレスも快となる」と換言され、これは同時にユーストレスの説明であるとも考えられよう。このように、逆転理論はストレス研究の盲点を指摘すると同時に、ストレス研究に新たな地平を開きうる理論となる可能性を秘めているが、とりあえずここでの結論としては、人間は常に安定を志向しているわけではなく、個人のその時点における最適な覚醒水準を求めて、ホメオスタシス (現状を維持しようとする力) とトランジスタシス (現状を変えてゆこうとする力)² の狭間を左右し、そこから派生する種々のメカニズムによって、他者を傷つけたり他者に

*2 ホメオスタシス (homeostasis : ホメオステーシスという表記もある) の対概念として、ヘテロスタシス (heterostasis : ヘテロステーシスという表記もある) という語が用いられることもある。しかしこの概念は、Selye, H. によって命名された、「外因性 (薬理的) 刺激によって異常な組織防衛反応が発生し、持続して新しい恒常状態の現れること」であり、hetero は other than usual, different の意である (若林, 1981)。つまり、この概念は「もう一つの (別の) 安定状態」という意であり、本論文でホメオスタシスの対概念と想定している「変容志向機構」の表現としてはそぐわないと考えられる。また、ヘテロスタシスは Freud, S. の死の概念 (タナトス : thanatos) に類似の概念であるという見解もあり (外林・辻・島津・能見, 1981, Pp. 415-416.)、タナトスは「変容志向機構」と重複するところもあるが、そもそもタナトスは生に対する破壊本能とされており、本論文におけるホメオスタシスの対概念は必ずしも破壊を目的としているものではない。これらの理由から、本論文ではホメオスタシスの対概念としてヘテロスタシスを用いず、超越・変化などを意味する接頭語である trans に stasis を組み合わせた、トランジスタシス (transistasis) という語を便宜的に用いることとする。

傷ついたりする存在であると言えよう。

ちなみに、ホメオスタシスのみならず、逆転理論に代表されるトランジスタシスにも進化生物学的背景がある。それは言うまでもなく、人間の可能性の拡大へのベクトルである。それまでは回避されていた状況／行動に対するプロテクティブ・フレームの設定ミスは、少なからずその個人の生存を危うくする。しかしその設定がミスでなかったとき、人間はさらなる可能性・多様性を新たに獲得する。ホメオスタシスが「個としての人間」の生存に寄与するのに対して、トランジスタシスは「種としての人間」の生存に寄与する力であるとも言えよう。自己存在を維持するためのホメオスタシス、可能性を拡大するためのトランジスタシス、その両者を持ち合わせていたからこそ、人間は現在の生活様式を得るに至ったのである。

精神的健康という観点からのパースペクティブ

ここで、根本的な問題に戻ろう。対人関係の否定的側面は、肯定的側面よりも精神的健康に対する影響力が大きい。そして、なぜそうなるのか、なぜそれでも人は対人関係の中で生きていくのかという疑問については、ここまでの議論で若干の示唆は得られた。しかし、然るべき理由が得られたところで、やはり根本的な問題は解決されていない。それは、精神的健康という観点からの、望ましい対人関係の模索という課題である。対人関係が否定的にならざるを得ない理由を知っても、それだけでは知的好奇心しか満たされない。それでは個人はどのような対人関係を生きるべきか。かなりの難問ではあるが、若干の議論を試みてみよう。

多くの研究で、個人の精神的健康は主体的／環境的両要因によって規定されることが主張されており、本論文の結果もそれに合致するものであった。それでは主体と環境、そして精神的健康の三者は統合するとどのような関連を持つのであろうか。ここでは、主観的幸福感 (subjective well-being) を従属変数としてそのことを主張した力動均衡モデル (Dynamic Equilibrium Model : Headey & Wearing, 1989) を取り上げたい。

主観的幸福感を規定する要因に関する議論には、3つの先行仮説があった。ひとつはパーソナリティモデルというべきもので、例えば Costa & McCrae (1980) は、外向性と神経質傾向が、10年後の主観的幸福感を予測することを見いだしている。しかし、この「純粋な」パーソナリティモデルには、以下のような限界がある。ひとつは、パーソナリティモデルは主観的幸福感に対して中程度の説明力しか持たないという事実である。このことは、生態学的変数、ソーシャルネットワーク、ライフイベントも含んだ方がより適切に主観的幸福感を説明できることから明らかである。もうひとつは、パーソナリティ特性論の立場に基づくならば、主観的幸福感も長期にわたって安定しているはずであるが、実際には主観的幸福感はパーソナリティほど安定していないという事実である。これらの限界から、パーソナリティモデルは必ずしも完全なモデルではないと言えよう。

第二のモデルは適応モデルとも言うべきもので、主観的幸福感にもっとも影響を及ぼすのは大きなライフイベント経験であるというモデルである。しかしこのモデルは、イベントの影響を過大視している危険がある。そして第三のモデルは外在ライフイベント影響モデルというべきもので、適応モデルでは含まれないような多様なライフイベントも含み、かつそれらはパーソナリティとは独立に生起し、それらの肯定的／否定的影響によって主観的幸福感は規定されるとするモデルである。しかしこのモデルには、本当にイベントは外在的かという点で疑問が残る。先行研究によって、確かにある種のイベントは偶発的であるが、ある程度個人特性から導かれるイベントも存在することが見いだされているからである (e. g., Robins, 1990)。

これらの研究から、外在イベントにはパーソナリティや特性を越えたインパクトがあること、また、同じようなイベントが人生で繰り返される可能性があることが示唆されたのを受けて、Headey & Wearing は力動均衡モデルを提唱した。これは、以下の4つの仮定から成立するモデルである。①個人は「通常の (normal)」もしくは均衡の取れたライフイベントと主観的幸福感のパターンを持っており、それらはともに個人内の安定した特性から予測し得る。②ノーマルパターンが維持されると主観的幸福感の変化も生じない。③ノーマルイベントからの逸脱のみが主観的幸福感のノーマルレベルを変化させる。④しかし安定した個人特性が均衡機能を果たしノーマルレベルに戻そうとするので、この変化は一時的なものである。

Headey & Wearing は7年間におたるパネルデータからこのモデルが前述の3つのモデルよりもすぐれていることを示し、Suh et al. (1996) においてもこのモデルは支持されている。さらにこのモデルの優れている点は、基本的にはホメオスタシス、つまりストレス理論に基づきながら、逆転理論とも共通性を持つところである。というのは、このモデルにおけるノーマルパターンというのは、それが安定した主体的要因によって規定されるという仮定を除けば、逆転理論におけるプロテクティブ・フレームと類似した枠組みであると考えられるからである。これらは両者ともに、個人は最適水準の生活を志向し、過剰であれ過小であれ、そこからの逸脱は否定的なものであると見なすという枠組みである。そして、最適水準とはストレスのない状態と同義でないことは、逆転理論から明らかであろう。ここから、精神的健康という観点からの望ましい対人関係のあり方として、やや短絡的ではあるが、以下のような提言がなされるかも知れない。まず、人間は否定的な事象に過敏になる方向で歪んだ認知を持ちやすいので、対人関係の否定的側面が肯定的側面の影響力を上回るのはある程度はやむを得ない。問題はそれよりもむしろ、現状の対人関係が、個人の最適水準にあるかどうかである。対人関係、そして対人的相互作用の、現在と比しての増加／減少が、個人の最適水準へのさらなる接近をもたらすものであればそれは奨励されるべきであろうし、最適水準からの離脱をもたらすものであればそれは回避されるべきであろう。そして時には、対人関係上のトラブルすらも、心地よい覚醒をもた

らす刺激なのかも知れないし、それを克服することは、個人の最適水準幅の拡張を意味し、さらなる対人関係の展開をもたらさうであろう。自分を守りつつ自分の可能性を追求する、それが精神的健康という観点からも、個人にとって望ましい対人関係のあり方なのではないだろうか。

精神的健康を越えて

本節では、対人関係の否定的側面が精神的健康に及ぼす影響は肯定的側面の影響を上回ることを出発点として、それでもなぜ人は対人関係の中で生きていくのかを議論してきた。しかし最後に、本論文のこれまでの議論で、非常に重要かつ基本的な視点が欠落していたことに言及する必要がある。それは、精神的健康のみが、対人関係の従属変数ではないという事実である。

個人が対人関係の中で生きていく理由は、もちろん本論文でこれまで述べてきたように、精神的健康の維持をはじめとする、自身の生存と関わる諸側面によるところも大きい。しかし、対人関係が個人に寄与する意味はそれだけではない。例えば、社会心理学におけるさまざまな研究テーマにおいて、対人関係は課題遂行的側面と情動安定的側面を含んでいるという興味深い事実が伺える (Table 5-2-1)。そしてこの区分は、これまでに議論してきたトランジスタシスとホメオスタシスという、人間の今日までの生存と発展を支えてきた二つのベクトルと重複するところが大きいと考えられる。

Table 5-2-1 社会心理学の研究テーマにおける課題-情動の二側面

テーマ	課題遂行的側面	情動安定的側面	精神的健康、そしてストレスを従属変数として用いるのは、(基本的には)ホメオスタシスに基づいた観点である。そして
リーダーシップ	課題遂行機能 (P)	集団維持機能 (M)	
ソーシャルサポート	道具的サポート	情緒的サポート	
ストレス対処	問題焦点型対処	情動焦点型対処	
説得過程	中心的態度変化	周辺の態度変化	
葛藤生起	課題志向的葛藤	人格志向的葛藤	
葛藤解決目標	資源的目標	社会的目標	
社会的動機	達成動機	親和動機	

トランジスタシスも従属変数として想定されたとき、対人関係は「精神的健康」という意味では相対的に否定的に働くかも知れないが、それ以上に肯定的な別の従属変数を対人関係がもたらす可能性は考慮されるべきである。「精神的健康の観点から望ましい対人関係」とは、「望ましい対人関係」の(多くとも)半分に過ぎないであろうし、安定と変化の両側面を包括した対人関係のあり方の議論は、人間が人間らしさを持ち続ける限りにおいて、永遠のテーマなのかも知れない。

5-2-3 結語-ヤマアラシにはなぜトゲがあるのか-

本論文の冒頭に記したヤマアラシのカップルは、最後はお互いにそれほど傷つけ合わないですみ、しかもある程度暖め合えるような距離を見つけだした。しかし、彼らがそのまま安らかに暮らし続けることができたかは解らない。彼らの距離の取り方は、その他のヤマアラシを傷つけたり凍えさせるようなものであるかも知れない。また、お互いのトゲの長さや鋭さ、痛みや寒さに対する耐性の差違が、現状の距離への不満を招くかも知れない。そしてこれらの問題をすべて解決しうる距離が見いだされたとしても、その距離を維持することの窮屈さに飽き飽きして、自らその距離を放棄するかも知れない。

言うまでもなくヤマアラシにとっての「トゲ」とは、人間にとっての社会性や高度の認知能力をはじめとする「人間性」と同義であり、それらはともに、その種が生き残るために受容せざるを得なかった宿命である。ただ、ヤマアラシはなぜ自分にトゲがあるのかを知らず、そのような疑問を持つことすらないであろう。そして人間は、なぜ人間性を身につけたのかを考えることができる。

最後にもうひとつ、蛇足かも知れないがひとつの概念に触れておきたい。心理学を含め、現代科学においてひとつの大きな潮流を形成しつつある「複雑系」研究の中に、「ホメオカオス」という言葉がある。これは金子邦彦らの生物個体数変化のコンピューターシミュレーションにおいて見いだされた、種の多様さを保った集団が突然変異などによって不規則に個体数を増減しつつも、その存在を維持し続ける現象である。簡潔には、「多様性を維持した安定性機構」と言えよう。このメカニズムは、状況の変化に対応した種の存続という課題克服のためには、多様性が不可欠であることを示している。多様性とは逸脱の限界に挑む試みであり、その限界が臨界点を過ぎたときに、その主体は淘汰の対象となる。しかし、臨界点を越えないまま限界を拡張し続けることは、主体が、そして種が、自らの生存可能性を拡張し続けることである。そしてホメオスタシスが理想的な静的安定性を想定しているのに対し、ホメオカオスでは理想状態は想定されない。その結果、ホメオスタシスは理想が覆されたときに壊滅的状况に陥るのに対し、ホメオカオスは理想が覆されることはない。その状況に対する相対的な有利不利があるだけであり、それは常に逆転の可能性を秘めている。

肯定的側面と否定的側面、自己の承認と社会からの承認、安定と変化、関与と逃避…人間は多くの相反する志向性を併せ持ち、その事実を時には都合よく用い、時にはその矛盾の狭間で悩んでいる。本論文はその相対的な影響力をはじめ、人間が社会で生きていく上での光と影を認め、特に本節ではその背景にある人間の宿命的なメカニズムを考察してきた。そもそも本論文は、「望ましい対人関係の在り方の模索」という、極めて曖昧な主題の議論を目的としていた。しかし上記の議論から導かれるであろうその答えは、それ以上に曖昧なものであるかも知れない。

人は生まれながらに、対人関係という不可解なカオスに飛び込む運命にある。そしてそ

ここではさまざまな要求が待ち受けており、個人が応えられる限界がある。そして限界以上に踏み込むことは、個人を崩壊させる危険を伴う。そこで限界線に踏みとどまるという選択は、自身の生存を確保するが、自身の成長の放棄とも同義であろう。限界線を越えるという選択は、自身の心理的崩壊を招くかも知れないが、さらなる可能性を見いだす契機ともなり得よう。そしてその両者の存在によって、人類は文化の発展と種の生存を同時になし得たのである。

そして、筆者の根本的な疑問に対する回答の一端は、おそらくこのように要約されよう。

「人間とは世界から、そして自分から試されている存在なのである」と。

引用文献

- Abbey, A., Andrews, F.M., & Halman, L.J. 1995 Provision and receipt of social support and disregard: What is their impact on the marital life quality of infertile and fertile couples? *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 455-469.
- Abbey, E., Abramis, D.J., & Caplan, R.D. 1985 Effects of different sources of social support and social conflict on emotional well-being. *Basic and Applied Social Psychology*, 6, 111-129.
- 相川 充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 *心理学研究*, 62, 149-155.
- 相川 充 1996a 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充 (編) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 Pp.3-21.
- 相川 充 1996b 孤独感と社会的スキル 相川 充・津村俊充 (編) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 Pp.129-145.
- 相川 充 1997 対人関係能力の向上への手立て 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) ,44, 17-24.
- 相川 充・津村俊充 (編) 1996 社会的スキルと対人関係: 自己表現を援助する 誠信書房
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1993 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究—孤独感と社会的スキルとの関係— *社会心理学研究*, 8, 44-55.
- Alloy, L.B., Fedderly, S.S., Kennedy-Moore, E., & Cohan, C.L. 1998 Dysphobia and social interaction: An integration of behavioral confirmation and interpersonal perspectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1566-1579.
- Aneshensel, C.S. 1992 Social stress: Theory and research. *Annual Review of Sociology*, 18, 15-38.
- Antonucci, T.A. 1985 Social support: Theoretical advances, recent findings and pressing issues. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp.21-37.
- Apter, M.J. 1992 *The Dangerous Edge: The Psychology of Excitement*. New York: The Free Press. (M.J.アプター著 山岸俊男監訳 渋谷由紀訳 1995 デンジャラス・エッジ—「危険」の心理学— 講談社)
- Apter, M.J. 1997 Reversal theory, stress, and health. In S.Svebak & M.J.Apter (eds.), *Stress and Health: A Reversal Theory Perspective*. Taylor & Francis. Pp.21-32.
- Argyle, M. 1987 *The Psychology of Happiness*. The Academic division of Associated Book Publishers (UK) Ltd. (M.アーガイル著 石田梅男訳 1994 幸福の心理学 誠信書房)
- Argyle, M. & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships and the rules and skills needed to manage them successfully*. Intercontinental Literary Agency. (M.アーガイル・M.ヘンダーソン著 吉森 護編訳 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- 朝日新聞 1996 傷つくのがこわい—「やさしさ」世代の若者たち— 朝日新聞社
- Asendorpf, J.B. & Wilpers, S. 1998 Personality effects on social relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1531-1544.

- Aspinwall, L.G. & Taylor, S.E. 1992 Modeling cognitive adaptation: A longitudinal investigation of the impact of individual differences and coping on college adjustment and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 989-1003.
- Barrera, M., Jr. 1986 Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Barrera, M., Jr., Chassin, L., & Rogosch, F. 1993 Effects of social support and conflict on adolescent children of alcoholic and nonalcoholic fathers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 602-612.
- Barrera, M., Jr., Sandler, I.N., & Ramsay, T.B. 1981 Preliminary studies of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, 9, 435-447.
- Baumeister, R.F. & Leary, M.R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Bellak, L. 1970 *The Porcupine Dilemma, Reflections on the Human Condition*. Citadel Press, Inc.
(L.ベラック著 小此木啓吾訳 1974 山アラシのジレンマ—人間的疎外をどう生きるか—ダイヤモンド社)
- Blazer, D.G. 1982 Social support and mortality in an elderly community population. *American Journal of Epidemiology*, 115, 684-694.
- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R.C., & Schilling, E.A. 1989 Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 808-818.
- Bolger, N. & Eckenrode, J. 1991 Social relationships, personality, and anxiety during a major stressful event. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 440-449.
- Brock, D.M., Sarason, I.G., Sarason, B.R., & Pierce, G.R. 1996 Simultaneous assessment of perceived global and relationship-specific support. *Journal of Social and Personal Relationships*, 13, 143-152.
- Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M.T., & Reis, H.T. 1988 Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 991-1008.
- Buss, A.H. & Durkee, A. 1957 An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 343-349.
- Cassel, J. 1976 The contribution of the social environment to host resistance. *American Journal of Epidemiology*, 104, 107-123.
- Caldwell, R.A., Bogat, G.A., & Cruise, K. 1989 The relationship of ego identity to social network structure and function in young men and women. *Journal of Adolescence*, 12, 309-313.
- Cohen, S., Sherrod, D.R., & Clark, M.S. 1986 Social skills and the stress protective role of social support. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 963-973.
- Cohen, S. & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Collins, W.A. & Laursen, B. 1992 Conflict and relationships during adolescence. In C.U. Shantz & W.W. Hartup (Eds.) *Conflict in Child and Adolescent Development*. Cambridge University Press. Pp. 216-241.
- Compas, B.E., Malcarne, V.L., & Fondacaro, K.M. 1988 Coping with stressful events in older

- children and young adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 56, 405-411.
- Compas, B.E., Orosan, P.G., & Grant, K.E. 1993 Adolescent stress and coping: implications for psychopathology during adolescence. *Journal of Adolescence*, 16, 331-349.
- Costa, P.T. Jr. & McCrae, R.R. 1980 Influence of extraversion and neuroticism on subjective well-being: Happy and unhappy people. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 668-678.
- Coyne, J.C. & DeLongis, A. 1986 Going beyond social support: The role of social relationships in adaptation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54, 454-460.
- Coyne, J.C., Ellard, J.H., & Smith, D.A.F. 1990 Social support, interdependence, and the dilemmas of helping. In B.R. Sarason, I.G. Sarason, & G.R. Pierce (eds.), *Social Support: An Interactional View*. John Wiley & Sons. Pp. 129-149.
- Cutrona, C.E. 1986 Objective determinants of perceived social support. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 349-355.
- Cutrona, C.E. 1989 Ratings of social support by adolescents and adult informants: Degree of correspondence and prediction of depressive symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 723-730.
- Cutrona, C.E., & Russell, D.W. 1990 Type of social support and specific stress: Toward a theory of optimal matching. In B.R. Sarason, I.G. Sarason & G.R. Pierce (Eds.), *Social support: An interactional view*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 319-366.
- David, J.P., Green, P.J., Martin, R., & Suls, J. 1997 Differential roles of neuroticism, extraversion, and event desirability for mood in daily life: An integrative model of top-down and bottom-up influences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 149-159.
- Davila, J., Hammen, C., Burge, D., Paley, B., & Daley, S.E. 1995 Poor interpersonal problem solving as a mechanism of stress generation in depression among adolescent women. *Journal of Abnormal Psychology*, 104, 592-600.
- Davis, M.H., Norris, M.M., & Kraus, L.A. 1998 Relationship-specific and global perceptions of social support: Associations with well-being and attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 468-481.
- DeLongis, A., Folkman, S., & Lazarus, R.S. 1988 The impact of daily stress on health and mood: Psychological and social resources as mediators. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 486-495.
- Deutsch, M. 1973 *The Resolution of Conflict: Constructive and Destructive Processes*. Yale University Press, London. (M. ドイツ著 杉田千鶴子訳 1995 紛争解決の心理学 ミネルヴァ書房)
- Diener, E., Larsen, R.J., & Emmons, R.A. 1984 Person \times situation interactions: Choice of situations and congruence response models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 580-592.
- Dunkel-Schetter, C. & Bennett, T.L. 1990 Differentiating the cognitive and behavioral aspects of social support. In Sarason, B.R., Sarason, I.G., & Pierce, G.R. (Eds.) *Social Support: An Interactional View*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 267-296.
- Durkheim, E. 1897/1960 *Le Suicide: étude de sociologie*, nouvelle édition, 3^e trimestre, Presses

- Universitaires de France. (E.デュルケーム著 宮島 喬訳 1985 自殺論 中央公論社)
- Eagly,A.H. & Wood,W. 1982 Inferred sex differences in status as a determinant of gender stereotypes about social influence. *Journal of Personality and Social Psychology*,43,915-928.
- Ebata,A.T. & Moos,R.H. 1994 Personal, situational, and contextual correlates of coping in adolescence. *Journal of Research on Adolescence*,4,99-125.
- Eidelson,R.J. 1980 Interpersonal satisfaction and level of involvement: A curvilinear relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*,39,460-470.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究,11,134-144.
- 遠藤由美 1998 自己評価 池上知子・遠藤由美 (共著) グラフィック社会心理学 サイエンス社 Pp.117-134.
- Ensel,W.M. & Lin,M. 1991 The life stress paradigm and psychological distress. *Journal of Health and Social Behavior*,32,321-341.
- Falbo,T., & Peplau,L.A. 1980 Power strategies in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*,38,618-628.
- Faucett,J.A. & Levine,J.D. 1991 The contributions of interpersonal conflicts to chronic pain in the presence or absence of organic pathology. *Pain*,44,35-43.
- Finch,J.F.,Okun,M.A.,Barrera,M.,Jr.,Zautra,A.J.,& Reich,J.W. 1989 Positive and negative social ties among older adults: Measurement models and the prediction of psychological distress and well-being. *American Journal of Community Psychology*,17,585-605.
- Fiore,J.,Becker,J.,& Coppel,D.B. 1983 Social network interactions: A buffer or a stress. *American Journal of Community Psychology*,11,423-439.
- Fisher,J.D.,Nadler,A.,& Whitcher-Alagna,S. 1982 Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*,91,27-54.
- Folkman,S. 1984 Personal control and stress and coping processes: A theoretical analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*,46,839-852.
- Folkman,S. & Lazarus,R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*,21,219-239.
- Fondacaro,M.R. & Heller,K. 1983 Social support factors and drinking among collage student males. *Journal of Youth and Adolescence*,12,285-299.
- Fox,J.W. 1990 Social class, mental illness, and social mobility: The social selection-drift hypothesis for serious mental illness. *Journal of Health and Social Behavior*,31,344-353.
- Fromm,E. 1941 *Escape From Freedom*. New York. (E.フロム著 日高六郎訳 1965 自由からの逃走 東京創元社)
- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究,68, 441-448.
- 藤森立男 1987 対人葛藤の解決ストラテジーについての研究 日本グループ・ダイナミックス学会第35回大会発表論文集,67-68.
- 藤森立男 1989 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究,4,108-116.
- 藤森立男・藤森和美 1992 人と争う 松井 豊 (編) 対人心理学の最前線 サイエンス社

Pp.141-151.

- 藤竹 暁 1994 若者にとって幸せとは—満足社会のゆくえ— 有斐閣
- 福西勇夫 (編) 1997 ソーシャル・サポート 現代のエスプリ 363 至文堂
- 福島 治・大淵憲一 1997 紛争解決の方略 大淵憲一 (編著) 現代応用社会心理学講座 3
紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 Pp.32-58.
- 古川雅文・藤原武弘・井上 弥・石井眞治・福田 廣 1983 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究 心理学研究,53,330-336.
- Goldstein,J.M. & Caton,C.L.M. 1983 The effects of the community environment on chronic psychiatric patients. *Psychological Medicine*,13,193-199.
- Gottlieb,B.H. 1994 Social support. In A.L.Weber & J.H.Harvey (eds.) *Perspectives on Close Relationships*. Allyn and Bacon,Pp.307-324.
- Gove,W.R. 1972 The relationship between sex roles, mental illness and marital status. *Social Forces*,51,34-44.
- Graziano,W.G.,Jensen-Campbell,L.A.,& Hair,E.C. 1996 Perceiving interpersonal conflict and reacting to it: The case of agreeableness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 820-835.
- Greenberg,J.,Pyszczynski,T., & Solomon,S. 1986 The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R.F.Baumeister (ed.) *Public Self and Private Self*. Springer-Verlag.Pp.189-212.
- Greenwald,A.G. 1980 The totalitarian edo: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist*,35,603-618.
- Grissett,N.I. & Norvell,N.K. 1992 Perceived social support,social skills,and quality of relationships in bulimic women. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,60,293-299.
- Hammen,C.L.,Burge,D.,Daley,S.E.,Davila,J.,Paley,B.,& Rudolph,K.D. 1995 Interpersonal attachment cognitions and prediction of symptomatic responses to interpersonal stress. *Journal of Abnormal Psychology*,104,436-443.
- Hardy,J.D. & Smith,T.W. 1988 Cynical hostility and vulnerability to disease: Social support,life stress,and physiological responses to conflict. *Health Psychology*,7,447-459.
- Hart,K.E. & Hittner,J.B. 1991 Irrational beliefs,perceived availability of social support,and anxiety. *Journal of Clinical Psychology*,47,582-587.
- 橋本 剛 1995a 対人葛藤事態における対処方略の影響 第8回日本健康心理学会発表論文集,68-69.
- 橋本 剛 1995b ストレッサーとしての対人葛藤 実験社会心理学研究,35,185-193.
- 橋本 剛 1996a ソーシャルネットワークにおけるサポートとストレスが精神的健康に及ぼす影響 日本健康心理学会第9回大会発表論文集,132-133.
- 橋本 剛 1996b 特定関係と精神的健康との関連—特定関係サポート・ストレス尺度を用いて— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—,43,123-135.
- 橋本 剛 1997a 肯定的/否定的対人関係の測定に関する一考察 日本健康心理学会第10回記念大会発表論文集,38-39.
- 橋本 剛 1997b 対人関係と心理社会的ストレス—何が「否定的な対人関係」なのか— 対

- 人行動学研究,15,44-48.
- 林 文俊・小田哲久 1996 ファジィ理論による性格特性5因子モデル (FFM) の検討 心理学研究,66,401-408.
- 林峻一郎 (編・訳) 1990 R.S.ラザルス講演 ストレスとコーピング 星和書店
- Hays,R.B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*,48,909-924.
- Hays,R.B. & Oxley,D. 1986 Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*,50,305-313.
- Headey,B. & Wearing,A. 1989 Personality, life events, and subjective well-being: Toward a dynamic equilibrium model. *Journal of Personality and Social Psychology*,57,731-739.
- Heider,F. 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*. John Wiley & Sons, Inc. (F.ハイダー著 大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Helgeson,V.S. 1993 Two important distinctions in social support: Kind of support and perceived versus received. *Journal of Applied Social Psychology*,23,825-845.
- Hewitt,P.L. & Flett,G.L. 1993 Dimensions of perfectionism, daily stress, and depression: A test of the specific vulnerability hypothesis. *Journal of Abnormal Psychology*,102,58-65.
- 平石賢二・杉村和美 1996 中学生の役割緊張に関する研究—コンピテンスおよびストレス反応との関連から— 青年心理学研究,8,27-40.
- 久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究,20,2-11.
- 久田 満・丹羽郁夫 1987 大学生の生活ストレス測定に関する研究—大学生用生活体験尺度の作成— 慶応大学大学院社会学研究科紀要,27,45-55.
- Hobfoll,S.E. & Stephens,M.A.P. 1990 Social support during extreme stress: Consequences and Intervention. In B.R.Sarason,I.G.Sarason & G.R.Pierce (Eds.), *Social support: An interactional view*. New York: John Wiley & Sons. Pp.454-481.
- Hogg,M.A. & Abrams,D. 1988 *Social Identifications: A Social Psychology of Intergroup Relations and Group Processes*. Routledge. (M.A.ホッグ・D.アブラムス著 吉森 護・野村泰代訳 1995 社会的アイデンティティ理論 北大路書房)
- Holahan,C.J.,Moos,R.H.,& Bonin,L. 1997 Social support,coping,and psychological adjustment: A resource model. In G.R.Pierce,B.Lakey,I.G.Sarason,& B.R.Sarason (eds.), *Sourcebook of Social Support and Personality*. Plenum Press, New York. Pp.169-186.
- Holahan,C.J.,Moos,R.H.,Holahan,C.K.,& Brennan,P.L. 1997 Social context,coping strategies,and depressive symptoms: An expanded model with cardiac patients. *Journal of Personality and Social Psychology*,72,918-928.
- Holmes,T.H.,& Rahe,R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*,11,213-218.
- 堀毛一也 1990 社会的スキルの習得 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.79-100.
- 堀毛一也 1994 人当たりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也 (編著) 社会的スキルの心理学—100のリストとその理論— 川島書店 Pp.168-176.
- 堀野 緑 1991 勢力動機の二面性とソーシャルサポートの関係 教育心理学研究,39,

419-425.

- Horwitz, A. V., McLaughlin, J., & White, H. R. 1997 How the negative and positive aspects of partner relationships affect the mental health of young married people. *Journal of Health and Social Behavior*, 39, 124-136.
- Hotard, S. R., McFatter, R. M., McWhirter, R. M., & Stegall, M. E. 1989 Interactive effects of extraversion, neuroticism, and social relationships on subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 321-331.
- House, J. S., Landis, K. R., & Umberson, D. 1988 Social relationships and health. *Science*, 241, 540-545.
- Hughes, M. & Demo, D. H. 1989 Self-perceptions of black americans: Self esteem and personal efficacy. *American Journal of Sociology*, 95, 132-159.
- 池内 一 1971 コンフリクトの社会心理学 日本社会心理学会 (編) 葛藤と紛争—年報社会心理学・第12号— 勁草書房 Pp.8-35.
- 稲岡文昭 1988 Burnout 現象と Burnout スケールについて 看護研究, 21, 147-155.
- 石原邦雄・山本和郎・坂本 弘 (編) 1985 講座生活ストレスを考える 第1巻 生活ストレスとは何か 垣内出版
- 磯貝芳郎 1992 今ふうの友だちづきあい—進行する人間関係の稀薄化— 磯貝芳郎 (編) 上手な自己表現—豊かな人間関係を育むために— 有斐閣選書 Pp.1-22.
- 岩間夏樹 1995 戦後若者文化の光芒—団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡— 日本経済新聞社
- Johnson, T. P. 1991 Mental health, social relations, and social selection: A longitudinal analysis. *Journal of Health and Social Behavior*, 32, 408-423.
- Jones, W. H. 1985 The psychology of loneliness: Some personality issues in the study of social support. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp. 225-241.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第2版) 東京大学出版会
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- Kaplan, H. B. 1996 Perspectives on psychosocial stress. In H. B. Kaplan (ed.), *Psychological Stress: Perspectives on Structure, Theory, Life-Course, and Methods*. Academic Press. Pp. 3-24.
- Kaplan, R. M. 1985 Social support and social health: Is it time to rethink the who definition of health. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp. 95-113.
- Kashani, J. H. & Shepperd, J. A. 1990 Aggression in adolescents: The role of social support and personality. *Canadian Journal of Psychiatry*, 35, 311-315.
- 柏木繁男・和田さゆり 1996 5因子モデル (FFM) による性格特性テストの併存的妥当性の検討 心理学研究, 67, 300-307.
- 柏木繁男・山田耕嗣 1995 性格特性5因子モデル (FFM) による内田クレペリンテストの評価について 心理学研究, 66, 24-32.
- 川西陽子 1995 セルフ・エスティームと心理的ストレスの関係 健康心理学研究, 8(1), 22-30.

- 河野友信・田中正敏（編） 1986 ストレスの科学と健康 朝倉書店
- Kelley,H.H. 1987 Toward a taxonomy of interpersonal conflict processes. In S.Oskamp & S.Spacapan(eds.,) *Interpersonal Processes*. SAGE Publications,Inc. Pp.122-147.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 菊池章夫 1998 また／思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 菊池章夫・堀毛一也 1994 社会的スキルとは 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの心理学 川島書店 Pp.1-22.
- Kilmann,R.H.,& Thomas,K.W.1977 Developing a forced-choice measure of conflict handling behavior:The "MODE" instruments. *Educational and Psychological Measurement*, 37, 309-325.
- 木村 駿・相場 均・南 博（編） 1972 現代人の病理第2巻 人間関係の臨床社会心理学 誠信書房
- 木下富雄 1990 健康心理学の現況 心理学評論,33,3-34.
- 岸 良範 1989 大学生の対人関係 山崎久美子（編） 現代のエスプリ 266 大学生のメンタルヘルス 至文堂 Pp.94-102.
- 小林 裕・水田恵三・織田信男・難波正人・淵上克義・大淵憲一 1991 パーソナリティ尺度 A.H.バス（著） 大淵憲一（監訳） 対人行動とパーソナリティ 北大路書房.
- 小石寛文 1995 学級における仲間関係ストレスの要因 日本心理学会第59回大会発表論文集,408.
- 小谷 敏 1993 モラトリアム・若者・社会—エリクソンと青年論・若者論— 小谷 敏（編） 若者論を読む 世界思想社 Pp.54-79.
- 久保真人 1993 行動特性から見た関係の親密さ—RCIの妥当性と限界— 実験社会心理学研究,33,1-10.
- 久保真人 1997 職場の人間関係と葛藤 大淵憲一（編著） 現代応用社会心理学講座3 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 Pp.207-223.
- 栗原 彬 1989 やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス— 新曜社
- Lakey,B. & Cassady,P.B. 1990 Cognitive processes in perceived social support. *Journal of Personality and Social Psychology*,59,337-343.
- Lakey,B.,McCabe,K.M.,Fiscaro,S.A.,& Drew,J.B. 1996 Environmental and personal determinants of support perceptions: Three generalizability studies. *Journal of Personality and Social Psychology*,70,1270-1280.
- Lakey,B.,Tardiff,T.A.,& Drew,J.B. 1994 Negative social interactions: Assessment and relations to social support,cognition,and psychological distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13,42-62.
- Laursen,B., & Collins,W.A. 1994 Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, 115, 197-209.
- Lazarus,R.S. & Folkman,S. 1984 *Stress, Appraisal, and Coping*. New york: Springer. (R.S.ラザルス・S.フォルクマン著 本明 寛・春木 豊・織田正美監訳 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- Leary,M.R. 1983 *Understanding social anxiety:Social,personality,and clinical perspectives*. SAGE Publications. (M.R.リアリィ著 生和英敏監訳 1990 対人不安 北大路書房)

- Leary, M.R. & Miller, R.S. 1986 *Social Psychology and Dysfunctional Behaviour: Origins, Diagnosis, and Treatment*. Springer-Verlag New York, Inc. (M.R.リアリー・R.S.ミラー著 安藤清志・渡辺浪二・大坊郁夫訳 1989 不適応と臨床の社会心理学 誠信書房)
- Lefcourt, H.M. 1985 Intimacy, social support, and locus of control as moderators of stress. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp155-171.
- Lepore, S.J. 1992 Social conflict, social support, and psychological distress: Evidence of cross-domain buffering effects. *Journal of Personal and Social Psychology*, 63, 857-867.
- Levenstein, S., Prantera, C., Varvo, V., Scribano, M.L., Berto, E., Luzi, C., & Andreoli, A. 1993 Development of the perceived stress questionnaire: A new tool for psychosomatic research. *Journal of Psychosomatic Research*, 37, 19-32.
- Lewin, K. 1948 *Resolving Social Conflicts: Selected Papers on Group Dynamics*. Harper, New York. (K.レヴィン著 末永俊郎訳 1967 社会的葛藤の解決—グループ・ダイナミックス論文集— (第6版) 東京創元新社)
- Likert, R. & Likert, J.G. 1976 *New Ways of Managing Conflict*. McGraw-Hill, Inc. (R.リッカート・G.リッカート著 三隅二不二監訳 1988 コンフリクトの行動科学—対立管理の新しいアプローチ—ダイヤモンド社)
- Mack, R.W. & Snyder, R.C. 1957 The analysis of social conflict: Toward an overview and synthesis. *Journal of conflict Resolution*, 1, 212-248.
- Magnus, K., Diener, E., Fujita, F., & Pavot, W. 1993 Extraversion and neuroticism as predictors of objective life events: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 1046-1053.
- Maguire, L. 1991 *Social Support Systems in Practice: A Generalist Approach*. National Association of Social Workers, Inc. (L.マグワアニア著 小松源助・稲沢公一訳 1994 対人援助のためのソーシャルサポートシステム 川島書店)
- Major, B. & Cozzarelli, C. 1992 Psychosocial predictors of adjustment to abortion. *Journal of Social Issues*, 48, 121-142.
- Major, B., Cozzarelli, C., Sciacchitano, A.M., Cooper, M.L., Testa, M., & Mueller, P.M. 1990 Perceived social support, self-efficacy, and adjustment to abortion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 452-436.
- Major, B., Zubek, J.M., Cooper, M.L., Cozzarelli, C., & Richards, C. 1997 Mixed messages: Implications of social conflict and social support within close relationships for adjustment to a stressful life event. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1349-1363.
- Man, A.F., Ledue, C.P., & Labreche-Gauthier, L. 1993 Correlates of suicidal ideation in French-Canadian adolescents: Personal variables, stress and social support. *Adolescence*, 28, 819-830.
- Maslach, C. 1976 Burned-out. *Human Behavior*, 5, 16-22.
- Maslach, C. & Jackson, S.E. 1981, The measurement of experienced burnout. *Journal of Occupational Behavior*, 2, 99-113.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック

- 川島書店 Pp.283-296.
- 松元泰儀 1996 人間関係のつまずきと病理 斎藤誠一 (編) 人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係 培風館 Pp.135-167.
- 松本芳之 1997 交渉における相互作用 大淵憲一 (編著) 現代応用社会心理学講座3 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 Pp.78-96.
- 松崎 学・田中宏二・古城和敬 1990 ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果 実験社会心理学研究,30,147-153.
- Mattlin,J.A.,Wethington,E.,& Kessler,R.C. 1990 Situational determinants of coping and coping effectiveness. *Journal of Health and Social Behavior*,31,103-122.
- McFarlane,A.H.,Neale,K.A.,Norman,G.R.,Roy,R.G.,& Streiner,D.L. 1981 Methodological issues in developing a scale to measure social support. *Schizophrenia Bulletin*,7,90-100.
- Mechanic,D. 1972 Social class and Schizophrenia: Some requirements for a plausible theory of social influence. *Social Forces*,50,305-313.
- 美馬達哉 1996 ストレス理論への大疑問 別冊宝島編集部 (編) 常識やぶりの健康読本 宝島社 Pp.148-159.
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 1988 「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけてー若干の資料ー 哲学,85,151-184.
- 三隅二不二 1978 リーダーシップ行動の科学 有斐閣
- 宮台真司 1994 制服少女たちの選択 講談社
- 宮下一博 1994 大学生における疎外感と価値観との関係 教育心理学研究,42,201-208.
- 諸井克英 1996 対人関係の存在意義 長田雅喜 (編) 対人関係の社会心理学 福村出版 Pp.121-131.
- 本明 寛 1990 健康心理学に期待するもの 社会心理学研究,5,75-82.
- 宗像恒次 1991 ストレス解消学ー過労死・がん・慢性疾患を越えるためにー 小学館
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析ー小学4、5、6年生を対象にしてー 教育心理学研究,39,182-185.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版 GHQ 精神健康調査表手引 日本文化科学社
- 中川米造・宗像恒次 (編) 1989 応用心理学講座 13 医療・健康心理学 福村出版
- Nelson-Jones,R. 1990 *Human relationship skills:Training and self-help*. Cassell Plc.,London. (R.ネルソン=ジョーンズ著 相川 充訳 1993 思いやりの人間関係スキルー一人でできるトレーニングー 誠信書房)
- 西平直喜 1990 成人になること 東京大学出版会
- Nolen-Hoeksema,S. 1987 Sex differences in unipolar depression. *Psychological Bulletin*,101, 259-282.
- Norbeck,J.D. 1986 看護におけるソーシャル・サポートー理論と研究の接点ー 看護研究,19 (臨時増刊) ,3-24.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究,44,55-65.
- 大淵憲一 1991 対人葛藤と日本人 高橋順一・中山治・御堂岡潔・渡辺文夫 (編) 異文化へのストラテジー 川島書店 Pp.161-180.

- 大淵憲一 1992 日本人とアメリカ人の対人葛藤 渡辺文夫・高橋順一（編）地球社会時代をどう捉えるかー人間科学の課題と可能性ー ナカニシヤ出版 Pp.18-37.
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心ー攻撃性の社会心理学ーサイエンス社
- 大淵憲一 1996 攻撃性と対人葛藤 大淵憲一・堀毛一也（編）パーソナリティと対人葛藤 誠信書房 Pp.101-122.
- 大淵憲一 1997 紛争解決の文化的スタイル 大淵憲一（編著）現代応用社会心理学講座3 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 Pp.343-367.
- Ohbuchi,K. & Baba,R. 1988 Selection of influence strategies in interpersonal conflicts: Effects of sex,interpersonal relations,and goals. *Tohoku Psychologica Folia*,47,63-73.
- 大淵憲一・福島 治 1997 葛藤解決における多目標ーその規定因と方略選択に対する効果ー 心理学研究,68,155-162.
- 大淵憲一・堀毛一也 1996 対人行動とパーソナリティ 大淵憲一・堀毛一也（編）パーソナリティと対人行動 誠信書房 Pp.1-28.
- 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波新書
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一考察ー現代日本青年の心情モデルについての検討ー 教育心理学研究,32,100-109.
- 大迫秀樹 1994 高校生のストレス対処行動の状況による多様性とその有効性 健康心理学研究,7(1),26-34.
- 大迫弘江・高橋 超 1994 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究,34,44-57.
- 大塚明子 1997 風俗・社会現象 鈴木 力（編）情報・知識 imidas 集英社 Pp.1323-1329.
- 岡林秀樹・大井直子・原一雄 1995 大学生の人生観の年代的変遷 心理学研究,66,127-133.
- 岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究,1,11-18.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究,4,162-170.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究,43,354-363.
- 岡田 努 1996 現代青年は本当に変わってしまったのかー友人関係を中心としてー 日本青年心理学会第4回大会発表論文集,49-50.
- 岡堂哲雄（編） 1991 健康心理学ー健康の回復・維持・増進を目指してー 誠信書房
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究,63,310-318.
- Orford,J. 1992 *Community Psychology: Theory and Practice*. John Wiley & Sons,Ltd. (J.オーフォード著 山本和郎監訳 1997 コミュニティ心理学ー理論と実践ー ミネルヴァ書房)
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂ートランスアクションナルな分析に向けてー 久留米大学大学院比較文化研究科年報,1,95-114.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 1991 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究,4(2),1-9.
- Pagel,M.D.,Erdly,W.W.,& Becker,J. 1987 Social networks: We get by with (and in spite of) a

- little help from our friends. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 793-804.
- Payne, R.L. & Jones, J.G. 1987 Measurement and methodological issues in social support. In S.V. Karl & C.L. Cooper (eds.) *Research Methods in Stress and Health Psychology*. Chichester: John Wiley & Sons, Pp.167-206.
- Pearlin, L. 1989 The sociological study of stress. *Journal of Health and Social Behavior*, 30, 241-256.
- Pearlin, L.I. & Turner, H.A. 1987 The family as a context of the stress process. In S.V. Karl & C.L. Cooper (Eds.), *Research methods in stress and health psychology*. Chichester: John Wiley & Sons. Pp.143-165.
- Petersen, A.C. 1988 Adolescent development. *Annual Review of Psychology*, 39, 583-607.
- Petersen, A.C., Sarigiani, P.A., & Kennedy, R.E. 1991 Adolescent Depression: Why more girls? *Journal of Youth and Adolescence*, 20, 247-271.
- Pierce, G.R., Lakey, B., Sarason, I.G., & Sarason, B.R. (eds.) 1997 *Sourcebook of Social Support and Personality*. Plenum Press.
- Pierce, G.R., Sarason, I.G., & Sarason, B.R. 1991 General and relationship-based perceptions of social support: Are two constructs better than one? *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 1028-1039.
- Procidano, M.E. & Heller, K. 1983 Measures of perceived social support from friends and from family: Three validation studies. *American Journal of Community Psychology*, 11, 1-23.
- Rabkin, J.G. & Struening, E.L. 1976 Life events, stress, and illness. *Science*, 194, 1013-1020.
- Rahim, M.A. 1983 A measure of styles of handling interpersonal conflict. *Academy of Management Journal*, 26, 368-376.
- Rands, M. & Levinger, G. 1979 Implicit theories of relationship: An intergenerational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 645-661.
- Rauktis, M.E., Koeske, G.F., & Tereshko, O. 1995 Negative social interactions, distress, and depression among those caring for a seriously and persistently mentally ill relative. *American Journal of Community Psychology*, 23, 279-299.
- Robins, C.J. 1990 Congruence of personality and life events in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 99, 393-397.
- Rook, K.S. 1984 The negative side of social interaction: Impact on Psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1097-1108.
- Rook, K. 1985 The functions of social bonds: Perspectives from research on social support, loneliness and social isolation. In I.G. Sarason & B.R. Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp.243-267.
- Rook, K.S. 1990 Parallels in the study of social support and social strain. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 118-132.
- Rook, K.S., Pietromonaco, P.R., & Lewis, M.A. 1994 When are dysphoric individuals distressing to others and vice versa? Effects of friendship, similarity, and interaction task. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 548-559.
- Rowlison, R.T. & Felner, R.D. 1988 Major life events, hassles, and adaptation in adolescence:

- Confounding in the conceptualization and measurement of life stress and adjustment revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 432-444.
- Ruehlman, L.S. & Wolchik, S.A. 1988 Personal goals and interpersonal support and hindrance as factors in psychological distress and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 293-301.
- Rusbult, C.E. & Arriaga, X.B. 1997 Interdependence Theory. In S. Duck (Ed.), *Handbook of Personal Relationships* (2nd edn). John Wiley & Sons Ltd. Pp. 221-250.
- Ryff, C.D. 1989 Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- 坂田成輝 1989 心理的ストレスに関する一研究—コーピング尺度 (SCS) の作成の試み 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 38, 61-72.
- 桜井茂男 1995 高校生におけるハーディネスとストレスの関係 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 85.
- Sandler, I.N. & Barrera, M., Jr. 1984 Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, 12, 37-52.
- Sandler, I.N. & Lakey, B. 1982 Locus of control as a stress moderator: The role of control perceptions and social support. *American Journal of Community Psychology*, 10, 65-80.
- Sarason, B.R., Pierce, G.R., Shearin, E.N., Sarason, I.G., Waltz, J.A., & Poppe, L. 1991 Perceived social support and working models of self and actual others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 273-287.
- Sarason, B.R., Sarason, I.G., & Gurung, R.A.R. 1997 Close personal relationships and health outcomes: A key to the role of social support. In S. Duck (ed.), *Handbook of Personal Relationships: Theory, Research and Interventions* (2nd edition). John Wiley & Sons. Pp. 547-573.
- Sarason, B.R., Sarason, I.G., Hacker, T.A., & Basham, R.B. 1985 Concomitants of social support: Social skill, physical attractiveness, and gender. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 469-480.
- Sarason, B.R., Shearin, E.N., Pierce, G.R., & Sarason, I.G. 1987 Interrelations of social support measures: Theoretical and practical implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 813-832.
- Sarason, I.G., Levine, H.M., Basham, R.B., & Sarason, B.R. 1983 Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 127-139.
- Sarason, I.G., Sarason, B.R., & Shearin, E.N. 1986 Social support as an individual difference variables: Its stability, origins, and relational aspects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 845-855.
- 佐藤正二 1996 引っ込み思案と社会的スキル 相川 充・津村俊充 (編) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 Pp.93-110.
- 佐藤慶幸 1971 組織におけるコンフリクト 日本社会心理学会 (編) 葛藤と紛争—年報社会心理学・第12号— 勁草書房 Pp.106-121.

- Schmutte, P.S. & Ryff, C.D. 1997 Personality and well-being: Reexamining method and meanings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 549-559.
- Schuster, T.L., Kessler, R.C., & Aseltine, R.H., Jr. 1990 Supportive interactions, negative interactions, and depressed mood. *American Journal of Community Psychology*, 18, 423-438.
- Schwartz, L., Slater, M.A., & Birchler, G.R. 1994 Interpersonal stress and pain behaviors in patients with chronic pain. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 861-864.
- Seiffge-krenke, I. & Shulman, S. 1993 Stress, coping and relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates, Pp. 169-196.
- 関 崎一・浦上昌則 1996 青年期人間関係の現代的課題 斎藤誠一 (編) 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 Pp.169-192.
- 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち— サイマル出版会
- 千石 保 1994 マサツ回避の世代—若者のホンネと主張— PHP 研究所
- 千石 保 1996 「まじ」の哲学—平成若者論— 角川書店
- 島井哲志 (編) 1997 現代心理学シリーズ 15 健康心理学 培風館
- Shinn, M., Lehmann, S., & Wong, N.W. 1984 Social interaction and social support. *Journal of Social Issues*, 40, 55-76.
- Shultz, D. 1977 *Growth Psychology: Models of the Healthy Personality*. Litton Educational Publishing, Inc. (D. シュルツ著 上田吉一監訳 1982 健康な人格—人間の可能性と七つのモデル— 川島書店)
- Sillars, A.L. 1980 Attributions and communication in roommate conflicts. *Communication Monographs*, 47, 180-200.
- Slavin, L.A. & Rainer, K.L. 1990 Gender differences in emotional support and depressive symptoms among adolescents: A prospective analysis. *American Journal of Community Psychology*, 18, 407-421.
- Smith, T.W. 1992 Hostility and health: Current status of a psychosomatic hypothesis. *Health Psychology*, 11, 139-150.
- 外林大作・辻 正三・島津一夫・能見義博 (編) 1981 誠信心理学小辞典 誠信書房
- Sternberg, R.J., & Soriano, J.L. 1984 Styles of conflict resolution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 115-126.
- Stone, G.C. 1987 *Health Psychology*. University of Chicago Press, Inc. (G.C. ストーン編著 本明寛・内山喜久雄 1990 健康心理学—専門教育と活動領域— 実務教育出版)
- 菅沼 崇・福岡欣治・橋本 剛 1997 対人関係の光と陰 対人行動学研究, 15, 33-48.
- 菅沼 崇・古城和敬・松崎 学・上野徳美・山本義史・田中宏二 1996 友人のサポート供与がストレス反応に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 36, 32-41.
- 菅沼 崇・浦 光博 1997 道具的行動と社会情緒的行動がストレス反応と課題遂行に及ぼす効果—リーダーシップとソーシャル・サポートの統合的アプローチ— 実験社会心理学研究, 37, 138-149.
- 菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル 相川 充・津村俊充 (編) 対人行動学研究シリーズ 1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 Pp.111-128.

- Suh,E.,Diener,E.,& Fujita,F. 1996 Events and subjective well-being: Only recent events matter. *Journal of Personality and Social Psychology*,70,1091-1102.
- Suitor,J.J. & Pillemer,K. 1993 Support and interpersonal stress in the social networks of married daughters caring for parents with dementia. *Journal of Gerontology: Social Sciences*,48,S1-S8.
- 高井次郎 1994 対人コンピテンス研究と文化的要因 対人行動学研究,12,1-10.
- 竹内 啓 (監修) 高橋行雄・大橋靖雄・芳賀敏郎 (著) 1989 SASによる実験データの解析 東京大学出版会
- 田尾雅夫・久保真人 1996 パーンアウトの理論と実際ー心理学的アプローチー 誠信書房
- Tardy,C.H. 1985 Social support measurement. *American Journal of Community Psychology*,13, 187-202.
- 田多井吉之介 1980 (新版) ストレスーその学説と健康設計への応用ー 創元医学新書
- Taylor,S.E. 1991 Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization-minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*,110,67-85.
- Taylor,S.E. & Aspinwall,L.G. 1996 Mediating and moderation processes in psychosocial stress: Appraisal, coping, resistance, and vulnerability. In H.B.Kaplan (Ed.), *Psychosocial Stress: Perspectives on Structure, Theory, Life-Course, and Methods*. Academic Press. Pp.71-110.
- Taylor,S.E. & Brown,J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*,103,193-210.
- Thoits,P.A. 1982 Conceptual,methodological,and theoretical problems in studying social support as a buffer against life stress. *Journal of Health and Social Behavior*,23,145-159.
- Thoits,P.A. 1986 Social support as coping assistance. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,54,416-423.
- Tilden,V.P. & Galyen,R.D. 1987 Cost and conflict: The dark side of social support. *Western Journal of Nursing Research*,9,9-18.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関連 健康心理学研究,10(1),23-32.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1993 オプティミストは健康か? 健康心理学研究,6(2),1-11.
- 藤南佳代・園田明人 1994 ストレス反応に及ぼすストレスナー経験量と楽観性の効果 心理学研究,65,312-320.
- 藤南佳代・園田明人・大野 裕 1995 主観的健康観尺度 (SUBI) 日本語版の作成と、信頼性、妥当性の検討 健康心理学研究,8(2),12-19.
- 鶴田和美・森田美弥子 1992 キャンパスにおける心の成長ー自分らしさを求めてー 田畑治・蔭山英順・小嶋秀夫 (編) 現代人の心の健康ーライフサイクルの観点からー 名古屋大学出版会 Pp.92-106.
- Turner,J.C. 1987 *Rediscovering the social group:A self-categorization theory*. Blackwell Publishers,Oxford,England through Tuttle-Mori Agency,Inc.,Tokyo (J.C.ターナー著 蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美訳 1995 社会集団の再発見ー自己カテゴリー化理論ー 誠信書房)
- Turner,R.J.,Wheaton,B.,& Lloyd,D.A. 1995 The epidemiology of social stress. *American Sociological Review*,60,104-125.

- Tversky, A. & Kahneman, D. 1981 The framing of decisions and the psychology of choice. *Science*, 211, 453-458.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—サイエンス社
- 浦 光博・高野優子 1995a 対人関係の肯定的側面と否定的側面の関連の分析 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 308-311.
- 浦 光博・高野優子 1995b 対人関係と健康との関連の変容過程の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 14-17.
- Utley, M.E., Richardson, D.R., & Pilkington, C.J. 1989 Personality and interpersonal conflict management. *Personality and Individual Differences*, 10, 287-293.
- van de Vliert, E. & Euwema, M.C. 1994 Agreeableness and activeness as components of conflict behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 674-687.
- Vaux, A. 1985 Variations in social support associated with gender, ethnicity, and age. *Journal of Social Issues*, 41, 89-110.
- Vaux, A. & Harrison, D. 1985 Support network characteristics associated with support satisfaction and perceived support. *American Journal of Community Psychology*, 13, 245-268.
- Vinokur, A.D., Price, R.H., & Caplan, R.D. 1996 Hard times and hurtful partners: How financial strain affects depression and relationship satisfaction of unemployed persons and their spouses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 166-179.
- Vinokur, A., Schul, Y., & Caplan, R.D. 1987 Determinants of perceived social support: Interpersonal transactions, personal outlook, and transient affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1137-1145.
- Vinokur, A.D. & van Ryn, M. 1993 Social support and undermining in close relationships: Their independent effects on the mental health of unemployed persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 350-359.
- 和田 実 1990 青年の対人関係の変容 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版 Pp.83-102.
- 和田 実 1991a 対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度および社会的スキル尺度の作成—実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- 和田 実 1991b 対人的有能性とソーシャルサポートの関連: 対人的に有能な者はソーシャルサポートを得やすいか? 東京学芸大学紀要(第1部門) 教育科学, 42, 183-195.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- 若林 勲 1981 ホメオステシス 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田 新(監修) 新版心理学事典 平凡社 Pp.766-767.
- Wanger, B.M. & Compas, B.E. 1990 Gender, instrumentality, and expressivity: Moderators of the relation between stress and psychological symptoms during adolescence. *American Journal of Community Psychology*, 18, 383-406.
- Wanger, B.M., Compas, B.E., & Howell, D.C. 1988 Daily and major life events: A test of an integrative model of psychosocial stress. *American Journal of Community Psychology*, 16.

189-205.

- 渡辺浪二 1996 対人不安と社会的スキル 相川 充・津村俊充(編) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 Pp.147-169.
- Wheaton,B. 1978 The sociogenesis of psychological disorder: Reexamining the causal issues with longitudinal data. *American Sociological Review*,43,383-403.
- Wheaton,B. 1990 Life transitions, role histories, and mental health. *American Sociological Review*,55,209-223.
- Wheaton,B. 1996 The domains and boundaries of stress concepts. In H.B.Kaplan (ed.), *Psychological Stress: Perspectives on Structure,Theory,Life-Course,and Methods*. Academic Press Pp.29-70.
- Wortman,C.B. & Dunkel-Schetter,C. 1979 Interpersonal relationships and cancer: A theoretical analysis. *Journal of Social Issues*,35,120-155.
- Wortman,C.B. & Lehman,D.R. 1985 Reactions to victims of life crises: Support attempts that fail. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers.Pp.463-489.
- 八尋華那雄・井上眞人・野沢由美佳 1993 ホームズらの社会的再適応評価尺度 (SRRS) の日本人における検討 健康心理学研究,6(1),18-32.
- 山口裕幸 1997 組織内の葛藤 大淵憲一(編著) 現代応用社会心理学講座3 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 Pp.278-297.
- 山本和郎 1985 心理的ストレス研究の流れ 石原邦雄・山本和郎・坂本 弘(編) 講座生活ストレスを考える 第1巻 生活ストレスとは何か 垣内出版 Pp.9-34.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究,34,105-115.
- 吉田俊和 1997 対人関係能力の低下が「社会」にもたらす影響 名古屋大学教育学部紀要(心理学) ,44,29-32.
- 吉野絹子 1987 対人的葛藤の解決過程の分析(1) —葛藤に関する反応パターンとその類型化— 社会心理学研究,2,35-44.
- 吉野絹子 1993 対人的葛藤の解決過程の分析(2) —個人の反応パターンのタイプとその個人特性— 社会心理学研究,8,222-234.
- Zautra,A.J.,Guarnaccia,C.A.,& Reich,J.W. 1988 Factor structure of mental health measures for older adults. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,56,514-519.
- Zautra,A.J.,Reich,J.W.,& Guarnaccia,C.A. 1990 Some everyday life consequences of disability and bereavement for older adults. *Journal of Personality and Social Psychology*,59,550-561.
- Zimbardo,P.G.,Pilkonis,P.A.,& Norwood,R.M. 1975 The social disease called shyness. *Psychology Today*,8,68-72.

おわりに

『現代科学は人間の認識能力をその限界まで広げてきた。19世紀には、よく教育された人なら誰でも、その時代の最新の物理学を理解することができたが、20世紀に入ると「よほどのおたく以外には、それが難しくなった」。』

—N. チョムスキー

筆者が心理学を志した理由は、「僕はどうすれば幸せになれるのだろうか」という単純な疑問の究明であった。そして心理学は確かに数多くの有用な知見を筆者に提供してくれた。しかし、単純な疑問に対する単純な回答は決して提示されることはなく、というより、心理学は回答を提示することを放棄しているように筆者には思えた。パラダイムにおける事象の説明に終始し、個人、そして社会への指針という観点が今日の心理学には欠落しがちであるように筆者には思えてならなかった。そこに研究の没価値的規範があるとしても、個人の情報処理能力を越えた知識の細分化、知識そのものを理解できても知識の持つ影響力まで把握できない危険性、現実社会の要求への対応力などの諸問題はしばしば筆者に無力感を感じさせた。今日、自然科学に対してさえもその没価値性が否定されつつある時代において、心理学も真実の追求を終着点とせず、その真実がもたらす意味を検証すべきではなからうか。そんな思いを抱きながら、筆者はこの5年間を過ごしてきた。

何が言いたいのかというと、要するに言い訳なのかも知れない。本来課程博士論文とは、個人が扱える限定された範囲内の問題について、堅実かつ精緻な方法に基づいた議論を行い、その後の研究生活の土台として構築されるべきものであろう。しかし本論文は上記の焦りに似た感情も手伝って、筆者の力量をはるかに越えた問題意識に基づき、少なからず非普遍的かつ曖昧な言説が散見されるものとなった。言うまでもなく、それらは科学論文としては欠点として指摘されるべき側面であり、筆者としても反省すべき問題である。

ただ、もちろんベストとは言えないが、筆者の力量ではこれが現在の限界なのであろう。「書きたいこと」、「書けること」、そして「書くべきこと」は、重複する部分もあれば、重複しない部分もある。そしてそれらの兼ね合いに苦慮しつつも、とりあえず書き終えた今、ほんの僅かな達成感の一方で、次の言葉の重みをひしひしと感じている。要するに、今からが問題なのだ。

「論文を書き始めるのに一番いい時機は、その論文を自分の思いどおりに仕上げた瞬間だ。その時までには君もはっきりと、しかも論理的に、理解し始めているからだ。いったい自分は何が本当に言いたいのか、ということ。」

—マーク・トウェイン

なお、本論文は以下の文献に加筆修正し、未発表原稿を加えてまとめたものである。

<論文>

- 橋本 剛 1995 ストレッサーとしての対人葛藤—ストレス低減方略への展望— 実験社会心理学研究, 35, 185-193.
- 橋本 剛 1996 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレスとソーシャルサポートの観点から— 名古屋大学教育学部教育心理学専攻修士論文 (未公刊)
- 橋本 剛 1997 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, 35, 50-64.
- 橋本 剛 1997 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 1997 現代青年の対人関係についての探索的研究—女子学生の面接データから— 名古屋大学教育学部紀要—心理学—, 44, 207-219.
- 橋本 剛 1998 対人関係の否定的側面の生起メカニズム—メタセオリーを用いての展開— 名古屋大学教育学部紀要—心理学—, 45, 27-35.
- 橋本 剛 投稿中 (修正採択決定済) 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究

<学会発表>

- 橋本 剛 1995 対人ストレス生起過程因果モデルの検討 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, 226-227.
- 橋本 剛 1996 対人ストレスイベントの種類を検討—並存的妥当性の観点から— 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 64-65.
- 橋本 剛 1996 対人ストレス生起過程因果モデルにおけるソーシャルサポートの影響 日本グループ・ダイナミクス学会第44回大会発表論文集, 78-79.
- 橋本 剛 1996 ソーシャルネットワークにおけるサポートとストレスが精神的健康に及ぼす影響 日本健康心理学会第9回大会発表論文集, 132-133.
- Hashimoto, T 1997 Relationship between social skills and interpersonal stress events. *Abstract of the Joint Meeting of the 45th Conference of the Japanese Group Dynamics Association and the 2nd Conference of the Asian Association of Social Psychology*, 27.
- 橋本 剛 1997 大学生の対人方略と対人ストレスイベントの関連 日本心理学会第61回大会発表論文集, 352.
- 橋本 剛 1997 大学生における社会的スキルと対人方略の関連 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 324.
- 橋本 剛 1998 青年における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 日本教育心理学会第40回総会, 176.

橋本 剛 1998 対人関係の両価性と精神的健康の因果—縦断データにおける対人ストレス
生起過程因果モデルの妥当性を中心に— 日本グループ・ダイナミックス学会第46回
大会, 52-55.

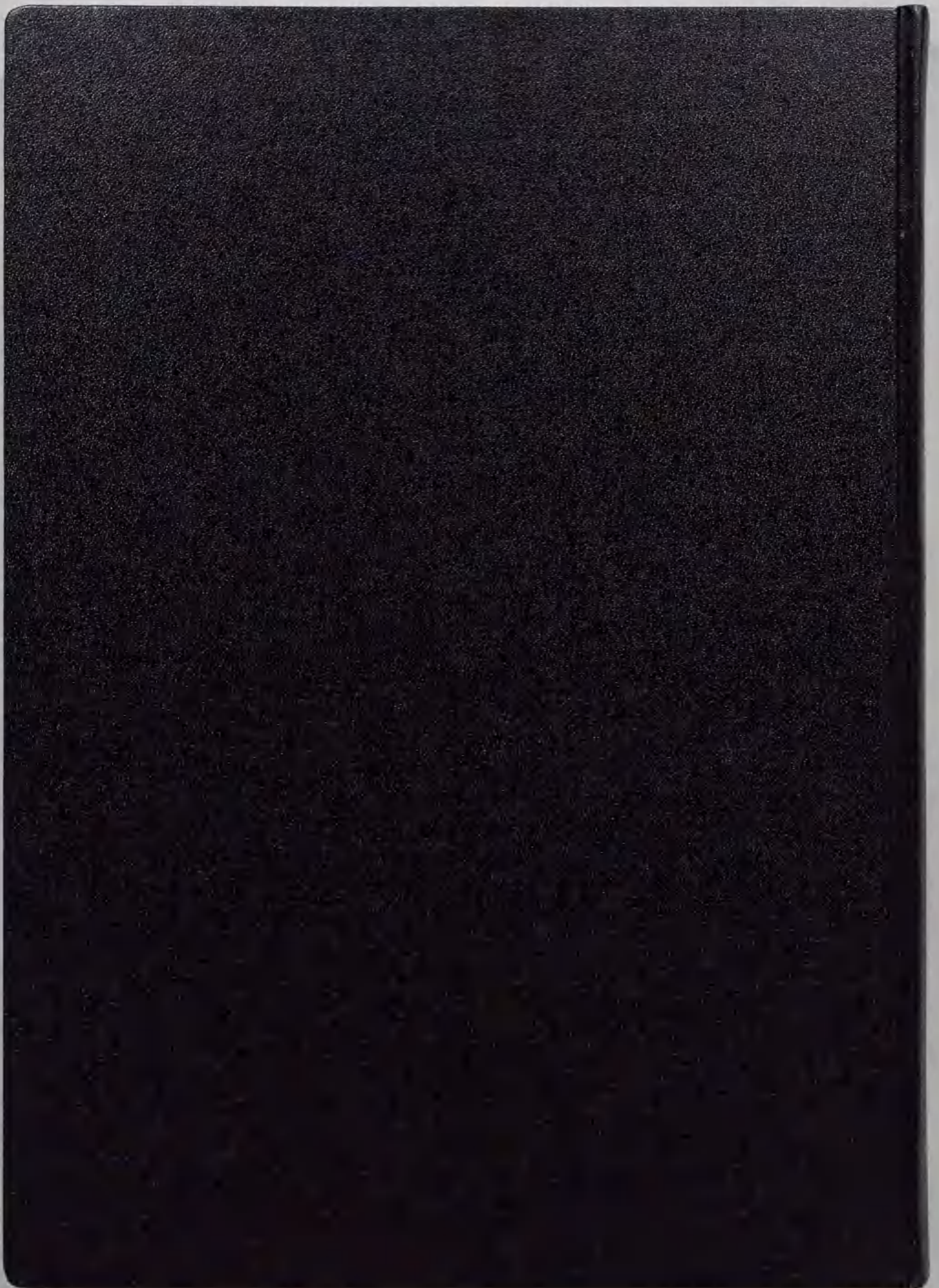
橋本 剛 1998 ネットワークの肯定的/否定的側面と親密度 日本心理学会第62回大会,
379.

橋本 剛 1998 対人ストレス生起過程因果モデルとパーソナリティの関連 日本社会心理
学会第39回大会, 358-359.

何はともあれここまで辿り着くことができたのは、この5年間、課題遂行/情緒安定の
両側面から常に筆者をサポートして下さった吉田俊和先生のお力添えによるものです。こ
こに深く感謝するとともに、今後もさらなるご指導お願い申し上げます。また、本論文の
査読者として貴重なコメントを下された野口裕之先生、金井篤子先生をはじめ、筆者の研
究に貴重なご指導・ご助言下さった名古屋大学教育学研究科の先生方ならびに諸学兄、名
古屋社会心理学研究会の諸先生、全国の研究者諸氏に感謝します。そして、傷つけ合い、
愛し合うことの意味を僕に教えてくれたすべての人々に。

1999年1月

橋本 剛



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

